

# 研究紀要

第16号

2010

## 目 次

序 ..... 天野 忍

### 論文・研究ノート

- ◇愛鷹・箱根山麓の旧石器時代<sup>14</sup>C年代の集成と検討 ..... 三好 元樹 ( 1 )
- ◇静岡県柏崎黒曜石原産地の産状に関する考古学的評価 ..... 阿部 敏・中村 雄紀・三好 元樹・柴田 亮平 ( 9 )
- ◇静岡県東部における縄文時代草創期後半から早期の石器群  
—石器群から見た居住パターンの変化について— ..... 中村 雄紀 ( 19 )
- ◇離鹿塚式の壺の型式変化について ..... 岩本 貴 ( 39 )
- ◇鉢留立間環状鏡板付巻の意義 ..... 大谷 宏治 ( 55 )
- ◇静岡県西部出土の古代製塙土器について（補遺） ..... 大林 元 ( 67 )
- ◇鎔物師の本貫 ..... 足立 順司 ( 73 )
- ◇金属製遺物に付隨する乾燥木材の樹種同定  
—刀剣類の柄と鞘の用材選択— ..... 西尾太加二 ( 87 )



(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所



## 序

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所は、昭和59年5月に設立され、本年度で26年目を迎えました。この四半世紀の間に県内各地で非常に多くの埋蔵文化財の発掘調査・保存処理を実施・報告し、いにしえの人々の息吹を現代に甦らせてまいりました。

文化財保護に携わる組織として、日々、新しい発見が報告される考古学界の動向に目を向けながら、地域の歴史・文化に対する県民の皆さんのお望みに答えるためには、発掘調査を実施する職員の日頃の研究活動が不可欠です。

本年度は8本の論文・研究ノートを収録することができました。これは、職員が日々の調査研究の中で感じた考古学に関する課題・着想について整理し文章化されたものです。ここに執筆者の労をねぎらうとともに、各論文について各位からの惜しみない御指導、御鞭撻をお願い申し上げる次第です。

平成22年3月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所  
所長 天野 忍

# 愛鷹・箱根山麓の旧石器時代<sup>14</sup>C年代の集成と検討

三 好 元 樹

**要旨** <sup>14</sup>C年代測定法は絶対年代を明らかにする最も一般的な方法といえ、AMS法や年代較正の発達によって、その有効性が高まっている。本論では愛鷹・箱根山麓の旧石器時代<sup>14</sup>C年代を集成して検討を行った。各層位の年代測定の現状を把握したうえで、測定結果が多いSC III～BB Iについては想定される<sup>14</sup>C年代値を示した。BB VIでは分析機関により測定結果にずれがある可能性が明らかになった。この問題は、これまでなされた、そしてこれからなされる<sup>14</sup>C年代測定結果の有効性を握るがす大きな問題であり、原因の解明が急がれる。仮定的ではあるが、SC III～BB IについてはCalPal-2007<sub>14C</sub>を用いて較正年代を明らかにした。だが、本論で示された較正年代は他地域の編年やATの年代とずれがあることが分かった。

**キーワード**：旧石器時代、愛鷹・箱根山麓、<sup>14</sup>C年代、AMS法、較正年代

## はじめに

<sup>14</sup>C年代測定法は、絶対年代を明らかにするために考古学で用いられる最も一般的な方法ということができる。文献資料がなく年輪年代測定法も及ばない古い時代では特に重要な方法となる。本論では愛鷹・箱根山麓における旧石器時代の<sup>14</sup>C年代を集成し、現状を把握して、今後の課題を見出すことを目的とする。

## 1 <sup>14</sup>C年代測定法

<sup>14</sup>C年代測定法は、1949年にアメリカの物理学者W.リビーによって発表された。大気中に一定量含まれる<sup>14</sup>Cは生物が生きている間は体内に取り込まれ続け、大気中と同じ割合が維持される。生物が死亡すると、新たに<sup>14</sup>Cを取り込まれることはなくなり、放射性の<sup>14</sup>Cは一定の割合で崩壊していく。残存する<sup>14</sup>Cの割合を測定することで、その生物が死亡した時点を明らかにするのが<sup>14</sup>C年代測定法の方法である。

<sup>14</sup>C年代測定法は発表後、考古学の年代測定に用いられ、世界的に大きな影響を与えた。オリエントの遺物・遺構との対比によって年代を定めることで組み立てられていたヨーロッパの編年は絶対年代が明らかになるに従って、根底的な修正が必要となった（レンフルー1979）。日本にもその影響は及び、縄文時代の開始期が、大陸の遺物との対比によって4,500年前を大きく超ることはないと考える短

期編年と<sup>14</sup>C年代を参照してより古い年代に縄文時代の始まりを置く長期編年の対立を生んだ。

リビーによる発見以後の、<sup>14</sup>C年代測定の大きな進展として、加速器質量分析法（AMS法）と較正年代について述べておきたい。

従来の<sup>14</sup>C年代測定には、<sup>14</sup>Cが崩壊する際に生じるβ線を計測するB線法が用いられていたが、この分析方法は時間がかかるうえに10～100gという多量の資料が必要であった。AMS法は1970年代末に開発され、現在<sup>14</sup>C年代測定法の主流となっている。直接<sup>14</sup>Cの数を計測するこの方法では、処理を経て作られるグラファイトが0.1～1mgというごく少量あれば計測が可能である。計測時間も比較的短く、精度の高い分析が可能となった。AMS法の利用によって、土器付着炭化物や小さい炭化物が計測可能になったことで、<sup>14</sup>C年代測定法の利用幅は大きく広がった。

較正年代の必要性については1960年代半ばから指摘されている。リビーは<sup>14</sup>Cの濃度が過去から現在まで一定であったと仮定していたが、実際は時期によってその濃度が変化していたことが明らかとなった。このことは、<sup>14</sup>C年代測定法によって得られた年代は実際の年代ではないことを意味する。それを是正するために、年輪年代測定法を応用した較正曲線の作成が行われた。その後、年輪年代に加えて、有孔虫の<sup>14</sup>C年代やサンゴのウラン・トリウム年代を用いて、より古い時代まで較正曲線が作成された。現在

よく使われる校正プログラムとしてIntCalとCalPalの2つが挙げられる（中村2007）。

## 2 愛鷹・箱根山麓の旧石器時代AMS年代

愛鷹・箱根山麓は愛鷹ローム層の堆積が良好で、特にATの下位の土層堆積は日本で最も良好といつても過言ではない（第1図）。旧石器時代の遺物の出土も多く、近年の愛鷹南東麓の調査によって資料の蓄積が進んでいる。そうした遺跡の報告書作成に伴い、静岡県埋蔵文化財調査研究所を中心にAMS年代測定が積極的に行われている。この地域で最も早く<sup>14</sup>C年代測定が行われた休場遺跡（杉原・小野1965）をはじめとして、古い測定例は $\beta$ 線法で行われている。 $\beta$ 線法とAMS法では測定精度および測定年代に大きな齟齬があるため、両者を併せて検討することは有意な結果を生まないと判断した。ここではAMS年代のみを取り扱う。

第1表は愛鷹・箱根山麓の旧石器時代AMS年代の集成結果である。年代の幅は1標準偏差（その範囲に収まる確

率が68.26%）で示している。2009年11月まで、9遺跡<sup>1)</sup>から89点の分析結果が得られている。ほぼ半数にあたる44点が向田A遺跡の分析結果である。箱根山麓に位置する遺跡は初音ヶ原遺跡のみで、他は全て愛鷹南東麓の遺跡である。

また、分析機関については測定番号の最初につけられる記号から判断することができる。IAAAは加速器分析研究所、Betaはアメリカのベータ・アナリティック社、PLDはパレオ・ラボによる分析であることを示す。加速器分析研究所による分析が大多数を占める一方で、BBVはベータ・アナリティック社によって分析されたものだけで構成される。

第2図では集成された年代を層位ごとに新しいものから順に配置した。年代の幅は1標準偏差の値を表示している。ここでは各層についてその内容を確認し、現状の資料から概ねどの程度の年代が与えられるかについて述べる。

BBV及びBBIは愛鷹・箱根基本層序の上部ローム下底部に位置する。日本列島において明確な人類の痕跡が現れる時期にあたり重要である。測定例は少なくないが、加速器分析研究所による向田A遺跡の分析結果とベータ・アナリティック社による測定結果に大きな開きがある。この問題は重大であるため、次章で改めて取り上げることとする。梅ノ木沢遺跡9号遺物集中の最も新しいものは誤った値と考えていいだろう。

BBVと次に述べるSCIIIとの間にはBBVとBBIVが存在するが測定結果の報告はなされていない。

SCIIIはその中に複数の層をもつスコリア帶で、間に2枚の黒色帯が挟まれている。s2、b2、s3の測定結果が得られている。平均するとs2よりs3が若干古いようだが、有意な差はあるかは測定例の増加を待って判断したい。現状ではSCIIIに約30,000～28,500yrBPの年代が与えられるという認識に止めておきたい。

BBIIIは様々な遺跡から年代が得られており、一定の時間幅を持つらしいことが分かる。梅ノ木沢遺跡や元野遺跡は比較的新しいもののと捉えられるかもしれない。初音ヶ原遺跡の第5号土坑出土の炭化物は、掘込面と考えられているBBIIIに含めたが、他と比べて年代が古く、より古い時代の炭化物である可能性がある。BBIIIには約28,500～27,500yrBPの年代が与えられる。

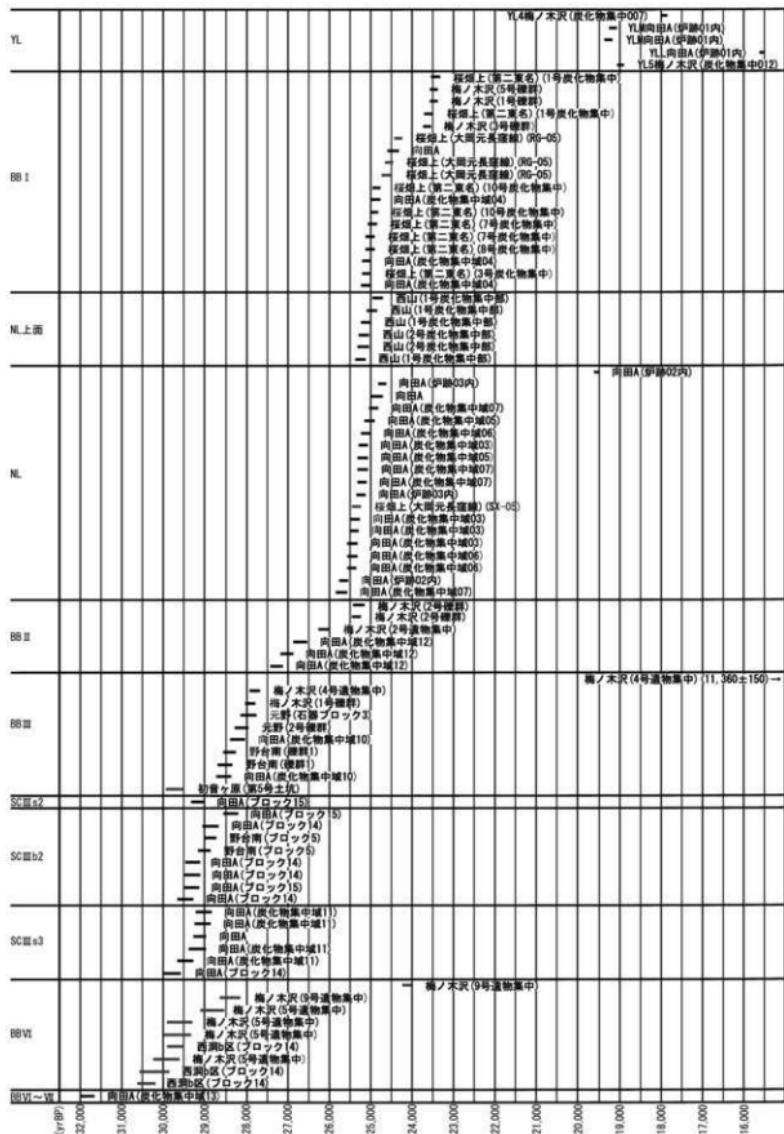
BBIIは向田A遺跡と梅ノ木沢遺跡の測定結果がある。



第1図 愛鷹ローム層土層模式図（高尾2006）

第1表 爰窓・箱根山麓における旧石器時代AMS年代

遺跡名	層位	出土位置	測定番号	Liber Assay(BP) 文獻	測定番号	Liber Assay(BP) 文獻
梅ノ木山遺跡	Y.L.4	遺物集4007	IAAA-80612	17,910 ± 90 IAAA-60449	17,910 ± 90 IAAA-60449	17,910 ± 90 IAAA-60449
向田人遺跡	Y.M.	伊憑口1号	IAAA-80617	13,190 ± 100 IAAA-60448	13,190 ± 100 IAAA-60448	13,190 ± 100 IAAA-60448
向田人遺跡	Y.M.	伊憑口1号	IAAA-10528	15,150 ± 60 60	15,150 ± 60 60	15,150 ± 60 60
向田人遺跡	Y.LL.	遺物集4012	IAAA-80612	18,360 ± 80 100	18,360 ± 80 100	18,360 ± 80 100
梅ノ木山遺跡 第二東名	BB.1 中位	1号遺物集東中部	IAAA-80569	23,420 ± 90 100	23,420 ± 90 100	23,420 ± 90 100
梅ノ木山遺跡	BB.1	5号遺群	IAAA-80615	23,450 ± 100 100	23,450 ± 100 100	23,450 ± 100 100
梅ノ木山遺跡	BB.1	1号遺群	IAAA-80616	23,460 ± 100 100	23,460 ± 100 100	23,460 ± 100 100
長坂上遺跡 第二東名	BB.1 中位	1号遺物集東中部	IAAA-80601	23,600 ± 100 100	23,600 ± 100 100	23,600 ± 100 100
梅ノ木山遺跡	BB.1	3号遺群	PLD.1434	24,320 ± 100 100	24,320 ± 100 100	24,320 ± 100 100
梅ノ木山遺跡	BB.1	RG.05	PLD.1099	24,450 ± 140 140	24,450 ± 140 140	24,450 ± 140 140
梅ノ木山遺跡	BB.1	RG.1433	PLD.1431	24,610 ± 100 100	24,610 ± 100 100	24,610 ± 100 100
梅ノ木山遺跡 第二東名	BB.1 下位	10号遺物集中部	IAAA-80512	24,850 ± 100 100	24,850 ± 100 100	24,850 ± 100 100
向田人遺跡	BB.1	1号遺物集中部	IAAA-80535	24,900 ± 110 110	24,900 ± 110 110	24,900 ± 110 110
長坂上遺跡 第二東名	BB.1 下位	7号遺物集中部	IAAA-80507	24,950 ± 110 110	24,950 ± 110 110	24,950 ± 110 110
長坂上遺跡 第二東名	BB.1 下位	8号遺物集中部	IAAA-80508	25,010 ± 110 110	25,010 ± 110 110	25,010 ± 110 110
向田人遺跡	BB.1	1号遺物集中部	IAAA-80513	25,060 ± 120 120	25,060 ± 120 120	25,060 ± 120 120
長坂上遺跡 第二東名	BB.1 下位	3号遺物集中部	IAAA-80601	25,090 ± 110 110	25,090 ± 110 110	25,090 ± 110 110
向田人遺跡	NL 上面	1号遺物集中部	IAAA-80511	25,100 ± 120 120	25,100 ± 120 120	25,100 ± 120 120
向田人遺跡	NL 上面	1号遺物集中部	IAAA-41166	24,820 ± 130 130	24,820 ± 130 130	24,820 ± 130 130
向田人遺跡	NL 上面	1号遺物集中部	IAAA-41163	24,960 ± 130 130	24,960 ± 130 130	24,960 ± 130 130
向田人遺跡	NL 上面	2号遺物集中部	IAAA-41167	25,150 ± 130 130	25,150 ± 130 130	25,150 ± 130 130
向田人遺跡	NL 上面	2号遺物集中部	IAAA-41168	25,160 ± 130 130	25,160 ± 130 130	25,160 ± 130 130
向田人遺跡	NL 上面	1号遺物集中部	IAAA-41164	25,230 ± 130 130	25,230 ± 130 130	25,230 ± 130 130
向田人遺跡	NL 下位	1号遺物集中部	IAAA-10617	19,340 ± 70 70	19,340 ± 70 70	19,340 ± 70 70
向田人遺跡	NL	伊憑口3号	IAAA-80618	24,710 ± 90 90	24,710 ± 90 90	24,710 ± 90 90
向田人遺跡	NL	伊憑口3号	IAAA-6110	24,940 ± 150 150	24,940 ± 150 150	24,940 ± 150 150
向田人遺跡	NL	伊憑口3号	IAAA-46503	24,910 ± 120 120	24,910 ± 120 120	24,910 ± 120 120
向田人遺跡	NL	伊憑口3号	IAAA-46501	25,010 ± 120 120	25,010 ± 120 120	25,010 ± 120 120
向田人遺跡	NL	伊憑口3号	IAAA-46508	25,090 ± 120 120	25,090 ± 120 120	25,090 ± 120 120
向田人遺跡	NL	伊憑口3号	IAAA-60500	25,170 ± 120 120	25,170 ± 120 120	25,170 ± 120 120
向田人遺跡	NL	伊憑口3号	IAAA-46504	25,180 ± 120 120	25,180 ± 120 120	25,180 ± 120 120
向田人遺跡	NL	伊憑口3号	IAAA-46507	25,190 ± 120 120	25,190 ± 120 120	25,190 ± 120 120
向田人遺跡	NL	伊憑口3号	PLD.1435	25,330 ± 110 110	25,330 ± 110 110	25,330 ± 110 110
向田人遺跡	NL	伊憑口3号	IAAA-60497	25,370 ± 120 120	25,370 ± 120 120	25,370 ± 120 120
向田人遺跡	NL	伊憑口3号	IAAA-46436	25,390 ± 120 120	25,390 ± 120 120	25,390 ± 120 120
向田人遺跡	NL	伊憑口3号	IAAA-60494	25,420 ± 120 120	25,420 ± 120 120	25,420 ± 120 120
向田人遺跡	NL	伊憑口3号	IAAA-46509	25,430 ± 120 120	25,430 ± 120 120	25,430 ± 120 120



第2図 愛鷹・箱根山麓のAMS年代 (—IAAA: —Beta・PLD)

明らかに誤った値と考えられるような大きく外れるものはないが、向田A遺跡が古い値を、梅ノ木沢遺跡が新しい値を示している。梅ノ木沢遺跡の新しい2つの値は次に述べるNLの年代に近い。今後の資料増加を待って判断しなくてはならないが、現状では約27,500～25,500yrBPの年代が与えられるだろう。

NLは向田A遺跡の測定例が大多数を占める。また、NL上面出土の西山遺跡にも多くの測定結果がある。向田A遺跡跡跡02内出土の炭化物1点が飛び抜けて新しく誤った値と考えられる以外はまとまりをみせる。NLとNL上面で大きな年代差は認められない。次で述べるBB Iの下位出土のものとの年代差も少ないとから、NLからBB I下位は比較的短期間に収まると考えられる。堆積にかかる時間が短かったといえるかもしれない。NLとBB Iの時間的境界は明確ではないが、NLには約25,500～25,000yrBPの年代が与えられる。

BB Iは比較的長期間に及ぶことが見て取れる。測定結果からは3時期に分けることができそうである。25,000yrBP前後にまとまる向田A遺跡と桜畠上遺跡(第二東名)第V文化層、24,500yrBP前後にまとまる桜畠上遺跡(大岡元長塗線)、23,500yrBP前後にまとまる梅ノ木沢遺跡と桜畠上遺跡(第二東名)第VI文化層である。中村雄紀は愛鷹・箱根第3期を「BB I下位」、「BB I中～上位」、「SC I～BB 0」、「BB 0～YL下位」の4つに分けており、上記の年代はそれぞれ前3者に相当する(中村2009)。BB I全体としては約25,000～23,500yrBPの年代が与えられる。

BB Iと次に述べるYLとの間にはSC IとBB 0が存在するが、これまで測定結果は報告されていない。

YLはBB 0以降、旧石器時代の終わりまでの遺物を包

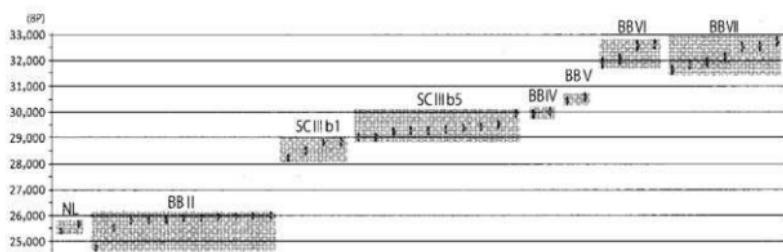
含することから長期間であることが予想されるが、分析事例は少なく、また、ばらつきも大きく不明な点が多い。

### 3 $^{14}\text{C}$ 年代の問題点と課題

前章で述べたように、SC III～BB Iにかけては分析例も多く、分析結果も安定しており、ある程度年代を推定することができた。一方、新しい時期にあたるSC I～YLについては分析結果が乏しく検討できなかった。また、古い時期であるBB IV～BB VIIについても分析結果は多くなく、今後の資料増加に期待するところが大きい。

その中のBB VIの分析は多くなされている。その年代は概ね30,500～28,500yrBPにまとまっている。ここで、正式な分析報告はまだなされていないが、図で示されている愛鷹南東麓の富士石遺跡の分析結果(阿部2009)を参照したい(第3図)。加速器分析研究所によって行われた分析結果をまとめたもので、ほとんどの値は本論の集成で得られた結果と整合的である。だが、BB VIについては32,000yrBPより古い値を示す傾向がある。これは同じく加速器分析研究所によって行われた向田A遺跡BB VI～VIIや第1図に示されているBB VIIと考えられる年代値<sup>2)</sup>とは適合する値であるが、ベータ・アナリティック社によって行われたBB VIの分析結果とは2,000年ほどの開きがある。現状で断定することはできないが、分析機器間に測定値に違いがある可能性があり、重大な問題を含んでいると考えられる。

加速器分析研究所以外の分析結果として、桜畠上遺跡(大岡元長塗線)ではパレオ・ラボによる分析がなされている。こちらの値は少なくとも見かけ上は加速器分析研究所の測定結果との齟齬は生じていないようである。



第3図 富士石遺跡の $^{14}\text{C}$ 年代(阿部2009)

第2表 愛鷹・箱根山麓の<sup>14</sup>C年代と較正年代

	<sup>14</sup> C年代 (yrBP)	較正年代 (calBP)
BB I	25,000~23,500	30,000~28,000
NL	25,500~25,000	30,500~30,000
BB II	27,500~25,500	32,000~30,500
BB III	28,500~27,500	33,000~32,000
SC III	30,000~28,500	34,000~33,000
BBVI	(31,500~28,500)	(34,500~33,000)

分析結果に差異が生じた要因は明らかではない。例えば、前処理が不十分であった場合に測定結果が古く出される可能性があることが指摘されている（澤美ほか2009）。また、それぞれの炭化物の出土層が確かか、そして土層の認識に誤認がないかを確かめる必要もあるだろう。<sup>14</sup>C年代を用いる研究を進めていくうえで、この問題は解決しなくてはならない課題である。

#### 4 較正年代と他地域との比較

<sup>14</sup>C濃度が時期によって異なるために、<sup>14</sup>C年代が実際に何年前であるかを示すものではないことははじめに述べた。較正プログラムを利用して、較正年代に変えることで実際の年代により近い値を得ることができる。<sup>14</sup>C年代とは異なる方法で得られた古環境などの年代との比較には較正年代を用いる必要がある。ここでは較正年代を求める、他地域との比較を試みたい。

ここではCalPal-2007<sub>half</sub>を用いて較正年代を求める。これはIntCal04では有効な年代が26,000年前までとされており、それより古い時期を含む旧石器時代をカバーできないからである（工藤2009）。

1章で誤った値と判断したものを除いて、較正年代を求めた。計算にはgroupのプログラムを用いた。このプログラムを用いることで複数のデータをまとめて較正年代を求めることができる。層位ごとの<sup>14</sup>C年代をまとめて計算した。ただし、年代にばらつきのあるBB Iについては、向田A遺跡、桜畠上遺跡（第二東名）BB I下位、桜畠上遺跡（大岡元長塚線）を前半、梅ノ木沢遺跡、桜畠上遺跡（第二東名）BB I中位を後半として分けて計算した。較正を行う<sup>14</sup>C年代値は第1表に示した1標準偏差の値を用いた。較正の結果を1標準偏差で以下に示す。BBVI~VIIが35,940~35,400calBP、BB VIが34,380~32,950calBP、SC III s 3が33,970~33,380calBP、SC III b 2が33,890~33,160calBP、SC III s 2が33,910~33,330calBP、BB III

が32,960~32,260calBP、BB IIが31,730~30,090calBP、NLが30,340~29,900calBP、NL上面が30,120~29,840calBP、BB I前半が29,950~29,520calBP、BB I後半が28,300~28,130calBP、YLが23,170~21,420calBPであった。これらの値をもとに測定結果が多く得られているため有意と考えられる層位についてまとめたのが第2表である。

これらの値を関東地方における年代値と対比させてみる。工藤雄一郎が本論と同じCalPal-2007<sub>half</sub>を用いて年代を提示している（工藤2008）。武藏野台地のX・IX層が38,000~32,000calBP、VI・VII層が32,000~29,000calBP、V・IV下層が28,000~25,000calBPのことである。石器群の様相からはSC III上部～NLが武藏野のVII・VI層に対応すると考えられる（高尾2006:p.67）が、本論で示した値と比べると、開始時期で2,000年の差が生じている。

さらに、愛鷹ローム層ではNL中にAT火山灰が含まれることが知られているが、ATの年代は30,000~26,000calBPとされている（町田・新井2003）。本論で示したNLの較正年代である30,500~30,000calBPはその値と重複せず、古い<sup>3</sup>。このように本論で示した年代は他の年代測定結果として示されているものに比べて古い傾向がある。前章で示した問題点を解決することがこの点を明らかにすることに関わっているかもしれない。

#### おわりに

本論では古環境の変遷や他地域の石器群との比較を可能にするための基礎作業として、<sup>14</sup>C年代の集成を行った。本論執筆に関わる作業を始めるにあたって、第二東名建設事業に伴う発掘調査の報告書が次々と刊行されつつある中で、これを持たずしてこのような作業を行うのは時期尚早かとも思われた。ただ、今後の分析への指針を示すことは重要であろうと考えた。BBIVより古い時期とSC Iより新しい時期の分析結果が不足していることを示した点で有効であったと考えている。

更に重要なのは、2章で述べたような年代のずれが分析結果間に生じていることが明らかになった点である。この問題は、これまでなされた、そしてこれからなされる<sup>14</sup>C年代測定結果が水泡に帰する可能性もある重大な問題である。この問題を解決せずに、今後<sup>14</sup>C年代をめぐる議論を

行うことは困難と言わざるを得ない。本論ではその責を果たすことができなかつたが、早急に解決されるべき問題と考える。

本論執筆にあたり阿部敬氏にご教示いただいた。また、水野豈氏には作成の協力を賜った。感謝申し上げる。

脱稿後の2009年12月、較正プログラムのIutCalの最新版IutCal09が公表された。有効な年代が50,000年前までとされており、日本列島の後期旧石器時代をカバーできるようになった。本論で用いたCalPal-2007<sub>Hole</sub>とIutCal09とでは、26,000yrBP以前の較正において500年以上の差が生じる部分もある（工藤2010の図3を参照）。ただし、本論で示した値が無効になる程の大きな違いではないと考える。

## 註

1 桜畠上遺跡は調査委託者の違いによって大岡元長塙線と第二東名の報告が別々になされている。本論では混同を避けるため遺跡名の後に道路の名称を入れ、別々の遺跡として取り扱っている。

2 分析番号がIAAA-10714であることから加速器分析研究所によるAMS測定であることは明らかだが、詳細が明らかでないため本論の集成対象とはしていない。

3 第14回石器文化研究交流会（2009年11月22日）において、富士石遺跡の<sup>14</sup>C年代測定結果から、阿部敬が口頭で同様の指摘を行っている。

## 引用参考文献

渥美智・米田穂・柴田康行・保倉明子・中井泉2009「放射性炭素年代測定における炭化物資料の酸一塩基一酸前処理法に対する科学的検証」『第四紀研究』48-4、日本第四紀学会、pp.289-294

阿部敬2009「富士石遺跡（第二東名No.142地点）」『石器文化研究』15、石器文化研究会、pp.81-84

加速器分析研究所2006「放射性炭素年代測定結果 報告書（AMS測定）」『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告170 西山遺跡』pp.162-166

加速器分析研究所2007「放射性炭素年代測定結果報告」『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告178 向田A遺跡』pp.233-234

加速器分析研究所2008「元野遺跡（第二東名No.19地点）年

代測定結果報告書」『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告189 元野遺跡』pp.340-341

加速器分析研究所2009a「野台南遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）」『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告205 野台南遺跡』pp.143-148

加速器分析研究所2009b「平成20年度放射性炭素（<sup>14</sup>C）年代測定」『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告206 梅ノ木沢遺跡II』pp.247-250

加速器分析研究所2009c「桜畠上遺跡における放射性炭素年代」『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告208 桜畠上遺跡』pp.285-288

工藤雄一郎2008「40~15kaの石器群の年代と古環境」『日本旧石器学会第6回講演・研究発表シンポジウム予稿集 日本列島の旧石器時代遺跡—その分布・年代・環境—』pp.51-54

工藤雄一郎2010「旧石器時代研究における年代・古環境論」『講座日本の考古学』1、青木書店、pp.124-155

古環境研究所1999a「沼津市、西洞遺跡の自然科学分析」『沼津市文化財調査報告書69 西洞遺跡（b区-1）発掘調査報告書』沼津市教育委員会、pp.297-301

古環境研究所1999b「年代測定1」「初音ヶ原遺跡」三島市教育委員会、p.401

古環境研究所2009「平成13年度放射性炭素（<sup>14</sup>C）年代測定・火山灰分析」『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告206 梅ノ木沢遺跡II』pp.239-246

杉原莊介・小野真一1965「静岡黒体場遺跡における細石器文化」『考古学集刊』3-2、東京考古学会、pp.1-33

高尾好之2006「東海地方の地域編年」「旧石器時代の地域編年」の研究』同成社、pp.61-102

中村雄紀2007「編年」「ゼミナール旧石器考古学」同成社、pp.179-194

中村雄紀2009「旧石器時代」「静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告208 桜畠上遺跡」pp.271-274

パリノ・サーキュエイ株式会社2007「向田A遺跡で検出された旧石器時代跡跡の自然科学調査」『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告178 向田A遺跡』pp.207-232

パリノ・サーキュエイ株式会社2009「平成13年度配石炉等に関する総合的自然科学分析」『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告206 梅ノ木沢遺跡II』pp.215-238

町田洋・新井房夫2006「新編火山灰アトラス」東京大学出版会

山形秀樹2003「放射性炭素年代測定」「静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告138 大岡元長塙線関連遺跡I」pp.248-250

レンフルー、C.（大貫良夫訳）1979「文明の誕生」岩波書店

# Compilation and Examination of Radiocarbon Ages in the Paleolithic Era of the Foothills of Mt. Ashitaka-Hakone

Motoki MIYOSHI

**Summary:** Carbon-14 dating is the most general method to clarify absolute ages. Its validity has been firmer with development of the calibration and AMS.

In this paper, I examine radiocarbon ages in the Paleolithic era of the foothills of Mt. Ashitaka-Hakone. For SC III - BBI, which has amount of data, I used Carbon-14 dating on the basis of current state of stratigraphy dating. As for BBVI, I found that results given by several analysis organs are different one from another. That is a sever problem in term of validity of Carbon-14 dating which has done and which will be done. We must find out its cause in a hurry. To clarify calibrated ages for SC III - BBI, provisionally though, I used CalPal-2007. The calibrated ages shown in this paper were known that they are different from chronology and AT-tephra ages shown in other region.

**Keywords:** Paleolithic era, foothills of Mt. Ashitaka-Hakone, radiocarbon ages,  
AMS (Accelerator Mass Spectrometry), calibration

# 静岡県柏崎黒曜石原産地の産状に関する考古学的評価

阿部敬・中村雄紀・三好元樹・柴田亮平

**要旨** 伊豆半島東部にある柏崎黒曜石原産地に関する地質学文献の抄録と現地踏査を行った。調査成果とその評価は以下の通り: ①黒曜石産出岩体は宇佐美火山よりも新しい第四紀の「柏崎石英安山岩」である。②散在する黒曜石の分布範囲はこの岩体の分布範囲にだいたい収まる。③黒曜石原石のサイズは露頭の大型亜角礫と露頭直下の小型亜角礫とで二極化している。④発見露頭の規模とそれに付随する黒曜石の大きさ・質は、愛鷹・箱根第2期に安定供給された大型・良質原石には見合わないが、同第三期や武藏台地IV下・V上層階の供給原石としてはありえた。⑤初期細石刃石器群に伴う代官山型細石刃核に選択的に利用された小型亜角礫は、発見された小規模な露頭直下でも大量に分布する。⑥踏査で採集された細石刃核は剥片素材で、しかも代官山型より際立って大きく、異なる時期そしてあるいは地域的な細石刃石器群の存在を暗示する。⑦柏崎産黒曜石はその利用目的に対して原石の産状と採取方法とが密接に関連する。

**キーワード:** 伊豆半島、柏崎、石英安山岩、黒曜石、産状、細石刃核、代官山型

## はじめに

伊豆半島に柏崎（かしわとうげ）と呼ばれる黒曜石原産地がある。この原産地を考古学的な意味で最初に発見したのは河辺寿栄という伊東市の巡査だといわれている（長田1990）。戦前のことだ。伊豆半島の繩文土器を研究したことで著名な江藤千萬樹と長田寅も、その河辺に連れられて露頭に赴いたのだという。それから時を経た現在、原産地の存在は誰もが知るところとなり、また螢光X線分析の進展により周辺地域の利用状況もよく分かるようになってきている。しかし、このようによく知られている原産地にもかかわらず、未だ組織立った調査が行われることもなく長らく手つかずの状態にあるというのは実は不思議なことであり、また残念なことでもある。そこで筆者らは、今日あらためて認識されている原産地調査の考古学的重要性（田村ほか2006）を顧みつつ、これまでの踏査・採集記録（調訪問2001、池谷2003）に基づいて現地を再確認するとともに、現状をできるだけ正確に記録することを主目的とした調査を行い、さらに得られた成果について考古学的な観点から評価することにした。本稿は1～3を阿部、4を中村、5を柴田、6を三好が書き、全体のまとめを阿部が担当した。

## 1. 地形と地質

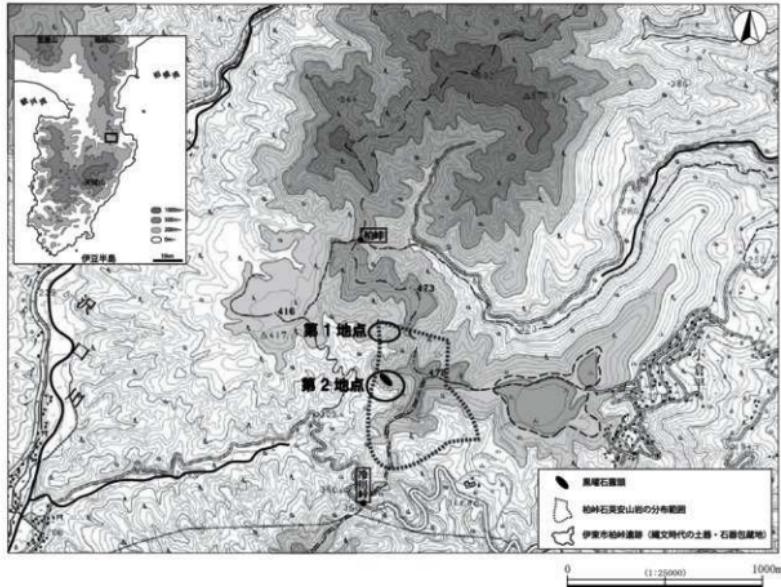
柏崎は伊豆半島中南部に聳える天城山から北東に連なる低山の合間、標高約451mにある。付近は、北流して駿河

湾北部に注ぐ狩野川の上流にある冷川ないし沢口川と、伊東市方面に東流して相模湾に注ぐ伊東大川の支流とが接する分水嶺である。天城連山には多くの峠があり、それぞれに伊豆の東西を繋ぐ隘路が交差している。かつて柏崎もまたそれらのひとつで、道路の発達が十分でなかった頃の主要な交通路であった。

この辺り一帯の表層地質は、新第三紀中新世の火山岩類を主体とする湯ヶ島層群と白浜層群を基盤として、鮮新世の安山岩の溶岩・火碎岩・貫入岩体やデイサイトないし流紋岩の溶岩が小規模に重なり、さらに上位に第四紀の天城火山、大室火山、宇佐美火山の溶岩等が広く覆っている（久野1970、三梨ほか1980）。このなかで、柏崎から冷川峠と城山の表層をなしているのは小規模な石英安山岩岩体で、その年代は鮮新世に属するものと理解してきた。

しかし、この石英安山岩は北に隣接する宇佐美火山（1.0Ma-0.5Ma：高木・小山1992）を置いていることから、第三紀ではなく第四紀に属し（小山1982）、さらに岩質と層位の類似からすると、日金・上多賀・軽井沢・伊豆山・鎧治屋といった他の石英安山岩と同じ「小規模なデイサイトの溶岩流または溶岩円頂丘」（高木・小山1992）で、久野が分離した輝石石英安山岩小噴出岩帶（久野1952）のグループに含まれる（Koyama and Umino 1991）。

直接的な年代は未測定ながら、同グループのフィッシュショットラック年代は、日金が0.57Ma、上多賀が0.51Ma、鎧治屋が0.39Maである（鈴木1970）。また、柏崎を加え



第1図 黒曜石採集地点

た上記の小噴出岩体6地点すべての古地磁気極性が正帯磁（小山1982）であることから類推すると、柏崎もまた第四紀の0.7Ma（または0.6Ma：小山2008）から0.3Maのなかに収まる可能性が高いとされている（高山・小山1992）。この岩帶は「柏崎石英安山岩」と命名されている（久野1970、小山1982）。

筆者らの踏査でも柏崎と冷川岬の間でやはり上記のデイサイト（石英安山岩）～流紋岩が露出しているのを追認できた。見た目にはデイサイト質の白っぽくボソボソした岩石やそれらの粘土化した岩体が斜面の所々に脈状に連なった状態で認められた。黒曜石はそうした岩体に挟まれ、粘土化した「デイサイト質溶岩流中に幾重にもわたる黒曜石の岩脈が認められる」（池谷2009）。これが柏崎産黒曜石の産出岩体、柏崎石英安山岩であるのは間違いない。

## 2. 踏査行程の概要

2009年6月から7月にかけて計3次の踏査を実施した。調査内容は、誌上報告を前提とした①遺物の採集、②原石の採集、③露頭の探索、の3項目とした。各踏査の概要は以下の通りである。

**第1次** 柏崎から冷川岬までの稜線上を北から1/4程度までの範囲を中心に行い、剥片1点を採集した。

**第2次** 森嶋富士夫に原石採集可能地について教示を頂いたうえで、柏崎から冷川岬までの1/2程度までの範囲を踏査した。結果、黒曜石散布地を2地点確認し（第1図）、原石と石器を探集した。この2地点は、より北側を第1地点、南側を第2地点とした。

**第3次** 両地点のそれぞれにおいて任意の2箇所で表面採集を行った。また、第2次と同様、設定区画外での遺物採集も行った。このとき第2地点で小規模な露頭を発見した。採集資料の整理は静岡県埋蔵文化財調査研究所（長泉地区事務所）の一角を借りて行った。

## 3. 試料採集地点の散布状況

踏査対象としたのは柏崎から冷川岬までの稜線上から南・西側斜面（伊豆市側）である。北・東側（伊東市側）については斜面が急で危険な箇所が多いため行っていない。また、伊東市が登録している縄文時代の埋蔵文化財包蔵地である「柏崎遺跡」については岩体の分布範囲から外れた場所ということもあり未踏査である。



写真 第2地点の黒曜石露頭

**第1地点** 柏崎から冷川峠に繋がる稜線上を南西に向かい、比較的広い平坦面のある標高473m地点から主稜線を外れ、南へ下る尾根の東側斜面をつたっていくと原石の散布地が確認できた。分布密度は低く、露頭は発見できなかつた。ただし、この地点の小尾根の北側斜面の谷で大型の原石が採集されたことから、付近に露頭がある（あつた）ことは推測される。本地点で任意の2箇所からサンプルを採集した。ともに比較的高密度に分布している場所を選定し、斜面に沿った50cm×50cmの方形区画を設け、最大長10mmメッシュの網籠を用いて試料採取を行つた。なお、以前に図示された黒曜石分布範囲（諏訪間2005）はその殆どが上述のデイサイト～流紋岩の分布範囲と重なつていることが確認されたが、その黒曜石集中地点については確認できなかつた。

**第2地点** 主稜線を南へ向かい、472m地点の少し手前にある送電線鉄塔の立つ平坦面から小尾根に入り、その東側斜面を下ると、中腹から突然高密度な原石の散布地が確認できた。原石は第1地点よりもかなり多い。本地点でも任意の2箇所から試料を採集した。サンプル1は高密度に分布する場所、サンプル2は逆に低密度に分布する場所を選定した。採集方法とそれ以後の処理は第1地点と同じである。

この斜面で黒曜石露頭を発見した（写真）。規模は小さく、高さ約0.5mの岩脈が幅約10mにわたつて途切れ途切れに露出していた。稜線付近の高い場所で黒曜石が殆ど散布していないのは、この露頭の標高と関連していると推定された。露出部の概観は灰色で梨状肌状に風化していたが、良く見ると暗灰色のガラス質部分とボソボソした部分とが流離構造に沿つて数cmごとに層状をなし、互いに剥離する

部分が見られた。黒曜石の石基も灰色と黒色との綿状の流離構造が明瞭で、径5-10mmの多量の斑晶が観察された。斜面に散布していた黒曜石が小型且つ扁平なのは流離構造に沿つて崩壊するこうした質に由来するものであろう。

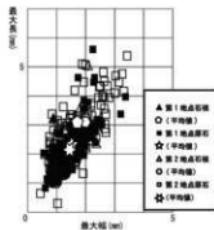
#### 4. 採集原石の検討と原産地としての評価

第1地点、第2地点で、50cm四方の区画より採取した試料の数量は表1の通りである。試料は黒曜石の散布地から視覚的に密集していると判断される個所を任意に選んだもので、この数値から直接に分布密度の厳密な比較はできないが、現地で分布状況を見る限り第2地点のほうが圧倒的に高密度で黒曜石が分布することは明らかであった。これを反映して第2地点で得られた試料数は第1地点のそれを大きく上回っている。また、いずれの地点・試料においても、原石の割合がほとんどを占めており、石核、剥片など人為的加工によると見られる痕跡をもつ資料は僅かであった。

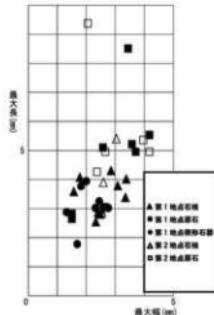
これ以外に、任意の地点から目立つた大きさ、形状の資料を集めという形で表面採集を実施したが、こちらでは原石や石核の他にサンプル資料には含まれていなかつた楔形石器も採集できた。

試料の黒曜石を対象に大きさ・重量の平均値を表2に示した。なお、ここでは石核・剥片等も原石の大きさと比較するため、計測値は石器としてのものではなく、単純な最大長・最大幅・最大厚に直して比較している。この場合必ず最大長＝最大幅＝最大厚となるので、以下では最大長・最大幅を指標に資料の大きさを比較する。

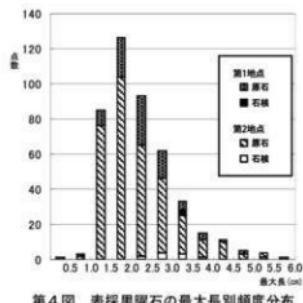
剥片以外のサンプルの最大長・最大幅を第2図の散布図



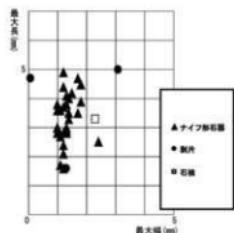
第2図 黒曜石のサイズ



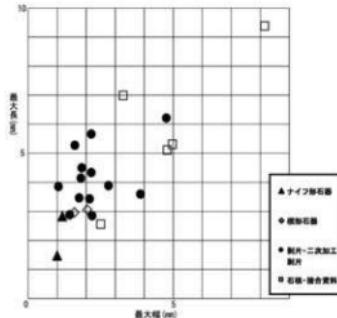
第3図 表採黒曜石のサイズ



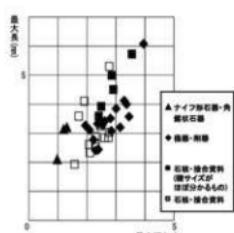
第4図 表採黒曜石の最大長別頻度分布



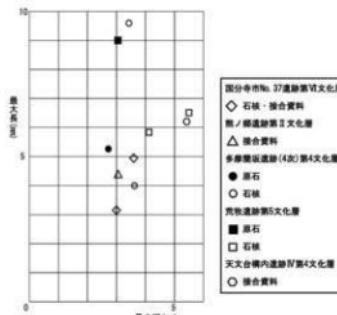
第5図 土手上遺跡の黒曜石のサイズ



第6図 向田A遺跡の黒曜石のサイズ



第7図 上ノ池遺跡の黒曜石のサイズ



第8図 武藏野台地IV層下部・V層の遺跡出土の「伊豆豆」黒曜石のサイズ

表1 採集試料の集計

	第1地点			第2地点		
	サンプル1 点数	重量(g)	点数	サンプル1 点数	重量(g)	サンプル2 点数
原石	32	144.4	57	191.4	308	321.7
G-RB	1	2.4	2	14.2	11	81.0
剥片	3	11.9	8	18.6	20	50.5
合計	36	156.7	67	226.4	345	1053.2
						88.5

表2 試料計測値の平均

	標本数	平均			
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	平均重量(g)
第1地点	サンプル1 原石	32	24.8	16.8	10.7
	石核	1	32.2	8.8	7.7
	剥片	3	24.8	18.6	10.8
	サンプル2 原石	57	22.7	14.5	8.8
	石核	2	30.7	21.1	13.2
	剥片	8	20.8	14.3	6.3
第2地点	サンプル1 原石	89	25.4	15.3	9.0
	石核	3	31.5	17	11.4
	剥片	11	23.9	15.5	8.9
	サンプル1 原石	206	21.3	14.3	8.5
	石核	11	31	18.9	13.1
	剥片	28	21.9	13.1	8.1
計	サンプル2 原石	6	22.4	14.9	6.6
	石核	336	21.3	14.2	8.5
	剥片	11	31	19.9	13.1
	サンプル1 剥片	6	22.4	14.9	6.8
	サンプル2 剥片				
	計				

に示した。黒曜石の分布密度は異なるものの、第1地点、第2地点ともに試料の大きさの平均値には大きな差はない。原石は最大長約2cm程度のものが平均的であり、数量でも2cm前後のサイズのものが最も多い。この原石サイズは、試料中の剥片と大きさがあまり変わらないことからも分かる通り、石器製作には不向きである。試料中の石核が平均最大長約3cmと原石の平均より大きめなことも、打ち削りには原石中から大きめなものが選別利用されたというごく自然な傾向を示しているといえるであろう。

量的に見て安定的に採取可能と見られるのは最大長1~3cm台までである(第3図)。それより大型のものとしては、試料中の原石では最大長4cm以上のものが第1地点で3点、第2地点で16点、5cm以上のものは第1地点で1点、第2地点で3点となっており、6cmを超えるものは存在しない。表探資料についても大半が最大長6cm以内である。各地点で1点ずつ最大長8cm超の大形原石が採集されているが、いずれも最大幅・厚は試料の計測値の範囲内に収まる。

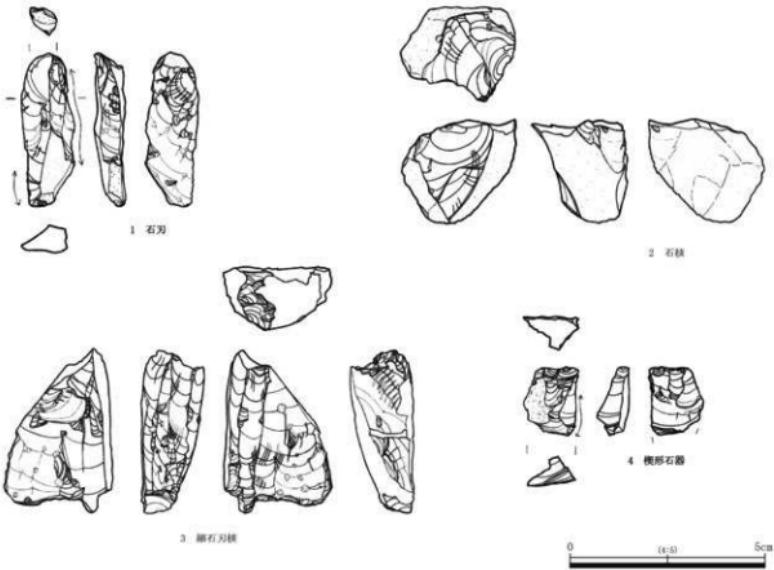
採集試料は石器製作に十分な質をもつものであるが、上記のように石器石材としてはやや小型の観がある。そこで、今回の調査地で得られるような小型原石はどの程度利用されたのか具体的に検討し、原産地としての可能性を探るため、採集試料と遺跡出土資料との対比を行った。採集された石器は基本的に細石刃石器群以降のものと見られる

(5、参照)が、縄文時代の石器群については産地のデータが十分でなく、また細石刃石器群に関しては本稿6、で詳述するため、ここではひとまず検討対象を旧石器時代のそれ以前の時期の資料に限定した。

柏崎産黒曜石の利用が1つのピークを迎える愛鷹・箱根第2期の土手上遺跡(池谷2004)・向田A遺跡(富樫・中村2007)の石器群(註1)では、ナイフ形石器や剥片に4cm以上の資料が少なからず認められ、特に向田A遺跡では石核・接合資料に最大長5cm以上の大きめのものが目立つ(第5・6図)。したがって、これらの遺跡では大型の原石が安定的に入手されていた可能性が高く、本稿で紹介した原産地では露頭直下でさえこれに十分な大きさ・量の原石が採取できたとは考えにくい。このため、より大規模な露頭・散布地の利用、或いは露頭そのものの抜き取りが行われていた可能性を想定する必要がある。

一方、愛鷹・箱根第3期の事例としては箱根山西麓の上ノ池遺跡第II文化層(前嶋1998)の石器群がある(註1)。この石器群ではほぼ原礫の大きさが分かれる接合資料のほか、礫面が多く残る石核や厚手の剥片を素材とした搔器があるが、想定される原礫サイズは第2・3図に示した採集資料の範囲にだいたい収まる小型原石で、今回調査した散布地でも十分に採取できるサイズである(第7図)。愛鷹・箱根第3期に相当する南関東のIV層下部・V層階階でも柏崎産黒曜石が南関東でも広く利用されていた。柏崎産黒曜石は原石かそれに近い状態で遠隔地まで運ばれており、そうした黒曜石原石が出土する遺跡の分布は野川流域を中心とする武藏野台地南部がその北限の地帯となっている(国武2003)。提示できるデータは少ないが、原石に近いものを抽出すると第8図の通りである(註2)。全般的には採集資料よりやや大きい傾向があるものの、5cm以下の小型原石しか供給されなかつた遺跡も存在する。柏崎の黒曜石原産地に接続した箱根山西麓の遺跡だけではなく、原産地から離れた武藏野台地でも小型原石のみが出土する事例があり、第2期の石器群と比較すると相対的に利用される原石の大きさの平均に小型化の傾向が窺える。このことから、第3期並行期には大型の原石を産出する露頭に加えて今回の調査地のような小型原石が散布する地点も供給源のひとつとして利用されていたと想定される。

今回の調査地で分布する黒曜石は概して小型であり、露頭が見つかった第2地点でもその規模から見て得られる原



第9図 採集石器

石のサイズには限界がある。原石サイズの比較からは、利用される黒曜石が小型化する愛鷹・箱根第3期並行期にはある程度利用された可能性が指摘できるが、はじてそれより一回り大型の原石が利用される傾向があるため、より規模の大きい岩脈の露頭が存在したと想定される。原産地周辺の地形は斜面崩落などにより当時から大きく変化していると考えられるが、柏崎の黒曜石原産地の全容はいまだ詳細な記載がなされておらず、今後の調査の課題となろう。

## 5. 採集石器の検討

採集された試料545点（表面採取資料を含む）の大半は原石で、石器と考えられる資料は99点（細石核1点、石核27点、楔形石器7点、石刀1点、剥片63点）である。このうち4点を図示した。石材は全て柏崎産黒曜石である。資料の中で時期が特定可能なのは細石刃核だけだったが、石核や楔形石器は剥離面の光沢などから縄文時代以降の遺物であると推定される。以下に技術形態的特徴について記載する。なお、実測は柴田が行った。

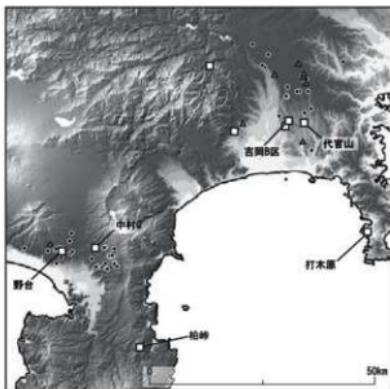
1は第2地点で採集された石刀である。自然面を打面とする。若干の捻れが確認できる。背面には、同一方向の剥

離が確認できるが、いずれも捻れており、また自然面を巻き込んでいる。右縁辺と左縁辺末端部に微細な剥離痕が確認できる。

2は第1地点で採集された石核である。小型の角礫を素材としている。自然面を打面として数回剥離し、そこを打面にして、並んだ縦長剥片や幅広剥片など、形態に齐一性のない剥片を剥離している。

3は第2地点で採集された細石刃核である。小型の板状剥片を素材としている。原石の一端から同一方向に剥離し、剥片および細石刀を得ている。作業面から推定される細石刃の長さは4cm前後である。打面部には再生を行おうとしたかのような剥離面が確認できる。また、作業面の下部には、逆方向からの剥離面も確認され、両極剥離を行った可能性がある。

4は第2地点で採集された楔形石器である。小型剥片を素材としている。上縁辺は若干潰れており、表裏両面に剥離面が確認される。表面には夾雜物を広く含んでいる。また、右側縁に微細な剥離痕が確認できる。下部は折損している。



第10図 静岡県東部と神奈川県の細石刃核出土遺跡

凡例 □：柏崎産黒曜石を含む、遺跡名記載の□：柏崎産黒曜石を主体とする  
●：黒曜石を主体とする。▲：その他の石材を主体とする

## 6. 細石刃石器群における柏崎産黒曜石の利用と採集された細石刃核の位置付け

### (1) 静岡県東部における細石刃石器群の研究

細石刃石器群における柏崎産黒曜石の利用は静岡県東部や神奈川県に少なからず見受けられ、柏崎産黒曜石を主体とする石器群も存在する(第10図)。採集された細石刃核の評価を行うにあたっては、比較的近い静岡県東部との対比が有効であろう。

静岡県東部の西洞遺跡b区では、休場層から霧ヶ峰系黒曜石を用いた野岳・休場型細石刃核が、富士黒土層下部から流紋岩を用いた船野型細石刃核が出土しており、有意な層位差と評価されている(篠原1999)。また、土手上遺跡では多數の船野型細石刃核が出土しており、「休場層上位と漸移層の間で出土点数がほぼ拮抗しており、休場層上位に出土層位のピークがある野岳・休場型細石刃核よりもわずかに上層から出土する傾向が認められ」るとのことである(池谷2009: 160頁)。その他に層位差についての指摘はなく、層位をもとにした編年は難しいといえる。

前嶋秀張(1996)と砂田佳弘(1996)によって静岡県東部の細石刃石器群の編年が示されている。前嶋の編年は図が示されているのみで内容が十分に明らかにされていないが、富樫孝志(2003)によってまとめられたものを参照すると、野台遺跡→中村C遺跡・山中城三ノ丸第1地点

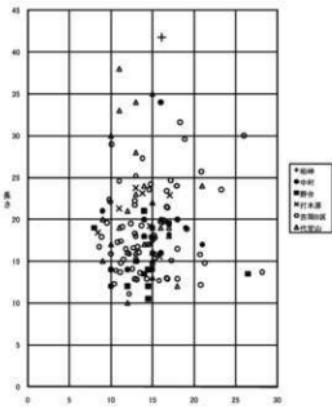
→大奴田場遺跡→休場遺跡・柳沢C遺跡→小塚A遺跡となる。砂田の編年は野台遺跡・中村C遺跡→中見代第III遺跡・中尾遺跡・柳沢B遺跡・山中城三ノ丸第1地点・大奴田場遺跡→休場遺跡→小塚A遺跡となっている。

両者の編年は、相模野台地において、L1H上部～B0下部に代官山型と野岳・休場型細石刃核、B0中部～L1S上部に野岳・休場型と船野型細石刃核、L1S中部～漸移層に削片系細石刃核が出土すること(調査訪問2001)に加え、柏崎産黒曜石を用いた代官山型細石刃核が初期段階に位置付けられること(砂田1994)を参考にしているため、順序が入れ替わるなどの齟齬は生じていない。しかし柏崎産黒曜石の利用については、両者の編年にわずかな差異が認められ、柏崎産黒曜石を主体とする中村C遺跡を初期段階に置くか次段階とするかの違いがある。前嶋(1995)は小形の細石刃核を主体とする野台遺跡、大形の細石刃核を主体とする大奴田場遺跡、両者が混在する中村C遺跡を小形から大形へと順に並べ、一方の砂田(1996)は相模野台地における成果をもとに、柏崎産黒曜石を用いる中村C遺跡を野台遺跡と併行させているのである。

以上の編年が提示されて10年以上が経っているが、静岡県においてはそれぞれの意見を補強あるいは否定する資料は未だに得られていない。ただ、神奈川県において用田鳥居前遺跡第I文化層(B0)やサザランケ遺跡第IIb文化層(B0下部)で柏崎産黒曜石を用いた細石刃核が出土していることから、初期段階以降に柏崎産黒曜石の利用が途絶えたわけではないことが明らかになっている。柏崎に比較的近い静岡県東部で柏崎産黒曜石が用いられ続けた可能性は高いと考えられる。石材環境に主に起因する地域性に配慮した編年が必要といえる。

### (2) 採集された細石刃核の位置付け

柏崎産黒曜石の利用は特に細石刃利用の開始期に盛んであることはほぼ間違いない。その段階における柏崎産黒曜石の利用過程は代官山遺跡第III文化層の報告において「代官山細石刃製作工程」(砂田1986)として次のように示されている。①打面が平坦な原礫面あるいは一枚の剥離面であり、打面調整が施される例は殆ど希である②細石刃核側面調整が、細石刃剥離の進行に伴い順次施される③原材料が打面の条件を満足し、打面に接する石核側面の形態をもすでに所持している、といった特徴が指摘されている(第12図1・2)。こうした細石刃核の特徴は吉岡遺跡群B区



第11図 細石刃核作業面の大きさの比較

や打木原遺跡、野台遺跡（同図4）にも認められる。

柏崎において採集された細石刃核は素材形状を大きく変更せずに細石刃剥離を進行させており、その点では代官山遺跡の細石刃核にも類似がある。だが、その大きさからすると両者を同じと考えることは難しい。第11図は、細石刃核に柏崎産黒曜石を主に利用する石器群における細石刃核の作業面の長幅を示したものである。採集された細石刃核の大きさが突出していることが分かる。また、このグラフからは、神奈川県の細石刃核の大きさが柏崎に近い静岡県東部のものと比べて小さくなく、むしろ大きいものも含まれているのが分かる。これは、柏崎産黒曜石の利用形態が遠方に行くほど石材を消費し、小型化するようなものでなかったことを示している。また、代官山遺跡や吉岡遺跡群B区の接合資料（第12図3）にも示されるように、柏崎産黒曜石は原石の状態で遠方の遺跡に持ち込まれ、そこで

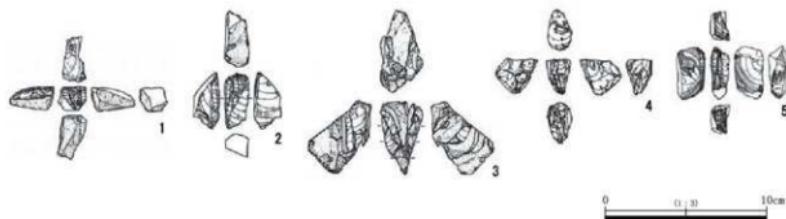
初めて細石刃核剥離が開始されるような利用形態があったことも推定される。したがって採集された細石刃核をこうした利用形態の中に位置付けることはできないのである。

以上の検討から、現状の周辺資料のなかに柏崎産黒曜石を用いた採集細石刃核の類似例は見出せないと言わざるを得ない。大きさや技術的な特徴ならば、むしろ神津島産黒曜石を用いる上原遺跡「a類」細石刃核により類似するものがある（第12図5）。静岡県東部における柏崎産黒曜石の利用が神奈川県における細石刃利用の初期段階よりも後に続かなかったのかを明らかにすることが、この細石刃核の位置付けを決定する一助となると予想される。

### おわりに

今回の踏査で黒曜石産出岩帯についての基礎情報が一部整理され、また、遺跡出土資料に関する一定の評価軸も設定できたと考えている。愛鷹・箱根第2期の柏崎産黒曜石は今回発見された露頭よりも大型の岩脈がそこから崩落した比較的良質の原石が選択的に利用された可能性が高いことが予想された。同第3期と武藏野台地IV層下部・V層上部段階では原石サイズの選択幅が拡大したようである。他方、代官山型細石刃核の素材の採取は露頭の大小に余り関連なく、その直下に散在する小型原石を目的としていたことが想定された。このように、同じ原産地の石材であっても時期や主体となる石器群によって選択対象となる原石形態が異なり、それにあわせて採取場所とその産状、および採取方法が変わることが推測された。遺物の採集は調査の第1目的というわけではなかったので、成果としては少なかった。しかし細石刃核については今後究明すべきひとつの重要な課題を提起しているのではなかろうか。

これから発掘調査が行われる気配は杳として知れないが、原産地の情報を正確に記録し、的確な評価を下し続け



第12図 静岡県東部・神奈川県の細石刃核と接合資料（1～3：代官山遺跡、4：野台遺跡、5：上原遺跡）

ていくことが今後の適切な調査・研究を導く最初の一歩になると確信している。本稿がそのひとつとなりえていれば幸いである。

**謝辞** 調査の許可を下さった伊豆市教育委員会と伊東市教育委員会、文献を供与下った向井正幸氏と篠原千賀子氏、原産地の場所を教示下さった森嶋富士夫氏と池谷信之氏に感謝申し上げます。

本研究の一部は財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所平成21年度個人・共同研究助成に基づいて行った。

## 註

- 1 全て望月明彦による蛍光X線黒曜石原産地推定分析により天城柏崎産とされた資料である。
- 2 天文台構内遺跡に関しては菅原明日香・二宮修治による分析で伊豆系とされたものがあるが、これ以外は理化学的分析によるものではなく、外観上の特徴から柏崎産の可能性が高いと判断される資料である。第8図では、天文台構内遺跡の例はやや消費の進んだ状態のものであるが、それ以外は原石かそれにほぼ近いサイズを示すと考えられる資料を示している。

## 引用・参考文献

- 池谷信之 2003 「伊豆・箱根黒曜石原産地の散状と成因」『黒曜石文化研究』第2号 23-35頁 明治大学人文科学研究所
- 池谷信之 2004 「沼津市埋蔵文化財発掘調査報告4 土手上遺跡(d・e区・3)・丸山遺跡」沼津市教育委員会
- 池谷信之 2009 「黒曜石考古学」新泉社
- 井上慎也・上敷領久・山本克・パリノ・サーヴェイ 1997 「多摩蘭坂遺跡II」国分寺市遺跡調査会
- 長田義人 1990 「伊豆を歩き始めたころ」『静岡県史の窓』(静岡県史資料編1付録冊子) 1-2頁 静岡県教育委員会県史編纂室
- 国武貞克 2003 「両面体調製石器群の由来—関東地方V層・IV層下部段階から砂川期にかけての石材消費戦略の連続性—」『考古学』I 52-77頁 安斎正人
- 久野久 1952 「7万5千分の1地質図幅「熱海」」地質調査所
- 久野久 1970 「5万分の1地質図幅「伊東」」地質調査所
- 小山真人 1982 「伊豆半島北東部中伊豆町～伊東市地域の層序ー」『静岡大学地球科学研究報告』7 61-85頁 静岡大学理学部地球科学研究所
- 小山真人 2008 「陸上大型火山の時代(9)伊豆の黒曜石」『伊豆新聞2008年6月1日』伊豆新聞
- 篠原房郎 1999 「西洞遺跡(b区・1)発掘調査報告書」沼津市教育委員会
- 鈴木正男 1970 「フィッショントラック法による黒曜石の噴出年代とウラン濃度の測定(第II報)一本州中部、伊豆諸島産出の黒曜石についてー」『第四紀研究』第9巻第1号 1-6頁 第四紀学会
- 砂田佳弘 1986 「先土器時代の遺構と遺物」『代官山遺跡』13-304頁 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 砂田佳弘 1994 「相模野細石器の変遷」『神奈川考古』第30号 1-20頁 神奈川考古同人会
- 砂田佳弘 1996 「愛鷹・箱根山麓の細石器」『愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編 収録集』83-85頁 静岡県考古学会 講習会問題
- 砂田佳弘 2001 「相模野旧石器編年の到達点」『相模野旧石器編年の到達点』1-20頁 神奈川県考古学会
- 講習会問題 2005 「伊豆柏崎黒曜石原産地採集の石刃石核」『旧石器研究』第1号 81-94頁 日本国石器学会
- 高木圭介・小山真人 1992 「伊豆半島の第四紀火山の層序と年代」『日本火山学会1992年秋季大会予稿』160頁 日本国火山学会
- 田村隆・国武貞克・土屋道則 2006 「栃木県高原山黒曜石原産地遭跡群の発見とその評価」『日本考古学』第22号 147-165頁 日本考古学協会
- 富樫孝志 2003 「東海東部における細石刃文化」『日本の細石刃文化』I 234-252頁 八ヶ岳旧石器研究グループ
- 富樫孝志・中村雅之 2007 「向田A遺跡」静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 中村雄紀・上村昌男 2004 「熊ノ郷遺跡発掘調査概報I」国分寺市遺跡調査会
- 中村雄紀・森先一貴・上村昌男 2003 「国分寺市No.37遺跡発掘調査概報II」国分寺市遺跡調査会
- 前嶋秀張 1995 「第4期・第5期の石器群」『愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年 予稿集』28-34頁 静岡県考古学会
- 前嶋秀張 1996 「第4・5期の石器群をめぐって」『愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年 収録集』49-50頁 静岡県考古学会
- 前嶋秀張 1998 「上ノ池遺跡」静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 三梨昂・小野晃司・須田芳朗 1980 「20万分の1地質図幅「横須賀」」地質調査所
- 吉田格・石井則季・高麗正・下原裕司・沼上省一・齊藤圭子・平山尚吉 2005 「天文台構内遺跡IV」三鷹市遺跡調査会
- 吉田格・国武貞克・中川泰・伊藤富治夫 2003 「荒牧遺跡」小金井市荒牧遺跡調査会
- Koyama, M. and Umino, S. 1991 Why Does the Higashi-Izu Monogenetic Volcano Group Exist in the Izu Peninsula?: Relationships between Late Quaternary Volcanism and Tectonics in the Northern Tip of the Izu-Bonin Arc. Journal of Physics of the Earth, vol.39, no. 1: 391-420. Seismological Society of Japan. The Geodetic Society of Japan., and The Volcanological Society of Japan.

## Archaeological Evaluation about Kashiwa-Touge Obsidian Outcrop in Shizuoka Prefecture

Satoshi ABE, Yuuki NAKAMURA, Motoki MIYOSHI, Ryohei SHIBATA

**Summary:** In Kashiwa-Touge, in Shizuoka, Japan, we carried out a field survey to study a state of obsidian outcrop there. Here in this paper, we show the results and evaluation. 1) The obsidian dike belongs to the Kashiwa-Touge quartz andesite of the Quaternary. It is younger than the Volcano Usami. 2) The range of obsidian is almost the same as the one of Kashiwa-Touge quartz andesite. 3) The size of obsidian is separated into two groups; large ones are outcropped, small ones are under the range of outcrop. 4) Large and good obsidians found in this survey are not the same as those of Ashitaka-Hakone region of the late EUP. Those were supplied to Ashitaka-Hakone and to Musashino region in the early LUP. 5) Obsidian used as a Daikanyama-type microblade core was small in size. Daikanyama-type microblade belongs to the initial microblade industry. 6) The microblade core found out in this survey is manufactured from flakes and is larger in size than that of Daikanyama-type. Those facts suggests that the microblade cores were made in Kashiwa-Touge in different period / region from Daikanyama-type ones. 7) The range of Kashiwa-Touge obsidian has close relation with its purpose of use.

**Keywords:** Izu Peninsula, Kashiwa-Touge, quartz andesite, obsidian, outcrop, microblade core, Daikanyama-type

# 静岡県東部における縄文時代草創期後半から早期の石器群

—石器群から見た居住パターンの変化について—

中 村 雄 紀

**要旨** 静岡県東部地域では、縄文時代草創期後半に堅穴住居が出現し、早期には集落遺跡の存在が一般化する。本稿では当該時期の居住パターンを考察するため、帰属時期が明らかな石器群の事例を集め、石器分布のパターンの検討を行った。その結果、時期によって次のような変化があることが分かった。草創期後半には住居内部を中心に石器や剥片類が残される傾向がある。早期撫系文期以降は住居跡内部から出土する石器が激減するのみならず住居跡を伴う集落遺跡での石器製作の痕跡が希薄になり、集落とは別の地点で石器集中が形成される事例が、特に押型文期、条痕文期の遺跡に顕著に認められる。早期終末の打越式以降になると集落遺跡内に多数の石器・剥片類が残され、しばしば住居覆土にも廃棄されたものと考えられる。こうした石器群の残され方の違いは石器など狩猟具を中心とした石器製作の場の配置の変化を反映したものであり、狩猟のスケジュールや季節性と対応した居住パターンの変化と密接に関わっていたものと考えられる。

**キーワード** 縄文時代草創期、早期、石器分布、居住パターン

## 1はじめに

静岡県東部地域では、縄文時代草創期後半には明確に堅穴住居構造のある遺跡が現れ、早期後半には遺跡数の増加が1つのピークを迎えることが知られている。草創期から早期にかけての時期は旧石器時代的な遊動性の高い生活と縄文時代的な定住的生活との転換点に当たる時期として注目されてきた。また、定住性と関連して地域性が顕著に表れるようになる時期であるともされている。この時期の生業や居住パターンの在り方に接近するには石器群が有効な分析対象であることはすでに認知されているところであり、石器群の分析をもとに生業の地域的な差や特性を追求する研究も行われてきた（小暮1983、阿部1989・1992、宮崎2005）。しかし現状はそうした研究が十分に進められているとは言えず、ひいては石器研究に必要十分な資料の蓄積が進められないという状況を生んでいる。この状況は良好な遺跡の調査事例の蓄積が進められつつある静岡県東部地域も例外ではない。

そこで本稿では、静岡県東部地域における草創期後半から早期の遺跡を対象に、石器群の分析から居住パターンの変化を明らかにすることを試みる。

## 2時期区分と年代

縄文時代の石器群においては、一般に時期を限定できる特徴をもった石器はごくわずかであり、土器群との共伴關係から時期を推定する必要がある。本稿では草創期後半から早期にかけての時期を土器型式によって大まかに以下の5期に分けて捉える。

草創期後半：草創期の押圧縄文土器段階から表裏縄文土器段階。

早期前葉：早期撫系文系土器群で、押型文土器出現より前の時期。井草I式並行期から稻荷台式並行期、「駿豆撫系文系土器群」（池谷1997）の広合段階までを含める。

早期中葉：早期押型文土器、「駿豆撫系文系土器群」のイラウネ段階以降、子母口式より前の時期までを含める。

早期後葉：子母口式、野島式、鶴ヶ島台式、茅山下層式、茅山上層式の条痕文系土器の時期。

早期末葉：上記の条痕文系土器に後続する打越式、神木台式などと入海・石山・天神山・塙屋式などの東海系条痕文土器との時期。

各時期の年代を、静岡県東部地域の資料の近年の年代測

定例(表1)、及び小林謙一氏(2007)による年代測定の集成などを参考にまとめるとおよそ次のような。草創期と早期との境界は約11,600-11,500年前頃とされており、草創期後半は13,000-11,500cal BP (11,000-9,800BP)、早期前葉は11,500-11,000cal BP (9,800-9,500BP)頃に位置づけられる。続く早期中葉について年代測定のデータが乏しく、後葉に關しても鶴が島台式以降にデータが限られるため、年代の位置づけは未だ流動的である。仮に8,000BP頃を境として中葉が11,000-9,000? cal BP (9,800-8,000? BP)、後葉が9,000?-7,500cal BP (8,000?-6,500BP)としておく。最後に早期末葉には7,500-7,000cal BP (6,500-6,000BP)の年代が与えられる。

年代と古環境変動を対比すると、草創期末の多縄文系土器群はヤンガー・ドリアス期の寒冷期にあたり、早期の開始はその後の温暖期への転換とほぼ一致するとされている(谷口2002)。

また、この時期は海進が進む時期である。この地域では、未較正炭素年代で10,000年前以降海水準が上昇し、6,000年前に頂点を迎える。現在より約3m高くなっていたとされる。但し、伊豆半島の大部分は地形が急峻なため現在と比較して海岸線が大きく前進することはなく、さらに

伊豆半島南部では、沈降により6,000年前の海岸線は現海面下にあったというデータもある(太田他1986)。静岡県東部地域で特に大きく地形が変化したと考えられているのは愛鷹南麓・箱根西麓一帯の海岸線である。この地域の地形発達史は地中ボーリング資料により次のように復元されている(以下の年代値は未較正炭素年代)(松原2006)。全新世に入った当初は愛鷹山塊の麓が海岸線であった。海進により約9,000年前以降に狩野川平野に海水が入り込んで内湾となつた。8,000年前頃には愛鷹南麓側に砂州が形成され、7,000-6,000年前には砂州が離水してその後背地が湿地帯となつた。狩野川平野の内湾が海から切り離されて陸化し、湿地帯となるのは約5,500年前とされる。先の年代値と対照すると、早期中葉から後葉にかけて海域が拡大して内湾が発達し、後葉から末葉にかけてそれらが埋積して湿地化したことになる。

### 3 分析の対象とする資料

愛鷹山麓の早期の遺跡には、住居跡のある遺跡と、住跡はなく集石や石跡などのみの遺跡があることから、前者が定住的な拠点、後者がそこから派生した一時的野営地であった、と捉えられている(設楽2002)。本稿では、石器群の検討を組み合わせることによってこうした遺跡群の

表1 静岡県東部の早期の遺跡の年代

遺跡	試料	土器	測定番号	測定年代(yrBP)	較正年代(cal yrBP)(2σ)	備考
大庭庄	堅穴状構造化材	押彫繩文	Beta-167428	10,850±40	12,885-12,815	
	堅穴状構造化材	押彫繩文	Beta-170267	10,910±60	12,955-12,815	
丸尾北	土器付着炭化物	表裏繩文	IAAA-80890	10,080±50	11,960-11,881, 11,828-11,397	
	土器付着炭化物	表裏繩文	IAAA-80891	10,020±50	11,755-11,306, 11,300-11,290	
	土器付着炭化物	表裏繩文	IAAA-80892	10,050±40	11,769-11,329	
	土器付着炭化物	表裏繩文	IAAA-80893	9,990±40	11,701-11,672, 11,629-11,266	
	土器付着炭化物	表裏繩文	IAAA-80894	10,090±40	11,959-11,883, 11,827-11,403	
	土器付着炭化物	表裏繩文	IAAA-80895	10,030±50	11,756-11,321	
	土器付着炭化物	表裏繩文	IAAA-80896	10,090±40	11,691-11,679, 11,622-11,268	
丸尾北	土器付着炭化物	回転繩文	IAAA-80886	9,970±40	11,615-11,251	早期初頭
	土器付着炭化物	回転繩文	IAAA-80887	9,730±50	11,246-11,081, 10,932-10,879	早期初頭
	土器付着炭化物	回転繩文	IAAA-80888	9,760±50	11,251-11,101	早期初頭
池田B	集石焼土	不明	Beta-127647	9,590±50	11,155-10,715	付近の出土土器では撚糸文・押型文の時期に位置づけられると考えられる。
	集石焼土	不明	Beta-127648	9,480±50	11,065-10,945, 10,845-10,830	
下ノ大庭	住居床面木炭	打越式	IAAA-51643	6,630±40	7,580-7,430	
	住居炉覆土木炭	打越式	IAAA-51644	6,420±40	7,430-7,270	
	住居炉覆土木炭	打越式	IAAA-51645	6,410±40	7,430-7,270	
	住居床面木炭	打越式	IAAA-51646	6,480±40	7,470-7,310	
	土器付着炭化物	石山式	IAAA-51650	6,410±40	7,430-7,270	
	土器付着炭化物	打越式	IAAA-51651	6,600±50	7,570-7,430	

形成パターンについてより具体的に考察することを目的とする。検討項目とするのは、石器群の組成、剥片類・核石の出土量と出土・分布状況、及びこれらと遺構との関係である。これらの項目はいずれも遺跡で行われた活動、すなわち遺跡の機能と相関すると考えられる。

そこでまず、構成遺構から遺跡形態を以下のように分類した（註1）。

a型：住居跡があり、時に集石や炉跡、土坑を伴う遺跡

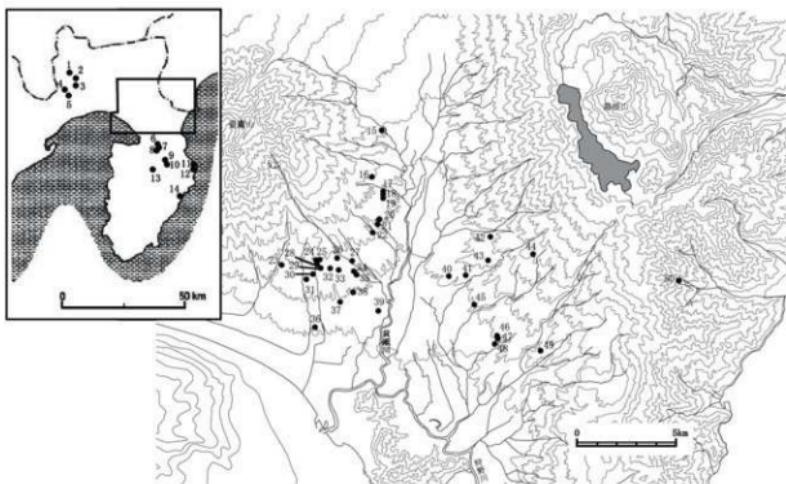
b型：住居跡はなく、集石、炉跡、土坑などの遺構が見つかっている遺跡

c型：視覚的に遺構が発見されておらず、遺物の存在のみにより知られている遺跡

石器群については共伴する土器から時期を決定した。但し、多くの遺跡では異なる時期の資料が重複して出土し、特にb型・c型遺跡では包含層出土資料が中心となることから、特定時期の純粋な石器群を抽出することは不可能に近い。したがって、出土している土器が草創期後半から早

期の特定の時期にほぼ限定される遺跡、或いは土器分布との対比から特定の時期にほぼ限定される資料が分離可能な遺跡に对象をしぼって検討を加えることとした。他時期の資料の混在が著しいなどの理由から石器群の時期の検討が不可能な遺跡は検討対象から外した。また、資料の集成は遺跡の調査報告書に掲めたが、遺物の分布や数量に関して十分な情報が得られない事例も検討対象から外した。特に剥片類については、その有無に関してさえ全く情報が得られないことが多いが、具体的な数量が不明でも分布図等から石器集中部の存在が読み取れるものなど、分布状況がある程度把握できるものは検討資料に加えた。

尚、本稿でいう県東部地域とは富士川以東の地域を指す。但し、この地域内では遺跡の調査密度に明らかに疎密があるため、発掘調査資料が最も豊富な愛鷹山麓を中心に戻り、富士山麓や伊豆方面の遺跡はやや付加的な扱いとなることをここで断わっておく。本稿で言及する遺跡の位置は図1に示した。



- 1 大鹿原 2 若宮 3 黒田向林 4 小坂 5 小松原A 6 萩原ヶ池A 7 大平A 8 大平C 9 甲之背 10 六松山 11 東大塙クズレ  
 12 三の原 13 池の本 14 师 15 稲波 16 小杉平瀬 17 梶ヶ尾 18 下ノ大鹿 19 老平 20 内野山V 21 取松 22 梅ノ木沢  
 23 元野 24 比原沢第IV 25 土手上 26 尾上イクラネ北 27 向田A 28 中見代第III 29 広合 30 西洞 31 八兵衛洞  
 32 尾上第2 33 併木柳北 34 西山 35 桜畑上 36 稲荷林 37 上松沢平 38 丸尾北 39 池田B 40 上ノ池 41 八田原  
 42 乾草岬 43 中村C 44 元山中C 45 雪場B 46 小平B 47 小平C 48 桧林A 49 上原 50 大越

図1 遺跡の位置

表2 草創期後半の遺跡の石器組成

遺跡名	位 置 型	遺跡名	伴出土品	尖頭器	石 頭	粗 頭	石 頭	石 頭	石 頭	石 頭	R	磨 石	研 磨	石 頭	磨 石	石 頭	石 頭	な し 考 え	そ の 他 の 器 種
葛原沢第IV	24 a	第1号住居址	押川繩文	8	12	1	4	1							?	?		地2,439(複合)	
大鹿塚	I a	J号竪穴式遺構	押川繩文	11	1	1	5		1	12	2	?	?	地46(複合)					
		2号竪穴式遺構	押川繩文	2	2		6		3	5	1	?	?	地43(複合)					
		3号竪穴式遺構	押川繩文	0	3	1				2	2	?	?	地278(複合)					
		4号竪穴式遺構	押川繩文	1	1		1		1	2	11	1	?	?	地370(複合)				
		5号竪穴式遺構	押川繩文	1	2		3			4	2	?	?	地488(複合)					
		6号竪穴式遺構	押川繩文	2	2	2	2			5	2	?	?	地271(複合)					
		7号竪穴式遺構	押川繩文	13	3	3	1	2	10	1	?	?	?	?	地2,314(複合)				
		9号竪穴式遺構	押川繩文	1					2	3	1	?	?	地280(複合)					
		11号竪穴式遺構	押川繩文	1	3		2		2	1	1	?	?	地486(複合)					
		12号竪穴式遺構	押川繩文	1						1		?	?	地134(複合)					
		14号竪穴式遺構	押川繩文									?	?	地24(複合)					
清水桜北東尾根	33 a?	20号石器群	押川繩文	4	9	1	3		6	13	11	1,303	11						
		草原期2分プロック	押川繩文	16	6	1	2		4	1		?	?						
丸尾北	38 c	ヌアB	表裏繩文	39	2	2	1	9	37	3	440	9							

※「位置」は第1回と対応

## 4 石器組成

県東部地域の草創期後半から早期の遺跡の石器組成を表2~3に示した。なお、表中には剥片類などを含めた数量がある程度把握できる遺跡を中心に集計しており、十分な情報が得られなかった事例には割愛したものがある。これをもとにまず本節では当該時期の石器群の石器組成について概観する。時期別的主要器種を図2~5に示した。

草創期後半、押圧繩文土器段階の石器群は、大鹿塚遺跡（芝川町教育委員会2006）、葛原沢第IV遺跡（沼津市教育委員会2001）、清水柳北遺跡東尾根（沼津市教育委員会1998b）で良好な資料が得られている（図2）。いずれもa型またはその可能性が高い遺跡である（註2）。厚手の両面加工尖頭器（1・2・14・15）、石鎌（4~8・16~20）が石器組成の中心を占め、これに搔器・削器類（9・11・21）が伴う。鎌状石器として報告されている石器

など、他の2遺跡では稀な異質な器種が多数見られる。石鎌形の尖頭器は他の尖頭器と同様厚手であるという点で早期に見られるものとはやや異なる。表裏繩文土器段階は、当該期の土器が出土した遺跡数自体は少くないが、石器組成が分かる事例は少ない。この時期のものの可能性が高い丸尾北遺跡（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2009b）の石器群では、尖頭器、鎌状石器ではなく、石鎌（22~27）は小型のものが主体である。その他では搔器（28・29）、錐形石器、楔形石器（30・31）などがある。

早期の石器群については、当該地域では早期条痕文土器期の遺跡における石器組成が石鎌と磨石・敲石類を中心としたものとなることが早くから指摘されていたが（徳津他1976）、その傾向は早期前葉にまで遡る。磨石・敲石類はほとんどの遺跡で安定して存在するようになり、特にa型遺跡では撫糸文土器段階の早い時期にあたる上松沢平遺

表3-1 早期の遺跡の石器組成

遺跡名	類 型	位 置 型	遺跡名	時 期	伴出土品	尖頭器	石 頭	粗 頭	石 頭	石 頭	R	磨 石	研 磨	石 頭	磨 石	石 頭	石 頭	な し 考 え	そ の 他 の 器 種
上松沢平	a	1号住居	前葉															?	?
		2号住居	前葉															他1	
		3号住居	前葉														3	1	
		4号住居	前葉														1		
		1号竪穴式遺構	前葉														?	?	地2
		2号竪穴式遺構	前葉														?	?	地2
		3号竪穴式遺構	前葉														?	?	地2
		4号竪穴式遺構	前葉														?	?	地2
		5号竪穴式遺構	前葉														?	?	地1
		6号竪穴式遺構	前葉														5		
		第6・伊藤等	前葉			1	1										?	?	地1
		遺跡外	前葉主体		53	3	1										6		
三の原	a	1号住居	前葉	福井台式															
		2号住居	前葉	福井台式															
		3号住居	前葉	福井台式															
		4号住居	前葉	福井台式															石器なし
		遺跡外	前~中葉	広谷段階~西列段階	10	6	1	5	3	8	2	130	25	?	?	他388			

※「位置」は第1回と対応

(10) はこの時期に特徴的な器種である。また少数ながら礫器(13)も出土している。なお、大鹿塚遺跡では磨石・敲石(12)、石鎌形の尖頭器(3)など

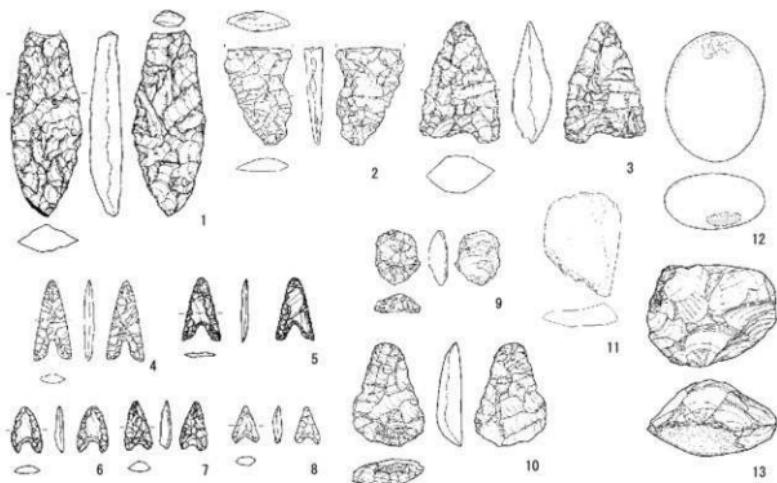
表3-2 早期の遺跡の石器組成

遺跡名	種 類 型 別	遺構名	時期	伴出土器	尖 頭 器	石 器	鍛 造 器	石 器	R F	磨 擦 石 器	打 制 石 器	磨 擦 石 器	磨 擦 石 器	石 器	片	石 核	種 類 別 の 記 載 な し	
大平C	a	第2号住居	前期	縦削台式										3				
		8号住居	前期	縦削台式									2					
		第1号住居	前期	縦削台式													石器なし	
小杉平第2	a	16	前期	縦削台式									4	19	4	1		
広合b~e区	b	29 富士山層	前期	広合の形	45	10		3	17	9	48	10	7	17				
丸尾b~e区	b	38 調査区東部・塗抹層	前期	弓張鍬文、撫子文	24	2		8	12		6		304	8				
縦削柱	b	36	前期	直系文主体	1			1			7		9					
上原	c	49	前期	直系文主体	26					3	5	2	7					
		1号住居	中葉	神型文	1						5	3						
尾上イクラウキ北	a	2号住居	中葉	神型文							21	1	4					
		3号住居	中葉	神型文	1						1							
		道耕跡	中葉	神型文	23	3	1	3	4	34	4	1	78	3	359	13		
尾上イクラウキ北 (第2次)	a	26 第2・4号住居	中葉	神型文									4					
		土坑等	中葉	神型文				1	1		1	1					石器なし	
		道耕跡	中葉	神型文		2	5	1		4	80	5	31	1	石鍬1			
中見代第III	a	28	後期	神型文				1	1		1	1	37	3				
		2号住居	中葉	神型文							1		21					
		3号住居	中葉	神型文							1							
		4号住居	中葉	神型文							1		7					
六仙山	a	10 5号住居	中葉	神型文		1					2	1	29	1				
		6号住居	中葉	神型文							1	1	38					
		10号住居	中葉	神型文		1					1		23					
		11号住居	中葉	神型文	1								17					
芦宮	a	第12号竪穴住居	中葉	神型文									1					
		第19号竪穴住居	中葉	神型文	3													
		第20号竪穴住居	中葉	神型文									1					
		第2区	前・中葉		13	1,908	47	5	6	83	18,328	35	19,465	82	砾石8			
清水郷北東尾根	a	2号住居	中葉	神型文										1			石器なし	
		62号住居	中葉	神型文														
手芋上d~e区	b	25 X~30~40	中葉	神型文	45	1	5		7	5	1	71	1	約900	26	剥片集中あり		
内田A	b	27	余区	中葉	神型文	24	2	3	5	15	3	1	46	50	363	9		
		1号跡	中葉	神型文	4	1	2	5	9	1	1	12	14	225				
小平B	b	46	中葉	神型文	5	1	4	4	6	3	1	35	1	7			石器集中あり	
小平C	b	47	中葉	神型文	15						9	52		7			石器集中あり	
泊田B	b	29 黒磚立石納土坑	中葉	神型文	1			1	21					約200				
内野山V	b	20	中・後葉	7号	4	8	1	7	11	12	1	1,135	41	363	26	砾石3		
元野	b	23	中・後葉主体	26	33	2	3	7	1	1,32	10	40	25	25	石鍬3、石製品3			
八戸衝削	c	31	中葉	3						2	3	2	13	2	數点			
黒田向林	c	3	中葉	直系文	164	1	5	4	2		3	80	17	7	17			
松原原A	c	5	中葉	直系文	6					5	3	12		636			黒曜石削片は11点のみ	
跡	c	14 3~10区	中・後葉主	204	88	22		13	4	73	13	7960						
		C区	中・後葉主	393	366	2	54	24	3	811	153	14,986		衡12				
機場B	c	45 G~D3チャット	中葉	神型文、斜面~斜面直角?	1					1	10	4	約500					
		4号跡	後葉	野鳥、直系文直角	2			2			1	1		405				
		5号跡	後葉	野鳥、直系文直角	5				10		2	2	7	6	66			
		3号跡	後葉	野鳥、直系文直角	1			1			1		7	1	10			
		4号跡	後葉	野鳥、直系文直角、茅山下層	1								7	6	65			
		5号跡	後葉	野鳥、直系文直角、茅山下層	1						5	1	7	625				
		6号跡	後葉	野鳥、薄水縮直角				3						7	64			
		7号跡	後葉	野鳥、薄水縮直角、茅山下層				1			9	1	7	60				
		8号跡	後葉	茅山下層							7		7	63		なし		
		9号跡	後葉	薄水縮直角、茅山下層							3		7	64				
		10号跡	後葉	野鳥、薄水縮直角							3	3	7	64				
		11号跡	後葉	野鳥、薄水縮直角				2			3		7	68				
		土坑等	後葉					1			3		7	1	1626			
		道耕跡	後葉		12	1	1	1	31		34		7	14				
		1号跡	後葉	曲が鳥1						1	1							
		279号跡	後葉	縦鳥1										4				
		19号住居	後葉	茅山下層	1													
		30号住居	後葉	茅山下層	1									1				
		47号住居	後葉	茅山下層	1							1		5				
		49号住居	後葉	茅山下層	1								3					
		33 21号住居	後葉	茅山下層									1			9	23・25号住居と無関	
		24号住居	後葉	茅山下層	2									13				
		25号住居	後葉	茅山下層														
		42号住居	後葉	茅山下層									1	1				
		26・35・43号住居	後葉	茅山下層													石器なし	
		39・50号住居	後葉	茅山下層													石器なし	
		56号跡	後葉	茅山下層										1				
		道耕跡(第2部分)	後葉		19	1				2	29	1	77					
		梅ノ木沢	a	22 4号住居														
		2	2号住居	後葉		2							4					
		3号住居	後葉	縦水縮直角	1													
		4号住居	後葉	2														
		鑿石・土坑	後葉										4					
		道耕跡(第2部分)	後葉		19	1				2	29	1	77					
		六仙山	a	10 9号住居	後葉								2	1				
		8号住居	後葉															石器なし
		手芋上b~c区	b	25	後葉	多板文主体	41	18	3	2	1	2	26	9	579		剥片はZN以上を割計	
		西山	b	34 1区	後葉	八・九・十・打削式?	5	1		1	1	9	84	240				

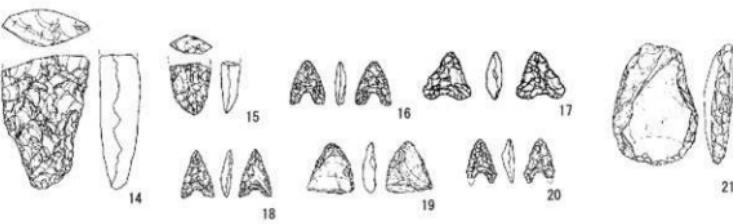
※「位数」は第1回と対応

表3-3 早期の遺跡の石器相成

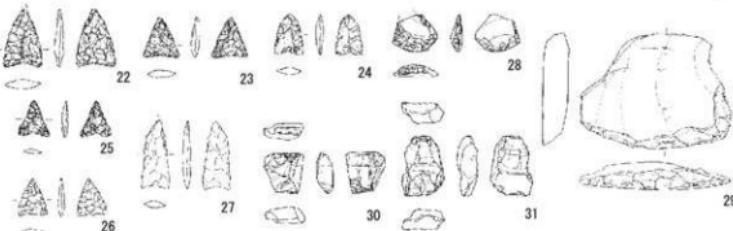
參「位置」註第1譜上對底



大庭塚遺跡



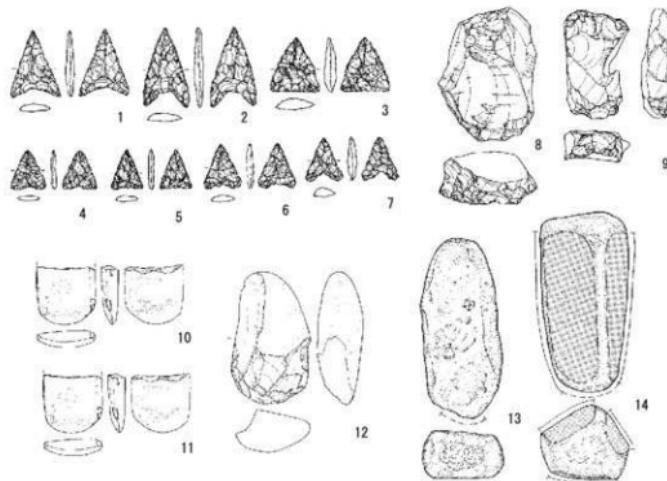
葛原沢第IV遺跡



丸尾北遺跡(エリアB)

0 5cm (11~13)  
0 5cm (上記以外)

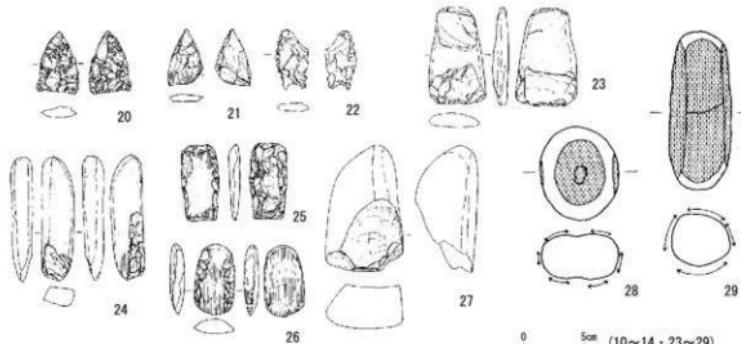
図2 草創期後半の石器群



上松沢平遺跡(早期前葉)



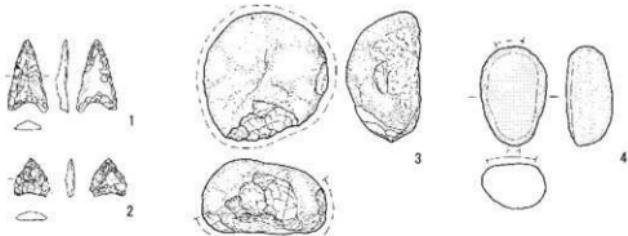
八田原遺跡(早期中葉)



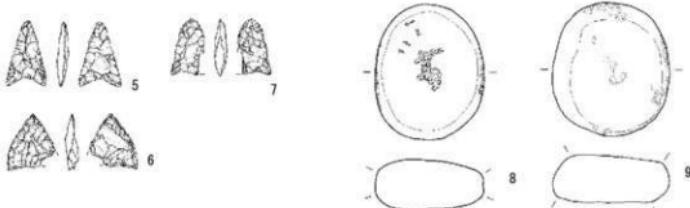
尾上イラウネ北遺跡(早期中葉)

0 5cm (10~14・23~29)  
0 5cm (上記以外)

図3 早期前葉・中葉の石器群



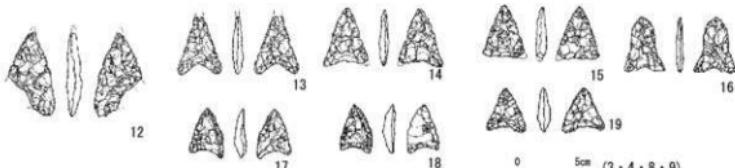
梅ノ木沢遺跡



尾上第2遺跡



清水柳北遺跡東尾根



西洞遺跡c・d区

0 5cm (3・4・8・9)  
0 5cm (上記以外)

図4 早期後葉の石器群

跡（第3図1～14）（財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2004）から稻荷台式期の遺跡まで磨石・敲石類が多数出土する。住居跡に限ってみると、基本的に覆土から出土する石器は少ないが、その中でも磨石・敲石類が多い傾向

がある。その他では礫器・石斧（10～12）の出土が目立つ（註3）。但し磨製石斧は上松沢平遺跡で2点出土しているものの、他のこの時期の遺跡では見られない。

石鏃と磨石・敲石類が石器組成の中心となる傾向は早期

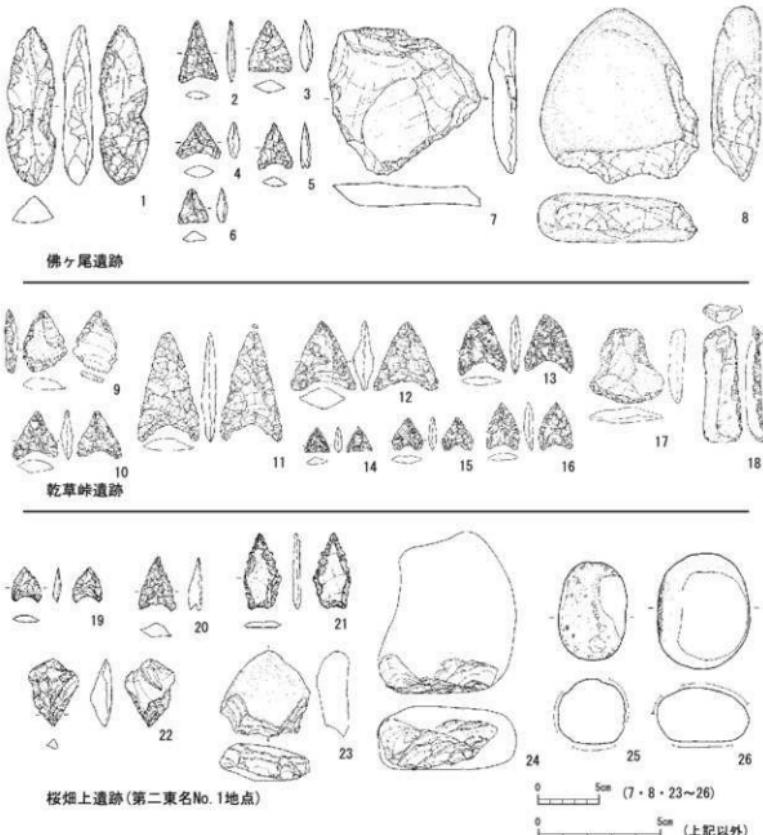


図5 早期末葉の石器群

中葉以降、末葉まで同様に認められ、早期中葉の資料を主体とする富士山麓の若宮遺跡（富士宮市教育委員会1983）、黒田向林遺跡（富士宮市教育委員会1986）、中葉から後葉の資料を主体とする伊豆東海岸の峠遺跡（東伊豆町教育委員会1995）など、石器の製作場と考えられる石器が大量に出土する遺跡が現れる。中葉に特徴的な石器としては局部磨製石器（図3・15・18・19・21）が挙げられる。これは当地域では押型文土器に伴うものと考えられる。蹠器・石斧は前葉から継続して存在する。1遺跡あたり

の点数は少ないが主に蹠素材の磨製石斧（24～26）が多くの遺跡で見られるようになる。早期後葉（図4）では集落遺跡など確実にこの時期のものと考えられる資料を見る限り、蹠器、石斧の出土例が減少する。また、鎌とするには極端に大きい石鎌形の尖頭器（11）の出土例が見られる（註4）。早期末葉の石器群（図5）では、佛ヶ尾遺跡（財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2007a）、下ノ大庭遺跡（財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2008b）で尖頭器（1）の出土が報告されているが、例数が少なく

希少な存在である。

## 5 遺跡と石器の分布

前節では主要器種の組成について述べたが、ここではさらに剥片類や石核を検討対象に含め、時期ごとの石器製作の変化について考察する。

### (1) 草創期後半

押庄繩文土器段階の大鹿庭遺跡、葛原沢第IV遺跡では住居跡床面に集中する形で多数の石器・剥片類が出土しており(図6)、住居内で石器製作が行われていたことが指摘

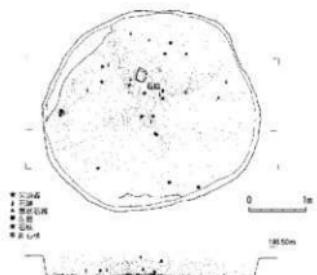


図6 葛原沢第IV遺跡第1号住居址の石器出土状況

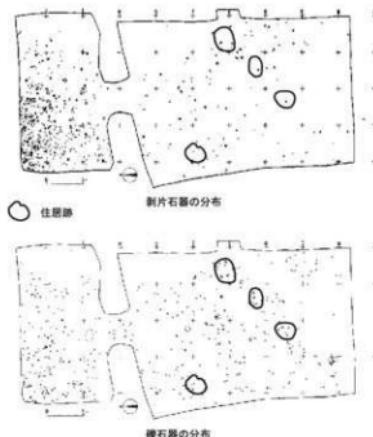


図7 三の原遺跡の住居跡と石器分布

されている(池谷2007)。清水柳北遺跡については、多数の剥片・碎片から成る石器集中が休場層に食い込む形で出土していることから住居跡であった可能性が示唆されており(註2)、同様の状況であった可能性がある。葛原沢第IV遺跡、清水柳北遺跡ではともに住居あるいはそれに相当すると考えられる範囲の外側周辺部にも土器・石器の分布の広がりが確認できる。大鹿庭遺跡に関しては他時期の遺物との混在のため遺構外の草創期の遺物分布は不明確である。

出土石器は黒曜石製のものが多く、葛原沢第IV遺跡では尖頭器製作の最終工程或いはリダクションが行われ、清水柳北遺跡についても、尖頭器の調整剥片が多く出土しているとされる。出土している石核は非黒曜石でほとんどがホルンフェルスであり、形態から礫器の可能性も考えられるものである。主にホルンフェルスで製作された礫器や一部の剥片石器が素材から遺跡内で製作される一方、尖頭器など黒曜石製器(分析されている限りではいずれの遺跡でも神津島産が主体である)は製品・半製品の状態から作業が行われたことが想定され、住居内でこうした作業により生じた剥片・碎片類が廃棄されたものと考えられる。

表裏繩文土器段階では、まとまった石器群の内容が把握できるのは丸尾北遺跡のみである(註5)、遺構を伴わない石器集中があり、構成石材は信州産黒曜石、次いで柏崎産黒曜石が多い。資料は総じて小形であるが、楔形石器が多く、また小形になった石核も出土している。剥片類の観察結果から、これらは原石ではなく、石核として調整が進んだ段階で遺跡に搬入され、石礫など小形の剥片石器の素材を供給したと推定される。

### (2) 早期前葉～早期中葉

早期・燃糸文土器段階のa型遺跡では、草創期押庄繩文土器とは対照的に、住居跡の床面上はおろか覆土中からもごく少数の石器が出土するのみとなる(池谷 前掲)。草創期の遺跡のように住居内で石器製作が行われなくなつたばかりでなく、複数の住居跡が出土している遺跡でも住居跡が石器の廃棄場として利用されていないことから石器製作が住居近傍で行われていなかった可能性が高い。この点に関しては、遺構外の石器の出土状況に関する十分な情報の得られる事例が少ないため限定的にしか論じることができない。井草II式～夏島式の集落遺跡である上松沢平遺跡では、住居跡の他、集石、炉跡まで含めて遺構内出土石器は主に磨石・敲石類で、剥片石器はごく少数となって

いる。報文によれば遺構外では主要器種以外の石器が400点以上あり、詳しい分布状況などは不明であるが単純に分布密度を算出すると100m<sup>2</sup>当たり10点以下である。三の原遺跡（立教院三の原遺跡調査団1991）南区は腰豆燃糸文系土器群の広谷段階から西洞段階の資料が主体とされる（池谷1997）。4基の住居跡はほぼ同時期のものとされており、出土石器はやはり磨石・敲石類が主となっている。住居跡が分布する調査区の南区全体でも石器組成の主体は磨石・敲石類で、剥片類は散在し特に集中した分布は示さない（図7）。なお、隣接する北区で黒曜石碎片が集中して出土している。これについては石器製作跡の可能性と流れ込みによる集積の可能性とが考えられているが、重複して出土している土器は早期後葉のものであり、層位的にも集落部分とは時期が異なるものと判断されている。小杉平第2遺跡（桜井市教育委員会1982）では、住居跡か否かは定かではない竪穴状遺構（「1号生活址遺構」）が1基出土している。遺構の周辺まで含めて出土石器は櫛器や磨石・敲石などに限られ、黒曜石剥片は1点のみしか出土していない。大平C遺跡（大仁町教育委員会1993）、若宮遺跡の他、表から削愛した大平A遺跡、菖蒲ヶ池A遺跡、東大室クズレ遺跡等の事例を見ても住居跡出土石器は多くて磨石・敲石類が数点程度というもののみであり、住居跡内から多数の剥片石器、剥片・碎片類が出土した草創期後半の場合とは状況が大きく異なることが推定される。

a型遺跡については上記のように石器製作の場の痕跡が乏しいと言えるが、b・c型遺跡については剥片類の出土量や出土位置に関する情報が得られる遺跡が少なく、現段階では十分な資料が少ない。その中では、丸尾北遺跡のように小規模な石器集中のある遺跡（註6）と、稻荷林遺跡のように石器の出土量自体が少ない遺跡が見られる。

早期中葉・押型文土器主体の遺跡ではb・c型遺跡で石器集中が残されている例がよりはっきりと認められる。土手上d・e区では押型文土器の分布と重複して径約20mにわたり石器が分布しており、これは石礫・磨石・敲石や石核、剥片類から成っている。小平B遺跡、小平C遺跡（三島市教育委員会1997）でも、集石遺構の周辺などに石器集中が残されている（図9-④）。また、池田B遺跡（財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2000）では黒曜石を埋納した土坑が1基あり、楔形石器や剥片など、石器素材を納めたものと考えられている（図9-①）。比較的広範囲の

調査事例でも住居跡が周囲で見つかっておらず、石器製作の場が集落遺跡とは別の地点に設けられていたことは確実である。無論こうした石器集中の存在はb・c型遺跡に普遍的なものではなく、八兵衛洞遺跡（沼津市教育委員会1981）など剥片類の出土がほとんど見られない遺跡も存在する。

a型遺跡については、いずれの遺跡でも住居跡覆土からの石器が少ないので同様である。表中に示した事例の他、この時期の住居跡と見られる遺構は尾上イラウネ遺跡、イラウネ遺跡などで住居と見られる遺構が見つかっているが、管見の限り石器が出土している事例でも石礫や磨石・敲石類などが数点出土する程度であり、住居跡から出土する石器はごく少数である傾向が窺える。一方、遺構外の包含層の分布状況については明示されている例は少ないため限られた事例から推定する他ない。尾上イラウネ北遺跡（沼津市教育委員会2002b）では住居跡と堀跡とがまとまって分布する状況が明らかになっているが、この領域での剥片類の出土量は、住居覆土・住居外ともに疎らである（100m<sup>2</sup>当たりでは約10点以下）。一方、これと異なる様相を示すのが若宮遺跡の事例である。この遺跡では石礫及びその未製品が約1,900点、剥片類が黒曜石約9,000点、頁岩・硬砂岩約10,000点出土しており、集約的な石器製作遺跡の様相を呈している。但し、土器と石礫以外の分布は不明のため遺構と石器群の関係を詳細に掘ることはできない。住居跡や堀跡などには少なくとも早期前～中葉にわたる異なる時期のものが含まれるが、遺跡の資料の大半は中期中葉の資料で占められるようである。石礫・同未製品は調査地の広い範囲から出土しているが、集中的な分布箇所は調査地中央部の谷部分など、押型文土器を伴う3基の住居の分布とは一致しない。住居跡からは少數の石器しか出土しない一方で、押型文土器と見られるが跡周辺に石礫や剥片類が多く分布するとされている。これだけの情報から断定することはできないが、集落と石器製作の場の中心とは必ずしも一致していない傾向が窺えることから、主たる石器製作場を伴うb型遺跡と伴わないa型遺跡とが近接して存在した可能性を想定しておく。同様の事例の可能性があるのが表3ではb型遺跡とした向田A遺跡（財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2007b）である。調査区東側の微高地に石器の集中分布域がある。谷を挟んで約50m離れた地点で遺物を伴わない時期不明の住居跡がある。住居跡

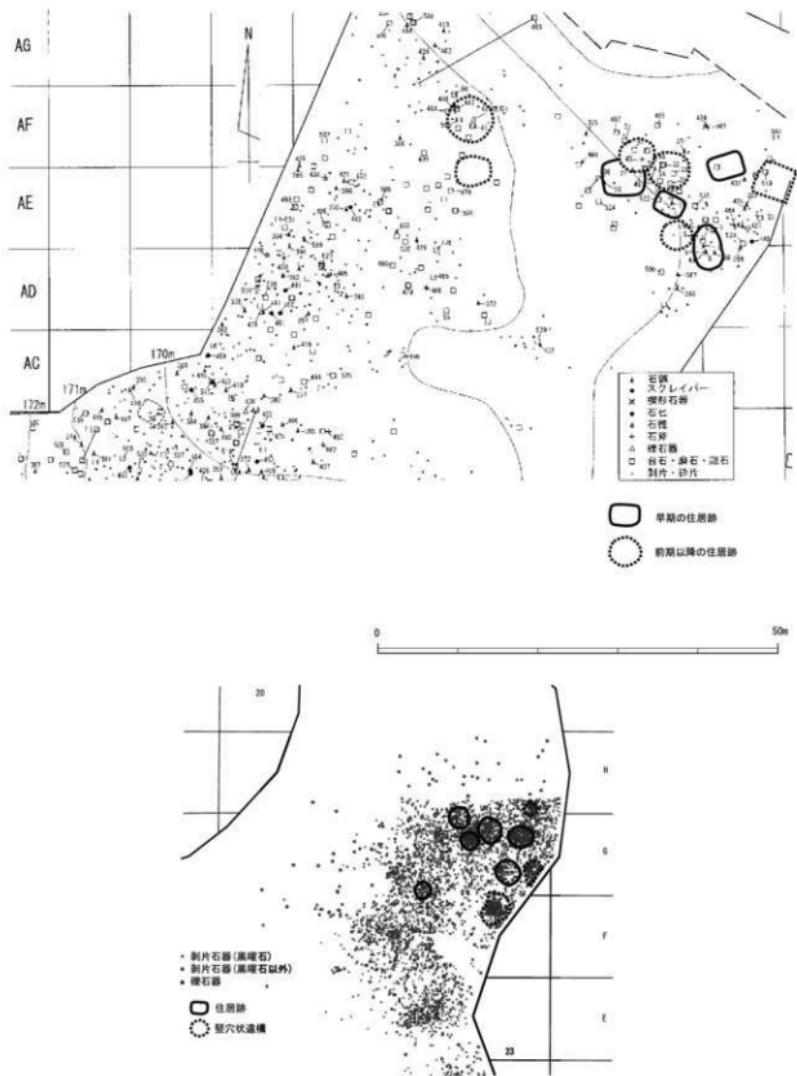


図8 梅ノ木沢遺跡（上）、佛ヶ尾遺跡（下）の住居跡と石器分布

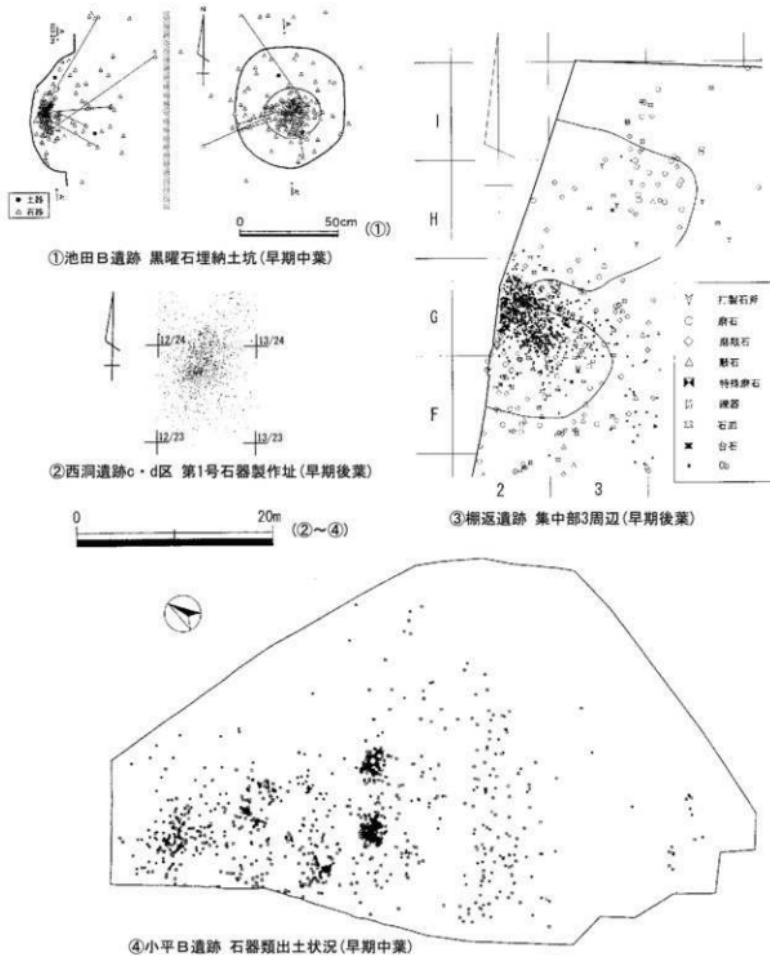


図9 早期中葉・後葉の遺跡の石器集中

がこの時期の遺構とすれば、近い時期に近接した地点で機能の異なる遺跡が形成された事例と考えられる。

### (3) 早期後葉

a型遺跡としては梅ノ木沢遺跡（財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2008f）、尾上第2遺跡（沼津市教育委員会

会2007）、清水柳北遺跡東尾根（沼津市教育委員会1989a）など、複数の住居跡から成る遺跡がある。このうち遺構外を含めて石器群の分布が示されているのは梅ノ木沢遺跡のみである。梅ノ木沢遺跡では他の時期の遺構・遺物が分布しているものの住居跡の分布域では石器の分布が希薄であ

り、調査区全体でも特に石器集中として捉えられるまとまりが見られないことが注意されている（図8上）。尾上第2遺跡・清水柳北遺跡東尾根では得られるデータが遺構内の資料数のみであるが、いずれも住居跡内からは剥片類まで含めて数点の石器が出土しているのみである。尾上第2遺跡は主に野島式・清水柳E類を伴う集落であり、重複住居が存在するなど継続的、或いは繰り返し遺跡が利用された形跡が伺える。清水柳北遺跡では早期に関しては中葉から末葉までに相当する住居跡がみつかっている。特に茅山下層式～茅山上層式期には同一地点で集落が継続しており、住居跡は茅山下層式新田2期と茅山上層式期との、少なくとも3段階に分けられる。このように継続利用された遺跡でも住居跡に石器・剥片類がほとんど廃棄されていない状況は次項で述べる早期末葉の集落と対照的である。

b・c型遺跡では黒曜石の剥片・碎片等がスポット的に分布した石器集中が見られる例がしばしば見られる（「石器製作跡」、「石器製作跡」などとして報告されていることが多い）（図9②・③）。西洞遺跡c・d区（沼津市教育委員会2002a）のように定型石器から石核・剥片類までそろった組成となっている遺跡と、元山中C遺跡（三島市教育委員会1994）や中村C遺跡（三島市教育委員会1991）のようにわずかな製品とその製作に伴い生じたと考えられる剥片類のみから成る単純な組成の遺跡とが見られる。

こうした石器製作の場として注目されている遺跡が塚原遺跡である。同遺跡は海への見晴らしのきく高所に位置しており、神津島産黒曜石が多く出土していることから、神津島から海上輸送で運ばれた黒曜石の一次搬入地点ではなかったかと考えられている遺跡で（東伊豆町教育委員会1995、池谷2009）、大量の黒曜石が搬入され、多数の石器が製作されている。この遺跡の中でもC区、及び3-10区と呼ばれる地点は早期中葉・押型文土器から後葉・条痕文土器までが主体となっており、早期中葉から後葉の石器製作場であったと考えられる。

#### （4）早期末葉

打越式並行期の佛ヶ尾遺跡（財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2007a）、下ノ大窪遺跡（財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2008b）、塚原遺跡（財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2008e）、神之木台式期の乾草跡遺跡（三島市教育委員会2005）、塩屋式・下吉井式が出土し早期の最終末にあたる桜畠上遺跡（第二東名No.1地點）（財

團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2009a）がある。a型遺跡から出土した剥片石器の分布密度を比較すると（検討の余地のある若宮遺跡の事例を除けば）、早期前葉～後葉の遺跡と末葉の遺跡とでは歴然と差があることが分かる（図10、註7）。末葉のa型遺跡では住居跡に近接する地点に石器集中が残されていたり、住居覆土内に多数の石器や剥片類が廃棄されていたりする点で早期前葉～後葉の遺跡とは異なる（図8下）。但し、住居跡から例外なく多数の石器が出土している訳ではないことは一見して明らかである。住居跡が1基しか見つかっていない塚原遺跡、当該期の住居跡が相互に分散して分布していた清水柳北遺跡など、住居跡が単独で存在している遺跡では須ら住居内出土石器は少ない。一方、佛ヶ尾遺跡、下ノ大窪遺跡、乾草跡遺跡、桜畠上遺跡など複数の住居がまとまって分布する遺跡では、覆土内の遺物が多い住居と少ない住居が見られる。覆土内の遺物の多寡は地形とは特に相關していないため、単なる流れ込みではなく先に廃絶した住居を遺棄・廃棄場所として利用したものと考えられる。さらに住居跡の周辺に石器集中があり、複数の住居跡がまとまる佛ヶ尾遺跡、下ノ大窪遺跡、乾草跡遺跡、桜畠上遺跡では全体で剥片類の数量が数千点に上っている。清水柳北遺跡については遺構外の石器出土状況の情報がないため不明だが、塚原遺跡では住居跡北側の石器集中が特徴的のものと考えられる。

a型遺跡以外では老平遺跡で当該期の可能性がある小規模な石器集中の存在が報告されている（財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2008d）が、まとめた石器集中のあるb・c型遺跡が管見の限りでは見られない点が早期後葉

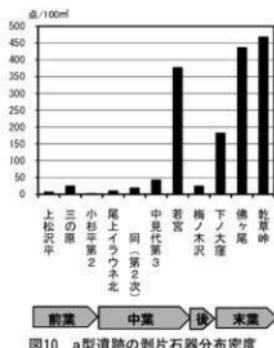


図10 a型遺跡の剥片石器分布密度

までと比べて対照的である。

## 6 遺跡群と居住パターン

前節で述べた時期別の石器群の在り方の変遷から、石器組成の変化と石器製作の場の変化とに注目すると、尖頭器や鎌状石器など早期以降とは異なる石器組成で、a型遺跡での石器製作が顕著に見られる草創期後半、石鎚と磨石・敲石主体の石器組成に変化し、a型遺跡と石器製作の場とが分離する傾向のある早期前葉から後葉、石器製作の場がa型遺跡と一致するようになる早期末葉、というように分けることが可能であろう（註8）。

これに先立つ時期、すなわち陸繩文系土器の時期について簡単に触れておく。この時期は有茎尖頭器に特徴づけられる時期であり、表探資料等も含めると多数の遺跡が知られている。一方で、それら尖頭器類の製作遺跡の存在は希薄であり、遺跡が密に分布する愛鷹山麓でも箱根山麓でも

現在のところそうした遺跡の存在は知られていない。現状で有茎尖頭器の製作遺跡として挙げられるのは伊豆市甲之背遺跡（中伊豆町教育委員会1996a）と芝川町小塚遺跡（芝川町教育委員会1995）とである。前者はガラス質黒色安山岩原産地直下に位置し主にこの石材により尖頭器製作が行われた遺跡で、隆線文土器、爪形文土器を伴う。後者は細縦線文土器を伴い、主にホルンフェルスで尖頭器製作が行われた遺跡であるが、このホルンフェルスは富士川水系に軒轅が多く分布する石材である。いずれも石材の入手が容易な地点に立地していることが指摘できる。

以上の草創期から早期の遺跡において想定される居住パターンを模式的に示すと図11のようにまとめられるであろう。草創期前半には石器製作地点が原産地近傍など特定の場所に限られ、愛鷹山麓などでは一時的滞在地点しか残さない、遊動的な居住パターンを示す。草創期後半・押庄繩文土器段階になると、愛鷹山麓でも石器製作が行われている遺跡が現れる。先述の通り、住居床面付近から石器が集中して出土することがこの時期の特徴と言え、住居内で石器製作が行われたことが想定されている。民族誌事例では一般的に日常的な生活空間は清掃される傾向がある（西秋1994）ことからすると、こうした状況は住居廃絶時点の状態であって住居の利用期間中の恒常的な姿ではなかつたと推測される。すなわち、住居を放棄し、他所へ移動するのに先立って石器製作を行ったものであろう（註9）。大庭窓遺跡の事例は住居状遺構に切り合い関係が認められることなどから同一地点の反復的利用の可能性を示唆しているが、遺跡での滞在期間は後の時期に比して相対的に短かったと推測される。

早期に入ると一転してa型遺跡での石器製作の痕跡は最後の草創期後半、早期末葉と比較すると明らかに少なくなり、石器の平面分布が明示されている事例を見る限りでは、石器や剥片の集中部を伴う事例はb・c型遺跡に限られる。そうした状況は早期後葉の遺跡で顕著に見ることができるが、これは前葉から続くものであった可能性が高い。

すなわち、早期前葉から後葉の遺跡はおおまかに①a型遺跡、②b・c型遺跡（石器製作地点）、③b・c型遺跡（非石器製作地点）に分けることができる。①の遺跡では磨石・敲石が多い傾向にあり、②の遺跡では磨石・敲石類を伴いつつも石鎚をはじめとする剥片石器が多い傾向にあり、③の遺跡では出土石器自体が少ない。

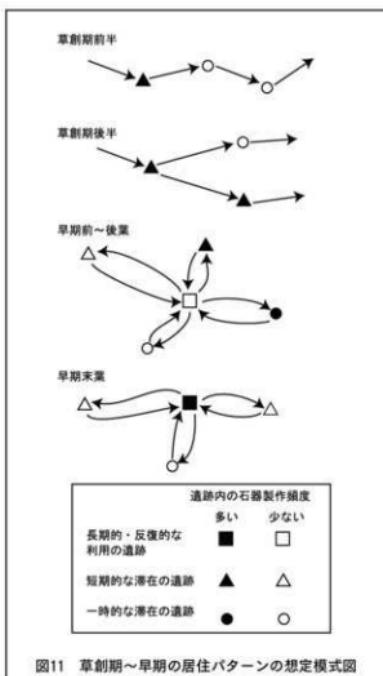


図11 草創期～早期の居住パターンの想定模式図

こうした遺跡ごとの石器組成の差は遺跡で行われた活動の差を反映したものと考えられる。①のa型遺跡が拠点的集落であるのに対し、②・③のb・c型遺跡が目的別の地点遺跡と考えられる。遺跡規模の変異、遺跡ごとの石器組成の変異がともに大きく、これは季節性コレクターのパターン（羽生2000a・b）に合致することから、a型遺跡とb・c型遺跡とは季節的な活動地点の差とも考えられる。具体的な事例としては、通年的拠点集落の周辺に目的別の活動地点を配するアイヌの居住パターン（渡辺1965；谷口1998：62頁）と類似することが考えられる。

このパターンが変化するのが早期末葉の打越式期以降で、石器製作の場は集落に伴って設けられる。早期末葉の遺跡は石器製作の痕跡が累積的に残されるa型遺跡と、石器の少ない小規模なb・c型遺跡とに二極分化した傾向にあると言える。前時期の居住パターンが季節的な遺跡の展開を示していたとすれば、早期末葉にはa型遺跡の通年の利用度が高まつたと考えられよう。この時期は海進が最高潮に向かう一方で愛鷹南麓の低地や狩野川平野が海から切り離される時期に当たり、資源環境の変化があったことが考えられるが、居住パターンの変化との因果関係は明らかでない。但し、前・中葉の遺跡が丘陵だけでなく低地や沿岸部まで分布していたのに対してここで挙げている末葉の遺跡はより内陸にあり、主たる活動領域が内陸の丘陵部に移っていたことが想定される。

## 7 結語

最後に本研究の課題と問題点を述べて結びとしたい。

前節のまとめは恰も時期を追うごとに一貫して定住化が進展した、といった印象を与えるが、前初期頭になると再び集落遺跡での石器製作の痕跡が消える一方で、早期の遺跡ではほとんど見られなかった石疊が多数出土するという変化の起こることが指摘されている（池谷2009）。定住化への単純な一方向の変化を示さないばかりでなく、僅か数百年程度（早期末葉は約500年程度の期間）で生業や居住パターンが変容していたことが分かる。

ところで、本稿では集成した遺跡のデータから導かれるパターンの抽出を試みたが、県東部における当該時期の発掘資料は少なくないにも関わらず、データ数は未だ十分とは言えない状況である。これは（最近では状況は改善されつつあるが）剥片類を含む石器の数量や分布、或いは土器

群の分布との相關関係を検討できるような資料提示がなされないことが多いめである。本稿に見るように、遺構内の石器や主要器種のみに注目していたいのでは遺跡の性格は十分に把握できない。総合的な資料提示の蓄積が望まれるところである。

## 註

- 1 山本典幸氏（1995）による遺跡形態の分類を参照した。
- 2 報告書では休場層20号石器ブロックがほぼ円形に遺物が分布し、遺構としては確認できなかったが住居跡の可能性が高いとされている。草創期2号ブロックは20号石器ブロックの周辺に分布するものである。
- 3 報告書で「礪斧」とされている刃部のみ加工した石器は礪器に含め、基部側まで加工されているものを打製石斧とした。
- 4 この種の石疊を拡大したような石器は県東部の早期の遺跡で散見されるが、寺林遺跡（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2003）のように早期後葉の資料が出土していない遺跡でも出土しているため帰属時期の限界はできない。早期後葉に位置づけられるならば石製装飾品や異形局部磨製石器（トロトロ石器）が出土する時期でもあり、利器以外の道具の可能性も想定される。
- 5 報告書における「エリアB」の石器群である。
- 6 丸尾北遺跡では、早期前葉の土器群は主に調査区の東半部（報告書におけるエリアE-1）で出土しており、中期の五領ヶ台式、加曾利E3式、曾利V式などが重複して出土した。耕作の影響か、早期の土器とされるものにも暗褐色土出土のものがかなりあるが、少なくとも回転纏文土器（報告書におけるI-a群）、及び燃系文土器（II-a群）は漸移層から富士黒土層にかけて出土している。石器群は、暗褐色土層、特に遺構に分布するものは中期後葉の加曾利E3式、曾利V式期のものと考えられるが、漸移層から出土している石器は早期前葉の土器に伴うものと考えられる。富士黒土層からはかなりの割合の石器が出土しているが早期の土器と中期の五領ヶ台式とが混在するため両時期のものが混在している可能性がある。表3では、早期前葉に位置づけられる可能性が高いと推定される漸移層出土分のみを集計して数量を示した。
- 7 上松沢平遺跡、若宮遺跡については調査区全体での集計、その他は住居跡分布域のみで集計している。
- 8 本来は存在した遺構が調査では検出不可能である場合もあったであろうが、傾向として早期末葉とそれ以前における対照的な在り方は大過ないと考えられる。中・後葉の遺跡で石器類が多い場合は悪く住居跡が見逃されたとは考えにくい。
- 9 西アジアで初めてテント以上の構築物を伴う住居跡が出現するナトゥーフィアン期の住居でも、石器等を含む廃棄物が住居内から密集して出土することが知られている。この事例では、この時期は後のPPNA期、PPNB期と異なり住居内の廃棄物を片づける意識が未だ希薄であったとの解釈が示されている（Hardy-Smith and Edwards 2004）。

## 引用・参考文献（論文等）

- 阿部芳郎 1989 「縄文時代早期における石器群の構成と生産活動—縄文文化の成立と展開を試考するための石器群の基礎的分析—」『駿台史学』第77号
- 阿部芳郎 1992 「縄文時代早期における植物質食糧加工用石器の在り方と生産活動—磨石、石皿多産遺跡の性格と生産活動の構成について—」『信濃』第44巻第9号
- 池谷信之 1997 「縦位密接施文から異方向帶状施文へ—駿豆地方押型土器の変遷と立式式—」『利根川』24・25
- 池谷信之 2006 「環中部高地南東域における黒曜石流通と原産地開発」『黒曜石文化研究』第4号
- 池谷信之 2007 「石器製作と土器製作の転換点—東海地方を中心として—」『公開シンポジウム「縄文文化の成立一草創期から早期へ」予稿集』
- 池谷信之 2009 「黒曜石考古学」新泉社
- 太田陽子・石橋克彦・松島義章・松田時彦・三好真澄・鹿島薰・松原憲子 1986 「掘削調査にともづく伊豆半島南部における完新世相対的海水準変化」『第四紀研究』第25巻第3号
- 小柴一夫 1983 「縄文時代早期後半における石器群の様相—南関東地方を中心に—」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』II
- 小林謙一 2007 「縄紋時代前半期の実年代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第137集 国立歴史民俗博物館
- 笹津洋海・瀬川裕市郎・閑野哲夫・杉山治夫 1976 「清水柳遺跡の土器と石器」『沼津市歴史民俗資料館紀要』I
- 設楽博己 2002 「縄文時代遺跡の概観」『沼津市史 資料編 考古』
- 谷口康浩 1998 「縄文時代集落論の争点」『國學院大學考古学資料館紀要』第8輯
- 谷口康浩 2002 「縄文早期のはじまる頃」「異貌」第20号
- 西秋良宏 1994 「旧石器時代における遺棄・廃棄行動と民族誌モデル」『先史考古学論集』第3集
- 羽生淳子 2000a 「縄文人の定住度(上)」「古代文化」第52巻第2号
- 羽生淳子 2000b 「縄文人の定住度(下)」「古代文化」第52巻第4号
- 松原彰子 2006 「駿河湾奥の海岸平野—火山活動と沈降運動の影響を受けた平野」『日本の地形5 中部』東京大学出版会
- 宮崎朝雄 2005 「統・縄文早期燃系文化の堅穴住居について—関東地方における初期定住化—」『縄文時代』16
- 山本典幸 1999 「五領ヶ台式土器様式期の季節の居住性—石器組成の民族誌学的解釈—」『先史考古学論集』第4集
- 渡辺 仁 1965 「アイヌの生態と本邦先史学の諸問題」「人類学雑誌」第72巻第1号
- Hardy-Smith, T and Edwards, P. C. 2004 The Garbage Crisis in prehistory: artifact discard patterns at the Early Natufian site of Wadi Hammeh 27 and the origins of household refuse disposal strategies. *Journal of Anthropological Archaeology* 23
- 大仁町教育委員会 1993 「長者ヶ原大平遺跡群発掘調査報告書」大仁町埋蔵文化財調査報告12
- 函南町教育委員会 2001 「上原遺跡」
- 財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996 「焼場遺跡B地点・五百石遺跡」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第73集
- 財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998a 「上ノ池遺跡」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第99集
- 財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998b 「桧林A遺跡」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第101集
- 財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2000 「池田B遺跡」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第122集
- 財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2003 「寺林遺跡・虎杖原古墳」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第142集
- 財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2004 「上松沢平遺跡」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第145集
- 財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2006 「西山遺跡」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第170集
- 財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2007a 「佛ヶ尾遺跡」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第175集
- 財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2007b 「向田A遺跡」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第178集
- 財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008a 「元野遺跡」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第189集
- 財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008b 「下ノ大窟遺跡」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第190集
- 財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008c 「櫛返遺跡・今里遺跡」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第191集
- 財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008d 「老平遺跡」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第192集
- 財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008e 「裾野市富沢・桃園の遺跡群」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第193集
- 財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008f 「梅ノ木沢遺跡I(縄文時代以降編)」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第194集
- 財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009a 「桜畠上遺跡」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第208集
- 財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009b 「丸尾北遺跡」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第210集
- 芝川町教育委員会 1995 「小塚遺跡」
- 芝川町教育委員会 2006 「大鹿塙遺跡・窪B遺跡(遺物編)」
- 裾野市教育委員会 1982 「裾野市千福市場平第1、第2 小杉平第1、第2 細野沢遺跡 発掘調査報告書」
- 中伊豆町教育委員会 1996a 「甲之背遺跡」
- 中伊豆町教育委員会 1996b 「九沢遺跡・六仙山遺跡」
- 沼津市教育委員会 1981 「八兵衛洞遺跡群発掘調査報告書」沼津市文化財調査報告書 第26集
- 沼津市教育委員会 1988 「土手上・中見代第II・第III発掘調査報告書(足高尾上No 1・6・7遺跡)」沼津市文化財調査報告書 第43集
- 沼津市教育委員会 1989a 「清水柳北遺跡発掘調査報告書」

## 引用・参考文献（報告書）

熱海市教育委員会 1995 「大越遺跡」

- その1』沼津市文化財調査報告書 第47集  
沼津市教育委員会 1989b 「清水柳北遺跡発掘調査報告書  
その2』沼津市文化財調査報告書 第48集  
沼津市教育委員会 1990 『広合遺跡(b・c・d区)・広合  
南遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書 第49集  
沼津市教育委員会 1991 『広合遺跡(e区)・二ツ洞遺跡  
(a区)発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書 第52集  
沼津市教育委員会 1992 『尾上イラウネ遺跡発掘調査報告  
書II』沼津市文化財調査報告書 第53集  
沼津市教育委員会 1997 『土手上遺跡(d・e区-1)発掘  
調査報告書』沼津市文化財調査報告書 第63集  
沼津市教育委員会 2001 『葛原沢第IV遺跡(a・b区)発  
掘調査報告書I』沼津市文化財調査報告書 第77集  
沼津市教育委員会 2002 『西側遺跡(c・d区)発掘調査  
報告書』沼津市文化財調査報告書 第78集  
沼津市教育委員会 2002b 『尾上イラウネ北遺跡(第2次)  
発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書 第81集  
沼津市教育委員会 2007 『尾上第2遺跡発掘調査報告書』  
沼津市文化財調査報告書 第93集  
東伊豆町教育委員会 1995 『峰遺跡』  
富士宮市教育委員会 1983 『若宮遺跡』富士宮市文化財調  
査報告書 第6集  
富士宮市教育委員会 1986 『黒田向林遺跡』  
富士宮市教育委員会 1989 『小松原A遺跡』富士宮市文化  
財調査報告書 第12集  
三島市教育委員会 1991 『三島スプリングスC.Cゴルフ場  
内埋蔵文化財発掘調査報告書II』  
三島市教育委員会 1994 『五輪・鏡音洞・元山中・陰洞遺  
跡I』  
三島市教育委員会 1997 『小平C遺跡 小平B遺跡』  
三島市教育委員会 2005 『三島市埋蔵文化財発掘調査報告  
書X』  
立教学院三の原遺跡調査団 1991 『三の原遺跡』
- 図版出典**
- 図2 : 芝川町教育委員会2006、沼津市教育委員会2001、財  
團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2009b  
図3 : 財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2004、同1996、  
沼津市教育委員会1992  
図4 : 財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2008f、沼津市  
教育委員会2007、同1989a、同2002a  
図5 : 財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2007a、三島市  
教育委員会2005、財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所  
2009a  
図6 : 沼津市教育委員会2001より縮尺改編  
図7 : 立教学院三の原遺跡調査団1991より改編  
図8 : 財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2008fより改編、  
財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2007aを元に作成  
図9 : 財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2000、沼津市  
教育委員会2002aより改編、財團法人静岡県埋蔵文化財調  
査研究所2008cより改編、三島市教育委員会1997

## Lithic Industry of the Late Incipient / Initial Jomon Period in the Eastern Shizuoka

—The change in settlement pattern viewed from lithic industry—

Yuuki NAKAMURA

**Summary:** In the east part of Shizuoka prefecture, there were a few residential sites with pit-dwellings in the late Incipient stage of Jomon period, and widely appeared in Initial stage of that period. This study makes initial attempt to clarify settlement pattern of these stages by analyzing lithic distribution pattern of data from late Incipient / Initial Jomon sites. In late Incipient stage of Jomon period, stone tools and fragments were left mainly inside of dwelling. In the next stages, very small amount of lithic débitage were found inside of dwelling. On the other hand, we can find quite few examples of manufacturing tools at resident places, but certain numbers of fragments of stone tools were left away from residences. At the end of the Initial stage, Okkoshi pottery stage, great amount of stone tools and their by-products were found discarded inside and around dwellings. Such difference in the lithic distribution pattern tells the change of places of manufacturing stone tools. At the same time, they are deeply connected with the change of settlement pattern which is controlled by their hunting schedule and seasonality.

**Keyword:** Incipient Jomon period, Initial Jomon period, lithic distribution pattern, settlement pattern

# 雌鹿塚式の壺の型式変化について

岩 本 貴

**要旨** 静岡県東部の弥生後期の土器様式である雌鹿塚式（渡井 1997）について、壺形土器の法量比較、文様帯、施文方法等の諸属性の統計処理を通じて第Ⅰ～Ⅲ群に大別し型式変化のあり方を検討した。また、雌鹿塚式に認められる菊川式の要素を抽出し、菊川式との並行関係について検討した。検討の結果、壺形土器は、長頸長胴のものが主体となり、頸部に羽状繩文を多用する第Ⅰ群、長頸形態をとどめつつ短胴化が進行した雌鹿塚式特有の壺形態を形成し、無文化がやや進んだ第Ⅱ群、短頸化、短胴化が進み無文化や柳刺突文の卓越から、菊川式的要素がより強まる第Ⅲ群の順に変化することを再確認した。

**キーワード：**雌鹿塚式、壺、諸属性の統計処理、菊川式との並行関係

## 1はじめに

雌鹿塚式（渡井 1997）は、静岡県東部の弥生後期の土器様式名称である（註1）。ここ十数年の中で、土器編年及び周辺地域との関わりについて活発な検討が行われ、その様相について徐々に明らかにされている（鈴木 1996、渡井 1997、篠原他 2002）。

雌鹿塚式は壺形土器・壺形土器（以下～形土器を略す）を基本とする比較的単純な器構成であるため、壺の観察が編年研究上の基本となることが多く、「細長頸から外反口縁部へ、頸部幅広文様帯から肩部文様帯への変化」（鈴木1996）、「くびれ部から口頸部が長く緩やかに開くのが特徴である（IV-1様式）」、「胸部下位の屈折が強くなって扁平化するものや球胴化するものが現れる（IV-2）」、「壺は、胴下位に稜をもつや肩の張ったイチジク形の器形が現れ、東遠江様式（菊川式）の影響とみられる。（V-1）」（篠原他 2002、括弧内は筆者注釈）といった指摘がなされ、短頸化及び胴部の扁平化や球胴化、菊川式の影響とみられる形態、施文方法の多用などが雌鹿塚式の壺の型式変化及び期別として認識されている。

本稿では、遺構一括出土資料を中心として、壺の法量比較、文様等の諸属性の統計処理を行い、その分析を通じて、遺構一括資料の時間的前後関係と各時期の特徴について導き出してみたい。

第1表 県東部地域の弥生後期土器編年表

（アミ掛けは本稿で対象とする遺構一括資料）

鈴木：1996		基準資料		渡井：1997		基準資料	
大別	細別			大別	細別		
		前半 御室町56号住		I	御室町32・38号住 豆原町32・43号住 御室町36号住		
古		後半 佐原・45号住				御室町1号住	
假称		的場A住				御室町2号住	
登別・散田						御室町1号住	
様式				II	月の輪上801・35		
		前半 的場F住			後半 二本松1号周溝墓 御室町SD01の一部		
						御室町11号住	
						豆原町72号住	
						御室町11号住	
						泉1号溝	
基準地：2002		基準資料		遺構式		基準資料	
大別	細別						
		尾崎遺跡		I	御室町31号住		
		神崎6・4住			御室町31号住		
	IV	日高2・3住			月の輪上801・35		
		豆生田32・43号住				御室町13号住	
				II	月の輪上801・53		
					月の輪上801・53		
					八戸能附B・2号住		
					（御室町第31号住）		
				V	月の輪上801・20		
					月の輪上801・20		
					八戸能附B・2号住		
						上石黒4・4号住	
						二本松1号周溝墓	
						八戸能附B・2号住	
						八戸能附C・9号住	

## 2 対象資料と検討の方法

壺の検討は、先学でも雌鹿塚式の基準資料として用いられることが多い遺構一括資料（第1表）を対象とし、以下の手順で行う（註2）。

- ① 法量比較、文様帯、施文方法等の諸属性の統計処理を通じ、一括資料ごとの傾向を概観する。
- ② 上記諸属性の組み合わせについて統計処理し、その組

み合わせから対象資料の大別を行う。

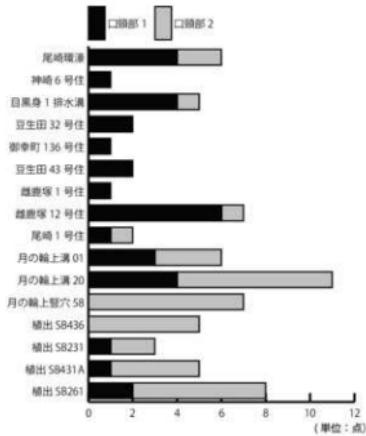
- ③ 対象資料に見られる菊川式またはその影響を受けた土器から、菊川式との並行関係について明らかにし、時間軸の検証を行う。

### 3 壺の法量比較、文様帯、施文方法の統計処理

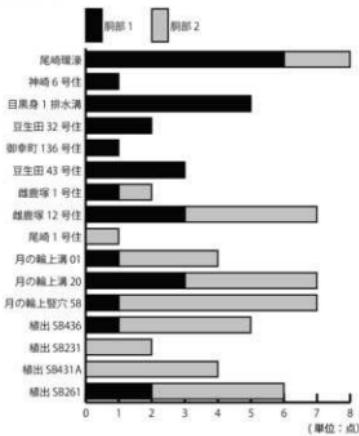
#### (1) 口頭部形態

頸部径から口縁部までの高さと、頭部径（註3）により口頭部形態の比較を行った。多少のばらつきはあるものの、遺構一括資料ごとに一定の傾向を示していると言えよう（第1図①・2図）。ここでは、グラフに對象資料の指

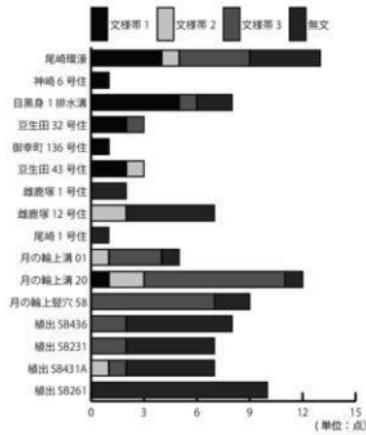
①口頭部比較



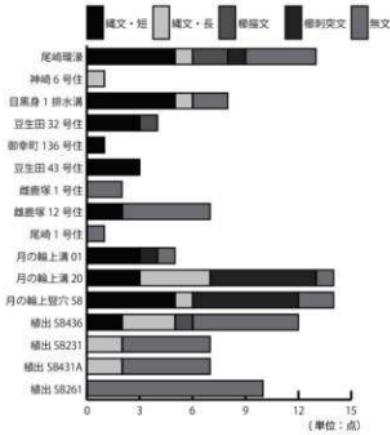
②胴部比較



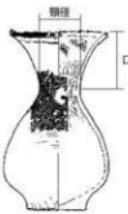
③文様帯比較



④施文比較



第1図 各属性の集計（遺構別）



グラフ

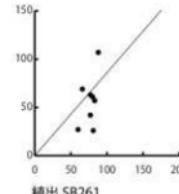
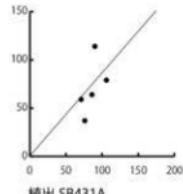
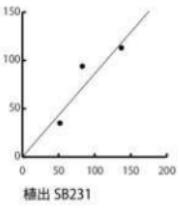
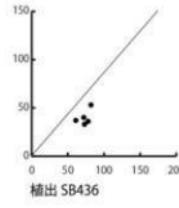
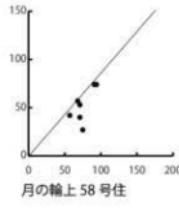
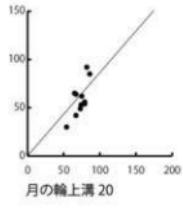
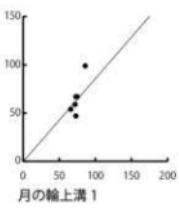
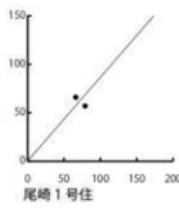
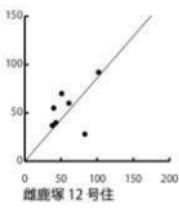
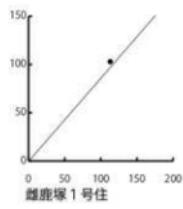
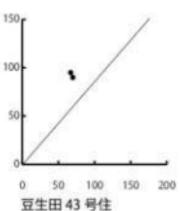
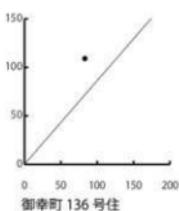
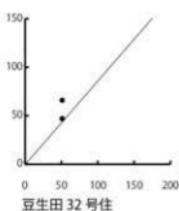
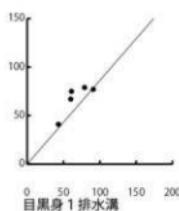
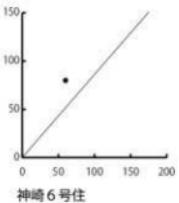
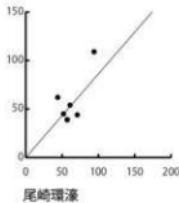
縦軸：口頸部高

横軸：口径

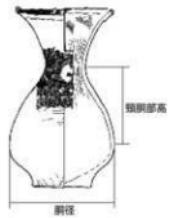
(単位: mm)

比較線は平均値で設定

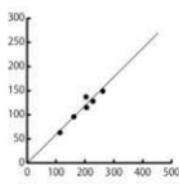
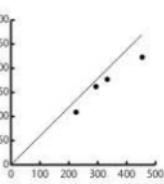
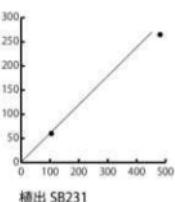
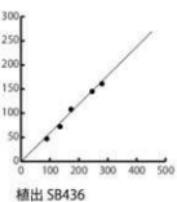
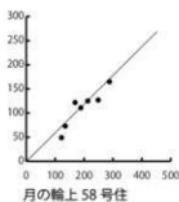
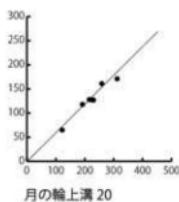
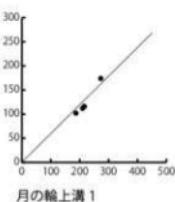
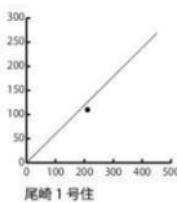
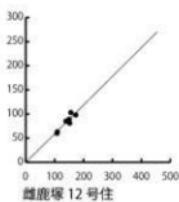
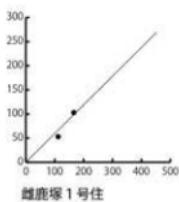
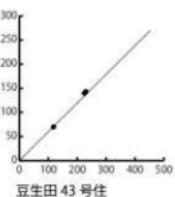
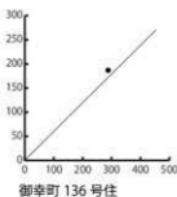
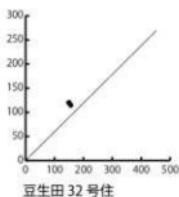
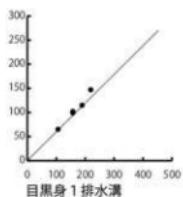
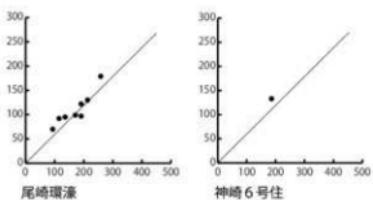
口頸部高 / 頸径 = 0.86



第2図 壁法量比較1（口頸部高／頸径）



グラフ  
縦軸：頭部高  
横軸：胸深  
(単位: mm)  
比較線は平均値で設定  
頭部高 / 胸深 = 0.59



第3図 壱法量比較（頭部高／胸深）

数の平均値（口頭部指數 = 口頭高／頭径 平均値0.86）を示す比較線を設定し、遺構資料間の比較を試みた。比較線の上（左）に行くほど細頭長頭、比較線の下（右）に行くほど太頭短頭の傾向にあることを示している。前者を口頭部1、後者を口頭部2とする。

#### （2）胸部形態

胸部最大径から頭部径までの高さと胸部最大径により胸部形態の比較を行った。口頭部形態と同様、多少のばらつきはあるものの、遺構一括資料ごとに一定の傾向を示していると言える（第1図②・3図）。口頭部形態の比較と同様、グラフに対象資料の指數の平均値（胸部指數 = 胸高／胸径 平均値0.59）を示す比較線を設定し、遺構一括資料間の比較を行った。比較線の上（左）に行くほど長胸、比較線の下（右）に行くほど短胸の傾向にあることを示している。前者を胸部1、後者を胸部2とする。

#### （3）頭～肩部文様帶

頭～肩部文様帶について以下のとおり分類した（第4図①）。単独資料や、該当資料が少ないものも含むが、遺構ごとのあり方では、頭～肩部文様帶分類により、第1図③のような傾向を見ることができる。

文様帶1 頭部最小径の上下にわたり施文するもの。

文様帶2 頭部最小径以下に施文するもの。

文様帶3 肩部またはそれ以下に施文するもの。後述する菊川式との関連を考慮する必要がある。

無 文 頭～肩部が無文のもの。

#### （4）施文方法

頭～肩部文様帶における施文方法は、以下のとおり分類した（第4図②）。複数の施文方法を併用する個体は、それぞれをカウントした。なお、縄文は、施文原体の長短及び結節を伴う縄文の観察が、雄鹿塚式と菊川式的要素を分別する上でひとつの指標となることが指摘されていることから（篠原 2006）、本稿では第5図の計測結果に基づき、結節縄文が一定量を占めるようになる原体長30mm（注4）を境に長短を区別して分類した。遺構ごとのあり方は、第1図④のとおりである。

縄文・短 原体長30mm未満のもの。

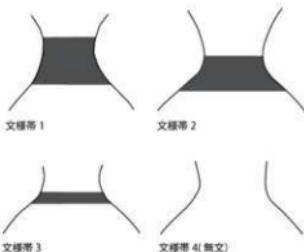
縄文・長 原体長30mm以上のもの。結節を伴うものが一定量認められる。後述する菊川式との関連を考慮する必要がある。

櫛 描 文 櫛描波状文、櫛描直線文を施すもの。後述する菊川式または登呂式との関連を考慮する必要がある。

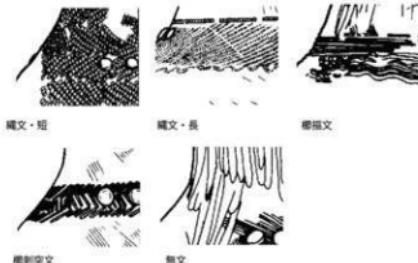
櫛刺突文 櫛状工具による刺突を施すもの。後述する菊川式との関連を考慮する必要がある。

無 文 無文のもの。

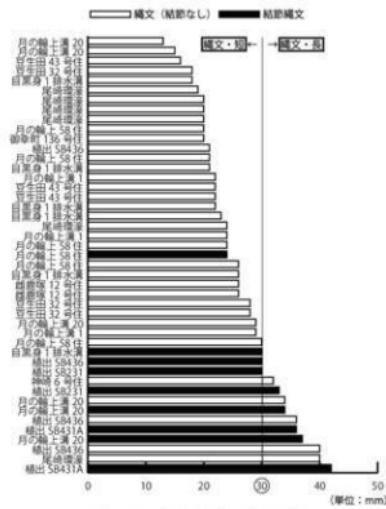
#### ①頭～肩部文様帶



#### ②施文方法



第4図 頭～肩部文様帶／施文方法の分類



第5図 壺肩部繩文原体長比較

#### 4 各部位の分類の相関関係

##### (1) 各分類の組み合わせ

第2表は、前節(1)～(4)でみられた諸形態の組み合わせ関係について集計したものである。資料数が限られているため、比較は、遺構ごとではなく、全資料を用いて行っている。これによれば、以下の組み合わせが主体あるいは一定量を占めていることが理解できる。

##### (ア) 口頭部と胸部形態

- ・口頭部1と胸部1の組み合わせ
- ・口頭部1と胸部2の組み合わせ
- ・口頭部2と胸部2の組み合わせ

##### (イ) 文様帯と施文方法

- ・文様帯1と繩文・短の組み合わせ
- ・文様帯2と繩文・短／長の組み合わせ
- ・文様帯3と繩文・短／長、櫛刺突文の組み合わせ
- ・無文

##### (ウ) 口頭部と文様帯

- ・口頭部1と無文及び文様帯1の組み合わせ
- ・口頭部2と無文及び文様帯3の組み合わせ

##### (エ) 口頭部と施文方法

- ・口頭部1と繩文・短及び無文の組み合わせ
- ・口頭部2と無文及び櫛刺突文の組み合わせ

##### (オ) 胸部と文様帯

- ・胸部1と文様帯1及び無文の組み合わせ
- ・胸部2と無文及び文様帯3の組み合わせ

##### (カ) 胸部と施文方法

- ・胸部1と繩文・短及び無文の組み合わせ
- ・胸部2と無文及び櫛刺突文の組み合わせ

##### (2) 遺構一括資料の大別

以上の傾向とともに、口頭部と胸部形態の組み合わせを軸に遺構一括資料をまとめると、以下のとおり3群に整理されると考えられる(第3表)。ここでは第I～III群とする。なお、紙幅の都合、遺跡・遺構名は、略して記述する。

##### (ア) 第I群(第3表、第6図)

口頭部1、胸部1を主体とする一群として位置づける。本群の特徴を示す資料として、尾崎環濠、目黒身1排水溝、豆生田32号住、御幸町136号住、豆生田43号住があげられる。また、繩文・長を用いる以外は本群に該当する神崎6号住についても便宜的に本群に含める。

文様帯1に繩文・短を施すものと無文のものが主体となる一方、文様帯2に繩文・短を施すもの、文様帯3に繩文・短や櫛描文、櫛刺突文を施すものが一定量認められる。文様帯3と櫛刺突文については後述する菊川式的な要素として認識しうる。

##### (イ) 第II群(第7図)

口頭部1、胸部2を主体とする一群として位置づける。本群の特徴を示す資料として、離鹿塚1号住、離鹿塚12号住があげられる。離鹿塚1号住については、資料数が少なく偶然性の排除が不十分と考えられるが胸部1・2が同数認められるため胸部2を評価して便宜的に本群に含める。文様帯2に繩文・短を施すものと無文のものが認められる。胸部高の圧縮化が口頭部のそれに先行して開始された結果、頭～肩部に屈曲点が集中し離鹿塚式特有の胸部形態を良好に示す形態が多いのも本群の特徴である。なお、口頭部2、胸部1の組み合わせが少ないので、短頭化に先立ち短頭化が進行した結果と考えられる。資料数が限られることから、第I群と第III群の過渡的状況を示している可能性がある。

(ウ) 第III群 (第7~9図)

口頸部2と胸部2を主体とする一群として位置づける。本群の特徴を示す資料として、月の輪上溝20、月の輪上竪穴58、植出SB436、植出SB231、植出SB431A、植出SB261が該当する。なお、口頸部1・2が両数認められる以外は本群に該当する尾崎1号住、月の輪溝01は口頸部

2を評価し便宜的に本群に含めた。

無文及び文様帶3に縄文・短／長、櫛刺突文を施すものが主体となるようである。文様帶3、縄文・長、櫛刺突文の比率が本群で高いことは、前述のとおり、菊川式との関連性が強いことを示していると考えられる。したがって、第III群は、施文方法において第I・II群との間に大きな違

第2表 口頸部形態、調部形態、文様帶、施文方法の組み合わせ (本稿対象の全資料を対象とした集計)

(ア) 口頸部: 腺部		(イ) 文様帶: 施文方法				(ウ) 口頸部: 文様帶			
点数	口頸部1	口頸部2	文様帶1	文様帶2	文様帶3	無文	口頸部1	口頸部2	
縄文・短	13	6	12	0	0	0	文様帶1	7	2
縄文・長	2	2	9	0	0	0	文様帶2	4	1
柳描文	1	0	3	0	0	0	文様帶3	5	9
櫛刺突文	1	0	13	0	0	0	無文	7	21
無文	0	0	0	44	44	0	合計	23	33
合計	17	8	37	44	0	0			

割合	口頸部1	口頸部2	文様帶1	文様帶2	文様帶3	無文	口頸部1	口頸部2	
縄文・短	64.7%	16.0%	76.5%	75.0%	32.4%	0.0%	文様帶1	30.4%	6.1%
縄文・長	35.3%	84.0%	11.8%	25.0%	24.3%	0.0%	文様帶2	17.4%	3.0%
柳描文			5.9%	0.0%	8.1%	0.0%	文様帶3	21.7%	27.3%
櫛刺突文			5.9%	0.0%	35.1%	0.0%	無文	30.4%	63.6%
無文			0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	合計	100.0%	100.0%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%			

割合	口頸部1	口頸部2	文様帶1	文様帶2	文様帶3	無文	口頸部1	口頸部2	
縄文・短	●	△	●	●	△	○	文様帶1	●	△
縄文・長	●	●	△	●	●	△	文様帶2	△	△
柳描文	△	△	△	△	△	△	文様帶3	△	●
櫛刺突文	△	△	△	●	△	●	無文	●	●
無文	△	△	△	△	●	●			
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%			

判定	口頸部1	口頸部2	文様帶1	文様帶2	文様帶3	無文	口頸部1	口頸部2	
縄文・短	●	△	●	●	△	○	文様帶1	●	△
縄文・長	●	●	△	●	●	△	文様帶2	△	△
柳描文	△	△	△	△	△	△	文様帶3	△	●
櫛刺突文	△	△	△	●	△	●	無文	●	●
無文	△	△	△	△	●	●			
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%			

(ア)	口頸部: 施文方法	(オ)	胸部: 文様帶	(カ)	胸部: 施文方法	
点数	口頸部1	口頸部2	胸部1	胸部2	胸部1	胸部2
縄文・短	12	5	11	0	15	7
縄文・長	2	4	3	4	5	4
柳描文	1	0	6	11	1	0
櫛刺突文	2	9	10	20	1	8
無文	7	21	30	35	10	20
合計	24	39			32	39

割合	口頸部1	口頸部2	胸部1	胸部2	胸部1	胸部2
縄文・短	50.0%	12.8%	36.7%	0.0%	46.9%	17.9%
縄文・長	8.3%	10.3%	10.0%	11.4%	15.6%	10.3%
柳描文	4.2%	0.0%	20.0%	31.4%	3.1%	0.0%
櫛刺突文	8.3%	23.1%	33.3%	57.1%	3.1%	20.5%
無文	29.2%	53.8%	100.0%	100.0%	31.3%	51.3%
合計	100.0%	100.0%			100.0%	100.0%

判定	口頸部1	口頸部2	胸部1	胸部2	胸部1	胸部2
縄文・短	●	△	●	△	●	△
縄文・長	△	△	△	△	△	△
柳描文	△	△	△	△	△	△
櫛刺突文	△	●	●	●	△	●
無文	●	●	●	●	●	●
合計	100.0%	100.0%			100.0%	100.0%

(エ)	口頸部: 施文方法	(オ)	胸部: 文様帶	(カ)	胸部: 施文方法	
点数	口頸部1	口頸部2	胸部1	胸部2	胸部1	胸部2
縄文・短	12	5	11	0	15	7
縄文・長	2	4	3	4	5	4
柳描文	1	0	6	11	1	0
櫛刺突文	2	9	10	20	1	8
無文	7	21	30	35	10	20
合計	24	39			32	39

割合	口頸部1	口頸部2	胸部1	胸部2	胸部1	胸部2
縄文・短	50.0%	12.8%	36.7%	0.0%	46.9%	17.9%
縄文・長	8.3%	10.3%	10.0%	11.4%	15.6%	10.3%
柳描文	4.2%	0.0%	20.0%	31.4%	3.1%	0.0%
櫛刺突文	8.3%	23.1%	33.3%	57.1%	3.1%	20.5%
無文	29.2%	53.8%	100.0%	100.0%	31.3%	51.3%
合計	100.0%	100.0%			100.0%	100.0%

判定	口頸部1	口頸部2	胸部1	胸部2	胸部1	胸部2
縄文・短	●	△	●	△	●	△
縄文・長	△	△	△	△	△	△
柳描文	△	△	△	△	△	△
櫛刺突文	△	●	●	●	△	●
無文	●	●	●	●	●	●
合計	100.0%	100.0%			100.0%	100.0%

(エ)	口頸部: 施文方法	(オ)	胸部: 文様帶	(カ)	胸部: 施文方法	
点数	口頸部1	口頸部2	胸部1	胸部2	胸部1	胸部2
縄文・短	12	5	11	0	15	7
縄文・長	2	4	3	4	5	4
柳描文	1	0	6	11	1	0
櫛刺突文	2	9	10	20	1	8
無文	7	21	30	35	10	20
合計	24	39			32	39

割合	口頸部1	口頸部2	胸部1	胸部2	胸部1	胸部2
縄文・短	50.0%	12.8%	36.7%	0.0%	46.9%	17.9%
縄文・長	8.3%	10.3%	10.0%	11.4%	15.6%	10.3%
柳描文	4.2%	0.0%	20.0%	31.4%	3.1%	0.0%
櫛刺突文	8.3%	23.1%	33.3%	57.1%	3.1%	20.5%
無文	29.2%	53.8%	100.0%	100.0%	31.3%	51.3%
合計	100.0%	100.0%			100.0%	100.0%

判定	口頸部1	口頸部2	胸部1	胸部2	胸部1	胸部2
縄文・短	●	△	●	△	●	△
縄文・長	△	△	△	△	△	△
柳描文	△	△	△	△	△	△
櫛刺突文	△	●	●	●	△	●
無文	●	●	●	●	●	●
合計	100.0%	100.0%			100.0%	100.0%

いを見出しができる。

なお、本稿では割愛するが、本群には口縁部内面に突帯を有する大型の複合口縁壺及びその可能性が高い土器を組成する資料が含まれており（植出SB231、SB431）、後述するように、その出現は本群を細分する指標となる可能性があろう。

先学の指摘のとおり口頭部高、胸部高の圧縮が型式変化の方向であるとすれば、おおむね第Ⅰ群→第Ⅱ群→第Ⅲ群の順に変化することが考えられる。この型式変化の方向性について、次節では、遺構一括資料に含まれる菊川式またはその要素を持つ土器と菊川式土器編年との比較により検証する。

第3表 口頭部形態、胸部形態、文様帶、施文方法の組み合わせ（対象遺構一括資料別集計）

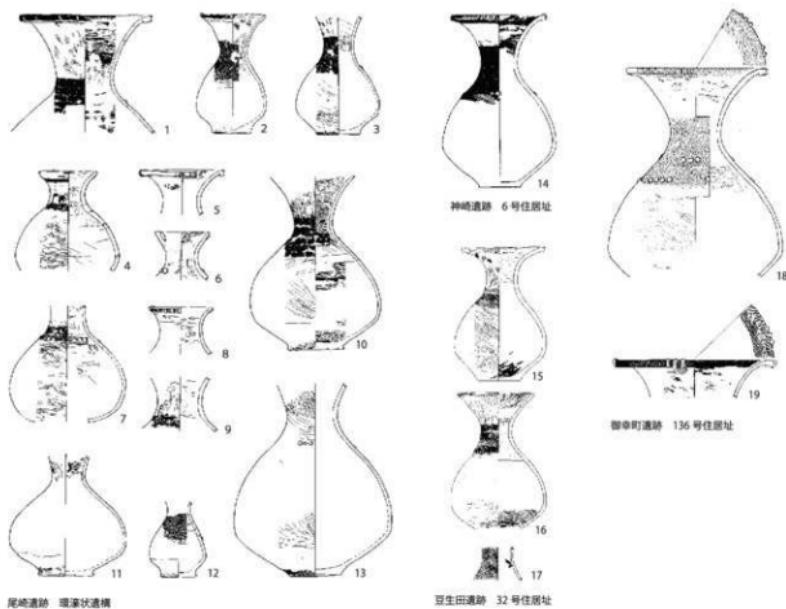
点数	遺跡・遺構名	口頭部		胸部		文様帶			施文方法					
		1	2	1	2	1	2	3	無文	織文・粗	織文・長	織文・彫	織文・彫文	無文
第Ⅰ群	尾崎環濠	4	2	6	2	4	1	4	4	5	1	2	1	4
	神崎 6号住	1	0	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0
	日黒身1排水溝	4	1	5	0	5	0	1	2	5	1	0	0	2
	豆生田32号住	2	0	2	0	2	0	1	0	3	0	1	0	0
第Ⅱ群	御幸町136号住	1	0	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0
	豆生田43号住	2	0	3	0	2	1	0	0	3	0	0	0	0
	越鹿塚1号住	1	0	1	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2
第Ⅲ群	越鹿塚12号住	6	1	3	4	0	2	0	5	2	0	0	0	5
	尾崎 1号住	1	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	1
	月の輪上溝01	3	3	1	3	0	1	3	1	3	0	0	1	1
	月の輪上溝20	4	7	3	4	1	2	8	1	3	4	0	6	1
第田群	月の輪上溝穴58	0	7	1	6	0	0	7	2	5	1	0	6	2
	植出SB436	0	5	1	4	0	0	2	6	2	3	1	0	6
	植出SB231	1	2	0	2	0	0	2	5	0	2	0	0	5
	植出SB431A	1	4	0	4	0	1	1	5	0	2	0	0	5
	植出SB261	2	6	2	4	0	0	0	10	0	0	0	0	10

割合	遺跡・遺構名	口頭部		胸部		文様帶			施文方法					
		1	2	1	2	1	2	3	無文	織文・粗	織文・長	織文・彫	織文・彫文	無文
第Ⅰ群	尾崎環濠	66.7%	33.3%	75.0%	25.0%	30.8%	7.7%	30.8%	30.8%	38.5%	7.7%	15.4%	7.7%	30.8%
	神崎 6号住	100.0%	0.0%	100.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	日黒身1排水溝	80.0%	20.0%	100.0%	0.0%	62.5%	0.0%	12.5%	25.0%	62.5%	12.5%	0.0%	0.0%	25.0%
	豆生田32号住	100.0%	0.0%	100.0%	0.0%	66.7%	0.0%	33.3%	0.0%	75.0%	0.0%	25.0%	0.0%	0.0%
第Ⅱ群	御幸町136号住	100.0%	0.0%	100.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	豆生田43号住	100.0%	0.0%	100.0%	0.0%	66.7%	0.0%	33.3%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	越鹿塚 1号住	100.0%	0.0%	50.0%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
第Ⅲ群	越鹿塚12号住	65.7%	14.3%	42.9%	57.0%	0.0%	25.6%	39.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	尾崎 1号住	50.0%	50.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
第田群	月の輪上溝01	50.0%	50.0%	25.0%	75.0%	0.0%	20.0%	60.0%	20.0%	60.0%	0.0%	0.0%	0.0%	20.0%
	月の輪上溝20	36.4%	63.6%	42.9%	57.1%	8.3%	16.7%	66.7%	8.3%	21.4%	28.6%	0.0%	42.9%	7.1%
	月の輪上溝穴58	0.0%	100.0%	14.3%	85.7%	0.0%	0.6%	77.8%	22.2%	35.7%	7.1%	0.0%	42.9%	14.3%
	植出SB436	0.0%	100.0%	26.0%	74.0%	0.0%	0.6%	25.0%	75.0%	16.7%	25.0%	8.3%	0.0%	50.0%
第田群	植出SB231	33.3%	66.7%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	28.6%	71.4%	0.0%	28.6%	0.0%	0.0%	71.4%
	植出SB431A	30.0%	80.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	34.3%	43.0%	71.4%	0.0%	28.6%	0.0%	0.0%
	植出SB261	25.0%	75.0%	33.3%	66.7%	0.0%	0.0%	39.0%	60.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%

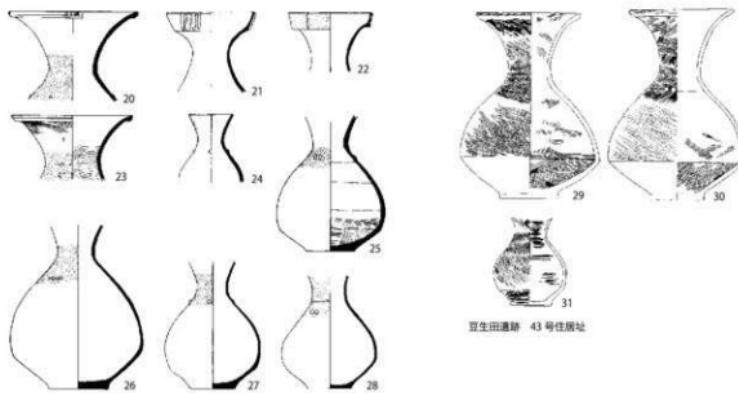
判定	遺跡・遺構名	口頭部		胸部		文様帶			施文方法					
		1	2	1	2	1	2	3	無文	織文・粗	織文・長	織文・彫	織文・彫文	無文
第Ⅰ群	尾崎環濠	●	△	●	●	○	△	●	●	●	△	△	●	●
	神崎 6号住	●	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	日黒身1排水溝	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	豆生田32号住	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
第Ⅱ群	御幸町136号住	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	豆生田43号住	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	越鹿塚 1号住	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
第Ⅲ群	越鹿塚12号住	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	尾崎 1号住	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	月の輪上溝01	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	月の輪上溝20	△	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
第田群	月の輪上溝穴58	△	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	植出SB436	△	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	植出SB231	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	植出SB431A	△	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	植出SB261	△	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

凡例 ● = (該当点数/全点数) ≥ (該当分類/全分類数)

△ = (該当点数/全点数) < (該当分類/全分類数)



尾崎道路 球藻状遺構  
豆生田道路 32号住居址

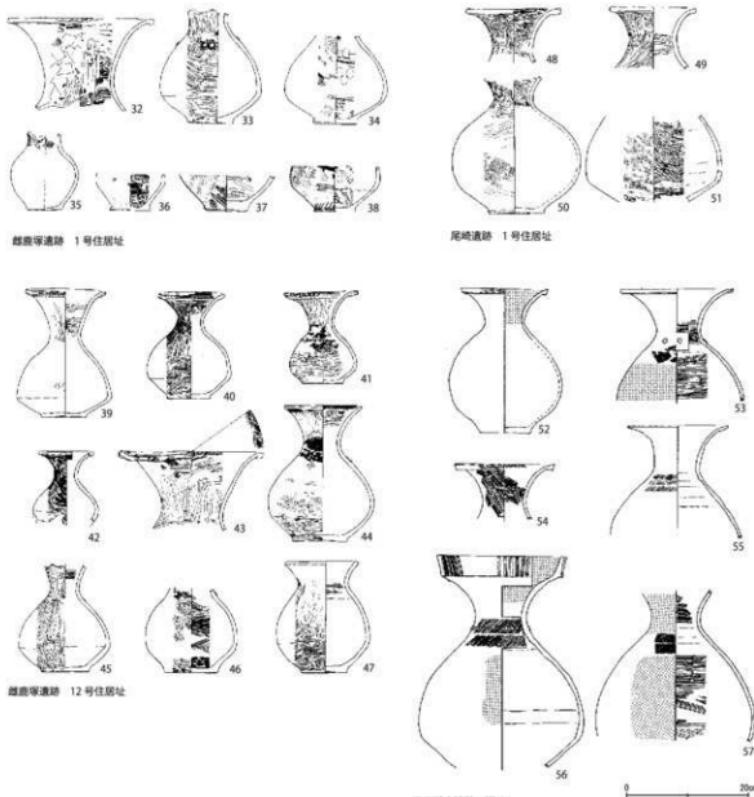


豆生田道路 43号住居址

日高身遣跡 第1群水瓶

0 20cm

第6図 第1群土器

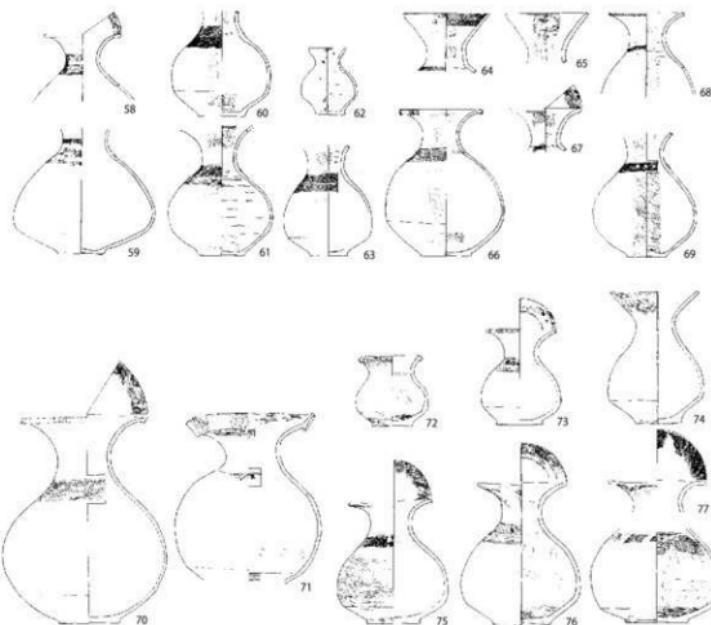


第7図 第II群土器／第III群土器①

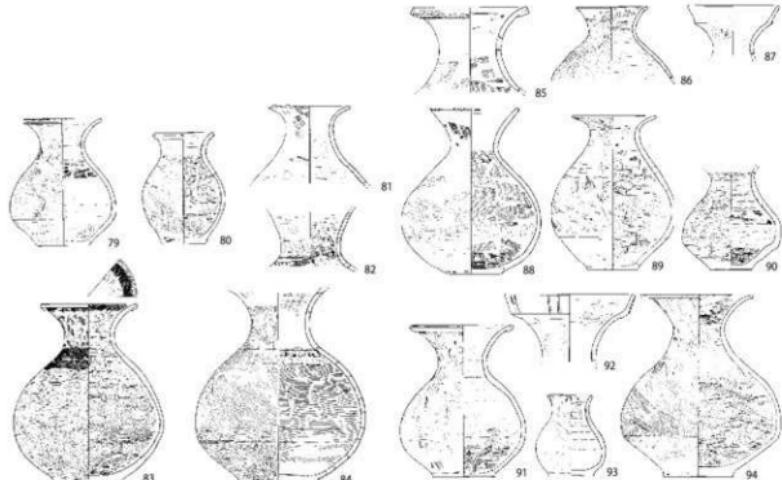
## 5 雌鹿塚式と菊川式の並行関係と影響

前節で行った第I～III群の時間的前後関係を検証することと同時に、周辺地域との並行関係を明らかにするために、東遠江の菊川式土器編年との対比を行う。なお、当該土器の編年観については、篠原氏案の東遠江V-1～5（篠原他 2002）を参考に筆者が判断した。全てを菊川式的要素と結論付けるにはさらに詳細な分析が必要であるが、本稿で集計した文様帶3・縦文・長・櫛刺突文、一部の櫛描文が菊川式的要素と考えることができよう。また、口縁部形態として、内湾気味に開くもの、屈折内湾口縁

（岩本 1995）のもの、折り返し口縁のうち、幅狭でやや厚めの折り返し部を有し、口縁部が水平近くまで外反し、折り返し部の裏面が側面から見えないもの、底部形態として上げ底状の底部、輪台の内側に粘土を充填したと推測されるやや小さめの底部（註5）なども菊川式的要素と認識できよう。その他、調整方法等による分別も可能であるが、資料数が限られているため必要に応じて記述することとする。



月の輪上遺跡 58号住居址

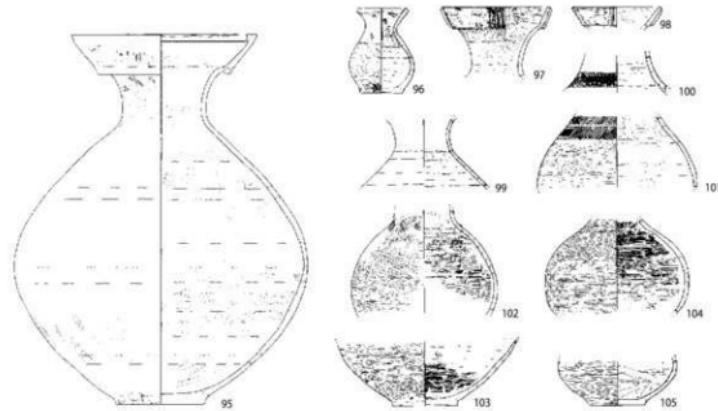


補出遺跡 SB436

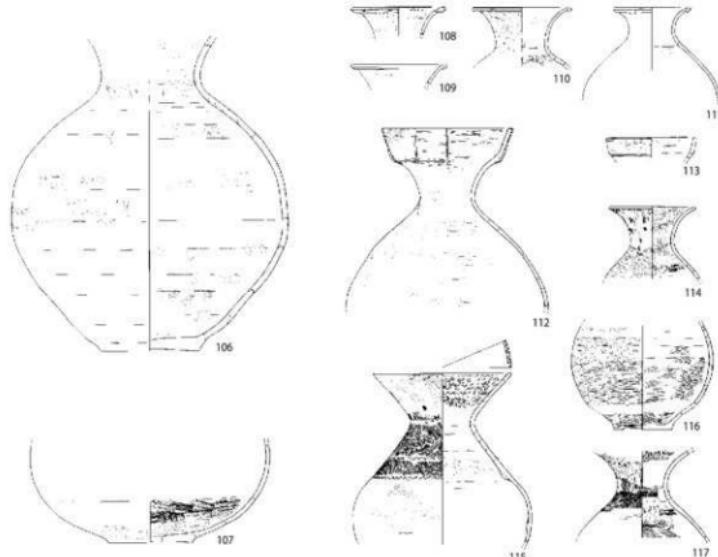
補出遺跡 SB261

0 20cm

第8図 第III群土器②



横出遺跡 SB231



横出遺跡 SB431

0 20mm

第9図 第III群土器③

### (1) 第Ⅰ群に認められる菊川式の要素（第6図）

一括資料内の施文方法で縄文・長と櫛刺突文が占める割合は1～2割程度、文様帶3の採用は3割程度である（第3表）。後述する第Ⅲ群に比べ一括資料に占める割合は必ずしも高くない。他方、幅狭でやや厚めの折り返し部を有し、口縁部が水平近くまで外反した結果、折り返し部の裏面が側面から見えない折返し口縁（5）、内湾口縁（6）、文様帶3に施文し、口縁部が水平近くまで外反する単純口縁（15）、突出が少ないやや小さめの上げ底状の底部をもつもの（13）、口縁部内面に櫛描扇形文（19）を施すものなども菊川式の要素と見ることができよう。

胸部上半をミガキ調整すること（4・7・15）などに雌鹿塚式に通じる要素が見られ、折衷的なものが多い印象である。水平近くまで外反する単純口縁（15）、上げ底状の底部（13）はV-1・2にはば限定される要素と考えられる。菊川式的要素は一定量（最大3割程度か）認められるが、雌鹿塚式と混在または折衷する形で存在しており、現在のところ菊川式的要素が主体となる資料は未確認である。

### (2) 第Ⅱ群に認められる菊川式の要素（第7図）

文様帶3、縄文・長、櫛刺突文は未確認であるのは資料数が少ないと起因すると考えられ、本群の詳細は不明である。33は、肩部無文で胸部上半をミガキ調整する点に雌鹿塚式の要素がみられるが、突出が少ないやや小さめの底部を有する点に菊川式的要素を見ることができる。また、底面が僅かに窪むのは、輪台の内面に粘土を充填して底部とした結果と考えられ、前述のとおり、菊川式に多い底部形態・製作技法である。本資料だけで並行関係を推測することは困難であるが、おおむねV-3、遅くともV-2に近い胸部形態とすることができよう。資料数が限られ詳細は不明だが、菊川式的要素のあり方は、高率でないことからも、第Ⅰ群と同程度と考えられる。

### (3) 第Ⅲ群に認められる菊川式の要素（第7～9図）

一括資料内の施文方法の中で縄文・長と櫛刺突文が占める割合は2～3割程度のものに加え、月の輪上溝20、豎穴住居58のように5～7割程度にのぼる資料が認められ、第Ⅰ・Ⅱ群とは様相が大きく異なることが考えられる。また、文様帶3の採用も1～8割程度と資料ごとに差があるが、月の輪上遺跡の比率が6～8割程度と高率であることか注目される（第3表）。特に、文様帶3に櫛刺突文及び

櫛刺突文と縄文を併用するもの（55・58・66・71・73・75・76・78・100・101・117）は、菊川式の文様構成を踏襲するものである。月の輪上遺跡が位置する潤井川流域（富士宮市域）では既存集落が衰退し、月の輪上遺跡をはじめとした新集落が開始され、その土器様相は菊川式的要素が頻著となることから、土器様相及び集落の動向の画期として評価されている（渡井 1993）。よって本群はその動向以降に含まれるものと考えられる。なお、いわゆる有段羽状文は本稿対象資料中には皆無であり、県東部の当該期資料でも一部の資料または遺跡に限られることから、大半が東遠江東部開拓に系譜を持つものと考えられる。

他方、幅狭でやや厚めの折り返し部を有し、口縁部が水平近くまで外反した結果、折り返し部の裏面が側面から見えない折返し口縁（54・66・70）内湾口縁（64・65・74）、屈折内湾口縁及び同様の口頭部製作原理に基づくものの（90・94・115）、などにも菊川式的要素を見ることができる。ただし、外反する単純口縁（55/68/73/75～77/94）など、菊川式では少ない口縁部形態が主体となる資料もあり（月の輪上豎穴58）、胸部下半のミガキ調整を省略するもの（69・94）、胸部上半をミガキ調整するものの（66・75・90）など、菊川式本来のものにアレンジが加わっていると考えられる。

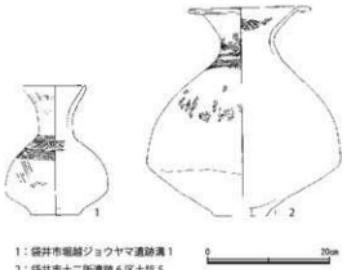
口頭部高、胸部高がいずれも圧縮されたものが多く、おおむねV-4・5に近いものと考えられる。なお、屈折内湾口縁（115）及び同様の口頭部製作原理に基づくもの（90・94）は、V-5に準じるものと考えられ、屈折内湾口縁をもって第Ⅲ群を細分することも可能と考えられる。

### (4) 東遠江における雌鹿塚式の要素

第10図1は、V-3の基準資料である堀越ジョウヤマ満1資料の壺である。①胸部高の極端な圧縮がみられる点、②共伴資料とは異質の細く長い頭部に外反が少ない口縁部を有する点、から雌鹿塚式の影響下で製作された壺と考えられる。文様帶3に菊川式に特有の櫛刺突文を施す一方で、菊川式では必ずしも主体でない円形浮文を貼付する点に雌鹿塚式との関連をうかがわせる。口頭部1に胸部2をもつ第Ⅱ群に分類できるものである。

第10図2は、V-5の基準資料である十二所6区土坑5資料の壺である。①薄く幅広な折り返し口縁を有する点、②菊川式には稀な文様帶1に施文する点、から雌鹿塚式の影響下で製作された壺と考えられる。櫛刺突文羽状文

を施文する点に菊川式の要素をみることができる。口頭部2に胸部2をもつ第III群に分類できるものである。本稿の集計では第III群における文様帶Iへの施文は積極的に評価できないが、本資料をみる限り、雌鹿塚式特有の文様帶として存在していたと考えられる。



第10図 東遠江における雌鹿塚式の要素を持つ壺

以上により、第I群は東遠江のV-1・2、第II群はV-3（V-2含むか）、第III群はV-4・5にはほぼ並行すると考えられ、各群の時間的前後関係もほぼ矛盾なく説明できることと考えられる。また、第III群は、口縁部内面に突帯を有する大型複合口縁壺と屈折内湾口縁の組成を評価し、さらに2群に細分できよう（註6）。なお、この大型複合口縁壺と屈折内湾口縁壺は、いわゆる東海西部系の組成が開始される次段階（古式土器）にも通じる型式である。よって、第III群の一部は土器様相の変化期に該当するものと考えられる。

## 6まとめ

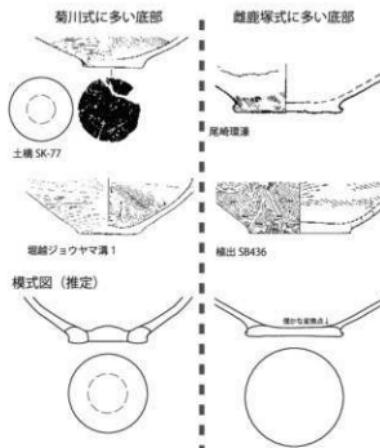
本稿では、雌鹿塚式の壺の形状、施文位置と施文方法によって細分を行い、造構一括資料の時間的前後関係を検討した。その結果は、先学の功績をほぼ追認するものであったが、口頭部、胸部とともに縦長気味なものが主体となり、頭部に羽状縄文を多用する第I群、短胴化が短頭化に先立ち進行し、雌鹿塚式特有の壺形態を形成し、無文化が進んだ第II群、短頭化、短胴化が進み無文化や櫛刺突文の卓越から、菊川式の要素がより強まる第III群といったように、当該期土器の特徴を多少なりとも描き出すことができたと思う。

ただし、今回は、壺の特定部分の分析に限定しており、土器様式を検討する上では、より広い視点で検討する必要があることは言うまでもない。また、グラフに表れているように、例えば、口頭部の短頭化は、漸移的に変化していることが考えられ、それを定点で口頭部1・2のように分類することは、一見明解ではあるが、漸移的変化の解明、画期の設定に課題が残されていることは明らかである。また、限られた資料による統計処理であり、資料不足に起因する偶然性を十分に排除できていない部分もあると考えられる。今後の課題としたい。

本稿を執筆するにあたり、資料閲覧等において次の機関・方々に協力いただいた。記して感謝申し上げる。協力機関・協力者 伊豆の国市教育委員会、静岡県教育委員会、沼津市教育委員会、富士宮市教育委員会、池谷信之、池谷初恵、丸杉俊一郎、山田康雄、渡井英吾（敬称略・五十音順）

## 註

- 1 本稿では雌鹿塚式を富士川以東～田方平野における弥生後期の土器様式名前として用いる。
- 2 報告書掲載資料を対象とした。なお、拓本等破片資料は対象から除外した。
- 3 口縁部形態に起因する数値差が少ないと考えられる頭部径を比較の対象とした。なお、左右で土器形状が異なる場合は、その中間点を求め計測した。
- 4 ここで言う原体長は、土器面に残された施文長を示す。計測は、報告書掲載資料から行ったため、若干の誤差が生じている可能性がある。
- 5 菊川式では底部裏面に輪台と充填粘土の間にできる段差が消去されず輪台の痕跡が残るもののが認められる（第II図）。また、内面は断面形が底部中心から滑らかな曲線となるものが多い。なお、同様の底部では底部内面中央が盛り上がるものも一定量認められる。これは、輪台内面に必要な粘土を充填した結果と推測される。一方、雌鹿塚式に典型的な底部は、縁辺に粘土のはみ出しが再調整されずに残る形態が見られる、突出した大きめの底部が一般的で、雌鹿塚式の壺に特有のものであることは既に先学により指摘されている（籠原他 2002）。同底部は、底部内面に明瞭な平坦面をもち、内面に僅かであるが変換点をもって胴部下半につながるものが案外多いことから、円盤状の粘土を底部とし、土器製作の起点としている可能性を指摘する。（ここで言う円盤状の底部は円盤状の粘土板を用いるのではなく、粘土紐を渦巻状に巻きつけて形成したと考えられることが、破片資料から観察できるものがある）



第11図 雄鹿塚式と菊川式の壺底部の違い

6 植出跡SB431では、口縁部を欠損するが、口縁部内面に突帯を持つ大型複合口縁壺となる可能性が高い土器と前述の屈折内湾口縁壺が共存している。篠原氏編年案東駿河V-2の画期(篠原他 2002)に対応するものと考えている。

#### 引用・参考文献

- 岩本 貢 1995 「菊川式土器における編年上の問題」『財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所設立10周年記念論文集』 静岡県埋蔵文化財調査研究所  
鈴木敏則 1996 「遠江・駿河(後期)」「YAY! 弥生土

- 器を語る会20回記念論文集』弥生土器を語る会  
渡井英善 1993 「付編 弥生時代IV-3様式について  
—弥生時代第IV様式の画期を模索する—」『富士宮市の  
遺跡』 富士宮市教育委員会  
渡井英善 1997 「E. 土器編年」「滝戸遺跡」 富士宮市  
教育委員会  
篠原和大 2001 「駿河地域の後期弥生土器と土器の移動」  
『シンポジウム 弥生後期のヒトの移動 ~相模湾から広  
がる世界~ 資料集』 西相模考古学研究会  
篠原和大他 2002 「5 遠江・駿河地域」「弥生土器の様  
式と編年 東海編」 株式会社木耳社  
篠原和大 2006 「第2章 出土遺物の考察①登呂式土器の  
成立と展開 一静岡清水野後期前半期弥生土器の編年  
的考察ー」「特別史跡登呂遺跡再発掘調査報告書(自然  
科学分析・総括編)」 静岡市教育委員会  
静岡県教育委員会 1972 「田方郡蓮山町神崎遺跡緊急調査  
査概報」  
沼津考古学研究所 1970 「目黒身」  
沼津市教育委員会 1979 「御幸町遺跡第1次発掘調査概  
報」  
沼津市教育委員会 1989 「豆生田遺跡発掘調査報告書」  
沼津市教育委員会 1990 「雄鹿塚遺跡発掘調査報告書II  
(遺物編)」  
沼津市教育委員会 1998 「御幸町遺跡発掘調査報告書  
(遺物編(土器)ー」  
沼津市教育委員会 2000 「尾崎遺跡発掘調査報告書」  
静岡県埋蔵文化財調査研究所 1997 「北神馬手遺跡II  
(遺物編)」  
富士宮市教育委員会 1981 「月の輪遺跡群II」  
富士宮市教育委員会 1982 「月の輪遺跡群III」  
袋井市教育委員会 1991 「堀越ジョウヤマ遺跡発掘調査報  
告書」  
浅羽町史編さん委員会 1997 「浅羽町史 資料編一 考古・  
古代・中世」

## Model Change of the Megazuka-Type Jar

Takashi IWAMOTO

**Summary:** Megazuka-type jars (Watai 1997), found in the east part of Shizuoka prefecture belong to Yayoi period. I make them into three groups by statistic works on their characteristics such as pottery method, band pattern and patterning method. At the same time, I examined the parallel relationship with Kikugawa-type potteries by extracting the relating elements between Megazuka-type ones and Kikugawa-type ones.

In the chronic order, starting with group I , the jars in this group mainly have long neck and long body with feathered rope pattern on their neck. Then, the ones in group II , the representative of Megazuka-type, whose body become shorter than ones of group I , have tendency of having no rope patterns. Finally the jars in group III , which become closer to Kikugawa-type ones, have short neck, short body without pattern or with comb pattern.

**Keywords:** Megazuka-type, jar, statistic works on characteristics, parallel relationship with Kikugawa-type jars

# 鉢留立聞環状鏡板付轡の意義

大 谷 宏 治

**要旨** 鉄製環状鏡板付轡の中で、立聞に鉢留立聞を採用するものがいくつか存在する（鉢留立聞環状鏡板付轡）。この鉢留立聞は、まず金銅装花形鏡板付轡・杏葉など金銅装馬具に取り入れられ、その変化を受け、小型矩形立聞環状鏡板付轡などの鉄製馬具にも取り入れられ、新留立聞環状鏡板付轡が創出されたと考えられる。また、鉢留立聞環状鏡板付轡の出現する時期が6世紀末～7世紀前半（TK209型式後半・飛鳥Ⅰ期～飛鳥Ⅱ期）で、金銅装馬具生産の再編期と同じ時期であることから、この馬具生産者集団の再編に伴い円環轡の工人集団も再編され、金銅装馬具生産に関わり、鉢留技術を習得し、鉢留立聞環状鏡板付轡を生産した可能性がある。

**キーワード：**鉢留立聞環状鏡板付轡、小型矩形立聞環状鏡板付轡、金銅装馬具、馬具生産工人集団の再編

## 1はじめに

鉄製環状鏡板付轡（以下、円環轡）の中で、立聞孔をもつ大型矩形立聞や鉸具造立聞ではなく、面繫のベルトを直接立聞に鉢留する（鉢留立聞）円環轡（以下、鉢留立聞円環轡）が日本列島内で数例出土している。このような特殊な事例はあくまでも数多くの円環轡の中の特異な事例として等間に伏すか、積極的な評価を行なうに分かれるだろう。ここに取り上げる鉢留立聞円環轡は等間に伏されてきた感は否めない（註1）。

しかし、鉢留立聞は金銅装花形鏡板付轡・杏葉・金銅装心葉形杏葉などTK209型式期（註2）以降金銅装鏡板付轡・杏葉に積極的に採用されている。筆者は東海地方の馬具や弧形円環轡を扱うために円環轡を全国的に集成するなかで、ここで取り上げる鉢留立聞円環轡も金銅装轡・杏葉における鉢留立聞の採用とほぼ時を同じく出現し、金銅装馬具における立聞変化と軌を一にしている可能性が高いことがわかった。したがって、この円環轡の中の特異な事例は、古墳時代後期末から終末期の一時期の社会的情勢をしめす特徴的な遺物として考え、検討を加えたい。

## 2鉢留立聞環状鏡板付轡の事例について

まず、その評価を行う前に鉢留立聞円環轡についてみておこう。管見では、全国で次の4例が確認できた（註3）。筆者が集成できた円環轡は約1,100例であり、国内・朝鮮

半島で円環轡はさらに多くが出土していることからこの他にも数例は存在する可能性が高いが、先駆的研究に取り上げられていないことを考慮すると、この鉢留立聞円環轡が急増することはないと考える。

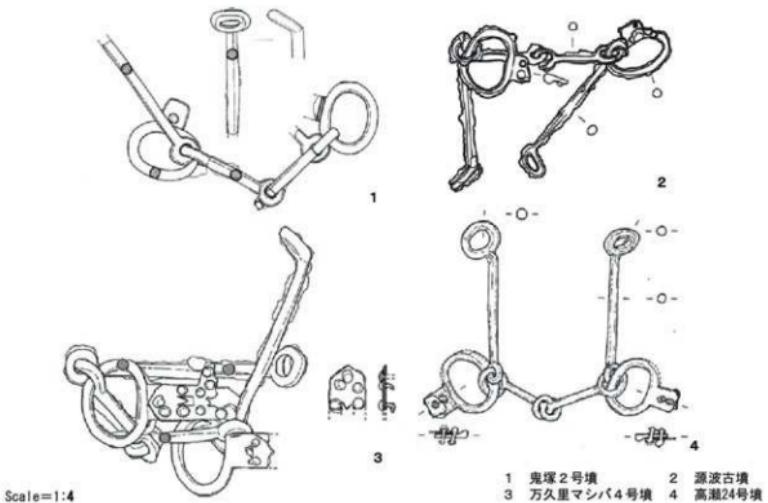
それでは以下に、それぞれの特徴を見ておこう（第1図）。

### （1）福岡県広川町鬼塚2号墳

**古墳の特徴** 周囲の改変が著しく、古墳の形状は不明である。埋葬施設は複室疑似両袖式横穴式石室で、全長5.65mである。TK209型式～飛鳥Ⅰ期。耳環5種6点（5人の埋葬か）、空玉6点、管玉1点、勾玉1点、滑石製白玉41点、ガラス丸玉94点、銀象嵌圭頭大刀2振（註4）、轡2点（註5）、金銅装四脚辻金具1点、金銅装五脚？辻金具（あるいは雲珠）1点、金銅装八脚半球形雲珠、金銅装飾金具、イモ貝製飾金具2点、鉸具、鎧吊金具、弓両頭金具、鉄鎌、刀子、須恵器が出土している（広川町教委1986）。

**轡の特徴** 立聞は隅丸方形で、立聞の中心に鉄地銀張の鏡が一鏡打たれている。立聞に他の金具は鉢留めされていないことから直接面繫のベルトを鉢留めしたと想定できる。

轡の構造は一残念ながら引手壺まで残存していないが一引手は一条線引手、二字形引手壺で、二連衝、衝介在連結（註6）である。全高6.6cm、環の幅5.8～6.0cm、立聞幅



第1図 細留立間円環飾の類例 (1:4)

2.0、2.2cmである。

なお、鬼塚2号墳から出土した轡は引手が2組分あることから2組存在する。辻金具・雲珠は革帯を留める資金具をもたないもので、宮代VI期(飛鳥I期)に位置づけられる(宮代1993・1996a)。雲珠は中央に宝珠飾金具の有無の違いがあるが、後述する群馬県高瀬24号墳出土雲珠と類似している。

### (2) 兵庫県養父市万久里マシバ4号墳

**古墳の特徴** 円墳、直径27m。左片袖式石室。TK209型式期～飛鳥I期の構造。副葬品として、馬具(鞍金具・腹帶金具・鞍具・飾金具・辻金具)、大刀、鉄鎌、針?、須恵器、金銅製品などが出土している(関宮町教委1992)。金銅製品では馬具金具、切羽などが出土しており、倭風大刀(頭椎大刀)と推測できる。

**轡の特徴** 轡は立間に別造のM字形・十字形の透彫が施された、辻金具が多数の紙で錠留めされたものである。轡は二連衝、一条線引手、く字形引手壺、衝介在型連結である。轡の大きさは全高が8.1cm前後、環幅が7.0cm、立間幅2.7cmである。

なお、馬具には辻金具と同様の技法で作られた吊金具が出土しており、吊金具が明いられるのは飛鳥I期まで飛鳥II期以降急速に衰退していくことから、吊金具で轡や杏葉を吊る技法から錠留技法への過渡的な位置づけを考えられる可能性が高い。したがって、当轡は、古墳の築造時期と同様、TK209型式期～飛鳥I期に位置づけられる可能性が高い。

### (3) 長野県箕輪町源波古墳

**古墳の特徴** 円墳、直径約20m。全長11.5mの左片袖式横穴式石室を内部主体とする。金銅装頭椎大刀を含む9振の大刀・短刀、100本近くの鉄鎌、刀子、耳環10種16点(10人分か)、4種の轡をはじめとする金銅装六脚半球形雲珠、金銅装辻金具、イモ貝製飾金具などの豊富な馬具、金銅装大刀、銅鏡、玉類、須恵器・土師器など豊富な遺物が出土している(箕輪町教委1988、轡の写真:飯田市美術博ほか1997)。

4種の轡は、1点が今回検討する錠留立間円環轡、2点が大型矩形立間円環轡、1点が岐具造立間円環轡である。轡の法量に時期差が表れているとすれば、一番小さい錠留

立間円環轡が4点の轡の中では最も新しい可能性がある。

**轡の特徴** 紙留立間は方形横二紙である。轡の特徴は、一条線引手・く字形引手壺、二連衝、衝介在型連結である。轡は全高6.0cm、幅6.1cm、立間幅2.4cmである。

なお、源波古墳出土馬具には半球形六脚雲珠、半球形辻金具5種7点、鞍4種?10点、鉢具多数、飾金具多数が出土しており、組合関係は明確ではない。前述した鬼塚2号墳、後述する高瀬24号墳の事例を考慮すると、半球形脚（1紙）系辻金具がこの轡に伴う可能性が高い。

#### (4) 群馬県富岡市高瀬24号墳

**古墳の特徴** 円墳、直径30m。玄室長4.7m、羨道長2.5m以上、全長7.2m以上の両袖式石室。銀装銅線巻大刀ほか4振の大刀、金銅裝鞍金具1組、錠吊金具、金銅装辻金具、金銅装雲珠、銀装耳金具、両頭金具（図版では金銅装か銀装と思われる）、鉄韁、須恵器など非常に豊富な遺物が出土している。ただし、埴輪が樹立されておらず、築造時期はTK209型式～飛鳥Ⅰ期であると考えられる（富岡市教委2000）。

**轡の特徴** 立間は方形縦二紙の紙留立間であるが、立間には別の金具の破片が軸で留められている。これはおそらく辻金具の脚部片で、辻金具と立間が紙で留められていた可能性が高い。轡は衝介在型連結、一条線引手・く字形引手壺、二連衝である。全高6.6・6.9cm、幅5.4・6.0cm、立間幅2.0、2.2cmである。

なお、高瀬24号墳から出土した馬具は現状で一組分のみであり、組合関係にあった可能性が高い。辻金具・雲珠は革帯を留める資金具をもたないので、TK209型式期以降（宮代1993）に、鞍金具は「覆輪を伴わず」と洲浜金具を別造にする系列（幅の広い緑金具を用いる）（宮代1996b）に該当し、中でも紙が大きいことから宮代VII期（飛鳥Ⅰ期）に該当しよう。したがって、轡もTK209型式期を上限とすることができ、飛鳥Ⅱ期まで下降する可能性もある。

#### (5) 紙留立間円環轡の特徴

**共通点と相違点** 上記4例の共通点は、二連衝、一条線引手・く字形引手壺、衝介在型連結である点で、相違点は万久里マシバ例・高瀬例は別造の辻金具（あるいは吊金具）が立間に紙留めされる一方、鬼塚例・源波例は直接革

紐が軸留めされた可能性が高い。さらに4者ともに幅2cm前後の方形立間である点は共通するが、紙数と紙の並び（縦並び、横並び）が異なる。

**編年的位置** この4例はいずれもTK209型式期～飛鳥Ⅰ期に位置づけられる可能性が高く、一部飛鳥Ⅱ期まで下降する可能性がある。

轡の大きさは、万久里マシバ例が全高8cm、幅7cmと大きく、源波が全高・幅とも6cm前後と小さい。円環轡の傾向として時期が新しくなると小さくなる点を考慮すれば、万久里マシバ→高瀬→鬼塚→源波の順が考えられよう。

**辻金具・雲珠との組合関係** 万久里マシバ4号墳例以外は、高瀬例、鬼塚例をみると資金具を伴わず一紙で革帯に紙留する半球形鉢無辻金具・雲珠（半円形脚（1紙）系、宮代1993）と組合関係になる可能性が高い。

### 3 紙留立間円環轡の成立

(1) 紙留立間を用いる金銅装馬具～金銅装花形鏡板付轡・杏葉の変化～（第2図）

金銅装鏡板付轡・杏葉の飛鳥Ⅰ期以降の新しいものの中には紙留立間のものが多数確認でき、この段階に一部の金銅装轡・杏葉を除いて、鏡留立間が一般化した可能性が高い。内山敏行氏によれば、心葉形鏡板付轡・杏葉などの金銅装鏡板付轡・杏葉は、大部分がTK217型式（飛鳥Ⅰ～Ⅱ）期（内山編年V期）に立間孔を有するものから紙留のものに変化するが、中でも花形鏡板付轡・杏葉はTK209型式期（内山編年後IV期）に栃木県下石橋愛宕塚古墳などでいち早く紙留立間が出現する（内山1996）。現段階では紙留立間の出現は、この花形鏡板付轡・杏葉からと考えることができ、TK209型式期を上限とすることができる。

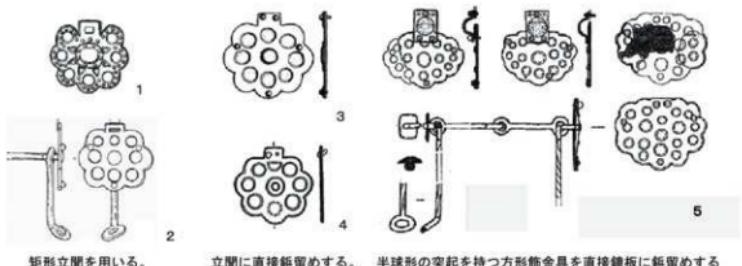
これ以前の内山編年後III期（TK43型式期）には、雲珠の一軸に吊金具を紙留めし、その吊金具で吊る花形杏葉が群馬県伊勢崎福荷山古墳で確認されており（内山1996）、吊金具付小型矩形立間から紙留立間へ変化していることが明らかである（小野田1983、内山1996）。

また、静岡県浜松市鷹塚1号墳（浜松市博物館1985）出土の花形鏡板付轡・杏葉は上記とは異なる留め方を用いる。杏葉は中央に半球形の膨らみをもつ飾金具と直接紙留している。また、轡は立間を設げず、花形鏡板の上部に面繩の帶を直接紙留している。これらは吊金具で吊るものから紙留立間へ変化する過渡的な段階の馬具とすることがで

きよう。鏡板の型式は下石橋愛宕塚古墳のものよりも新しい段階(飛鳥Ⅰ～Ⅱ期)に位置づけられている。吊金具で吊るものから新留立間へ変化するにあたり、試行的な様相が窺えようか。

#### (2) 新留立間円環飾と関係すると想定できる円環飾

上述したように、金銅装馬具では吊金具を伴うものから、吊金具を辻金具や雲珠の脚に新留し、鏡板や杏葉を吊るるものへ、そして新留立間へ発展した可能性が高いことから、ここでは新留立間円環飾の成立と関係しそうな、吊



矩形立間を用いる。

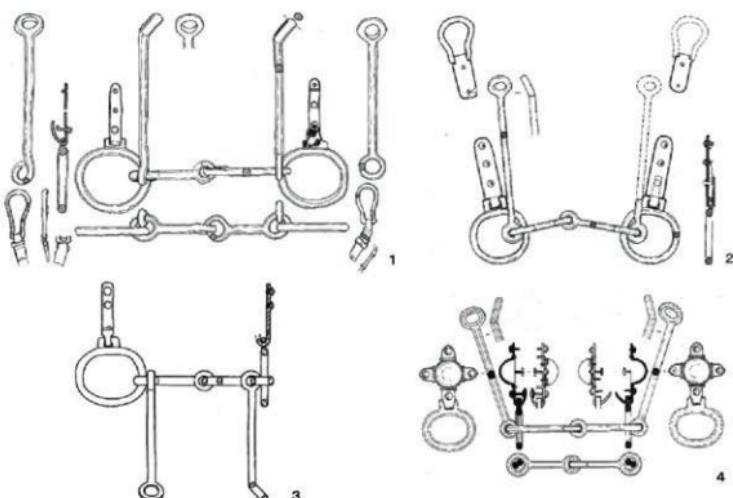
立間に直接新留めする。

半球形の突起を持つ方形飾金具を直接鏡板に新留めする杏葉には立間がなく、鏡板の上部に直接新留するもの。

- 1 伊勢崎稻荷山古墳 2 竹原古墳 3 下石橋愛宕塚古墳  
4 賢機山古墳 5 蟠塚1号墳

Scale=1:6

第2図 花形鏡板付飾・杏葉の立間の変化（中央が新留立間の初現例）



吊金具付小型矩形立間円環飾

- 1 石塚谷古墳 2 星の宮神社古墳 3 約瓶落7号墳  
吊脚辻金具付小型矩形立間円環飾  
4 ナシタニ6号墳

Scale=1:6

第3図 吊金具付小型矩形立間円環飾と吊脚辻金具付小型矩形立間円環飾の事例

金具を有する円環嚢についてみておきたい。

#### ①吊金具付小型矩形立間円環嚢（第3・4図）

管見によれば、日本列島で、北は茨城県ひたちなか市笠谷6号墳や栃木県宇都宮市竹下浅間山古墳・下野市星の宮神社古墳から南は熊本県の玉名市小路古墳まで26古墳28例（第1表）が出土している。

この吊金具は「舌状吊金具」と呼称されることが多い、縦一列に2~3枚の半球形の鉢頭の紙面に留めるものである。立間は幅2cmほどである。福岡県菟枝坂1号墳の遊織介在型連結を除いて銘介在型連結であり、時期的にはTK10式期後半（MT85）～飛鳥II期まで各時期において少数ながらも存在する（岡安1984）。

宮代榮一氏によれば、この嚢には面織装着用の「鉢具付舌状金具」が伴うことが多いとされる（第4図、宮代1997）。筆者が集められた26古墳中11例に伴っており、非常に共伴率が高いといえよう。また、この嚢に伴う雲珠・辻金具は、半球形鉢半円形脚（1鉢）系のもの（宮代1993・1996a）であり（雲珠=26古墳中11例、辻金具=26古墳中15例）、同時に存在する半球形鉢半円形脚（3鉢）系のものなどとは組み合わさない。したがって、吊金具付小型矩形立間円環嚢は「鉢具付舌状金具」と半球形鉢半円形脚（1鉢）系の辻金具・雲珠との組合という規格性の高い馬装である。

また、大型矩形立間円環嚢や鉢具造立間円環嚢が喰入する中で少ないながらも継続的に一定数出土している点は注意する必要がある（註7、岡安1984）。

#### ②吊脚辻金具付小型矩形立間円環嚢（第3図）

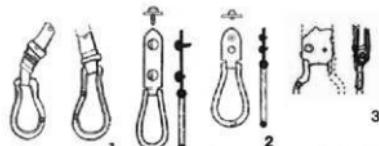
金銅装馬具ではTK43式期以降に辻金具の一脚に吊金具を鉢留し、それで鏡板や杏葉を吊るものが確認できる。これと同じように、辻金具の四脚のうちの一脚が吊脚に作られ、それで鏡板を吊る円環嚢（以下、吊脚辻金具付円環嚢）が奈良県ナシタニ6号墳で出土している（樋考研1987）。この円環嚢は矩形立間であるが立間幅が2cmと小さいもので、小型矩形立間円環嚢に位置づけることができる。鏡板の大きさは、全高6.0cm、幅6.5cm、立間幅2.1cmである。

このナシタニ6号墳からは上述した吊金具付小型矩形立間円環嚢とともに用いられることが多い「鉢具付舌状金

第1表 鉢留立間円環嚢と吊金具付小型矩形立間円環嚢の出土遺跡と共に伴う雲珠・辻金具・「鉢具付舌状金具」

古墳名	所在地	嚢形式	雲珠	辻金具	鉢具付舌状金具
高瀬4号墳	群馬県富岡市	鉢留	○	○	×
高瀬古墳	群馬県高崎市	鉢留	●	●	×
万久里・マシバ4号墳	兵庫県宍粟市	鉢留	-	▲	○
鬼屋山古墳	福岡県糸島市	鉢留	●	●	×
佐谷山古墳	佐賀県佐賀市	舌状留	●	●	○
竹下浅間山古墳	栃木県鹿沼市	辯小形	○	●	×
星の宮代古墳	栃木県下野市	辯小形	●	●	○
大通寺古墳	栃木県足利市	辯小形	○	●	○
鶴巣古墳	群馬県伊勢崎市	辯小形	○	●	×
伝・佐原町古墳	埼玉県加須市	辯小形	●	●	×
シラニ古墳	埼玉県桶川市	辯小形	●	●	×
法皇塚古墳	千葉県市原市	辯小形	●	○	○
藤谷1号墳	長野県長野市	辯小形	●	●	○
柏木古墳	長野県松本市	辯小形	●	●	○
柏木古墳	長野県松本市	辯小形	●	●	○
釣瓶舟7号墳	静岡県藤枝市	辯小形	●	●	×
西沼1人4号墳	愛知県岡崎市	辯小形	●	●	○
石原谷6号墳	三重県多気町	辯小形	○	○	○
大田内古墳	奈良県広陵町	辯小形	●	●	×
ナシタニ6号墳	奈良県高市郡	辯小形	●	●	○
古天神古墳	鳥取県岩美町	辯小形	●	●	○
御崎山古墳	鳥取県岩美町	辯小形	●	●	○
川島古墳	福岡県飯塚市	辯小形	●	●	○
竹原古墳	福岡県若狭町	辯小形	●	●	○
荒ヶ原1号墳	福岡県朝倉市	辯小形	●	●	×
打鳴1号墳	福岡県八女市	辯小形	●	●	○
小倉16・19号墳・元高麗塚	福岡県八女市	辯小形	●	●	○
福岡山横穴墓群2G	福岡県大野町	辯小形	○	●	×
福岡山遺跡	福岡県南陽市	辯小形	●	●	○
小路古墳	福岡県五台山	辯小形	○	○	×
小路古墳	福岡県五台山	辯小形	○	○	×
野原7号墳	福岡県筑紫野市	辯小形	●	●	×

● 半球形鉢半円形脚（1鉢）系・宝珠飾なし  
▲ 半球形鉢半円形脚（1鉢）系・宝珠飾あり  
◆ 板状T字形  
○ 出土している  
辯小形・辻金具付小型矩形立間円環嚢  
辯小形・吊脚辻金具付小型矩形立間円環嚢  
辯小形・吊脚辻金具付小型矩形立間円環嚢



Scale=1:4

1 石塚谷古墳（吊金具付小型矩形立間円環嚢）

2 ナシタニ6号墳（吊脚辻金具付小型矩形立間円環嚢）

3 万久里・マシバ4号墳（鉢留立間円環嚢）

第4図 「鉢具付舌状吊金具」の類例

具」が出土しており、吊金具付小型矩形立間円環嚢と同一系譜であることが明確である。ナシタニ6号墳例はTK209式期に位置づけられる可能性が高いことから、吊金具付小型矩形立間環嚢板付嚢から創出された嚢と辻金具の馬装である。

#### ③吊金具付大型矩形立間円環嚢（第5図）

ついで、吊金具を伴う大型矩形立間円環嚢についてみ

ておこう。管見では5例を挙げることができる。

まず、「舌状吊金具」ではなく、幅広で二列に鉗が打たれたる吊金具を伴う大型矩形立聞円環轡が奈良県藤ノ木古墳(Cセット)から出土している(櫻考研1990)。このような吊金具を伴う事例は管見ではこの事例のみで、「舌状吊金具」とは異なる吊金具を伴う大型矩形立聞円環轡も存在することは明らかとなるが、継続的に生産されたかは明確ではない。

つぎに、埼玉県古凍14号墳周辺土壇は馬殉葬土壇と想定されるが、そのうち2・4号土壇から吊金具付大型矩形立聞円環轡が1点ずつ出土している(東松山市教委1999)。報告によれば、2号土壇例が帶金具に別造の吊金具を鉗留し、その吊金具で円環轡を吊るもので、4号土壇例は、吊金具単独で円環轡を吊るものである。2者ともにTK209~TK217(飛鳥I期)型式期(7世紀第1四半期)ごろと想定している(東松山市教委1999)。2号土壇出土轡が、全高6.6cm、幅8cm、立聞幅3.5cmで、4号土壇出土轡が、全高6.0cm、幅7.5cm、立聞幅3.9cmである。

また、静岡県東平1号墳例(東海古墳時代研究会2006)は吊金具で直接円環轡を吊るものである。出土遺物には毛彫馬具を伴う方形に近い心葉形鏡板付轡、蓋鏡などが出土

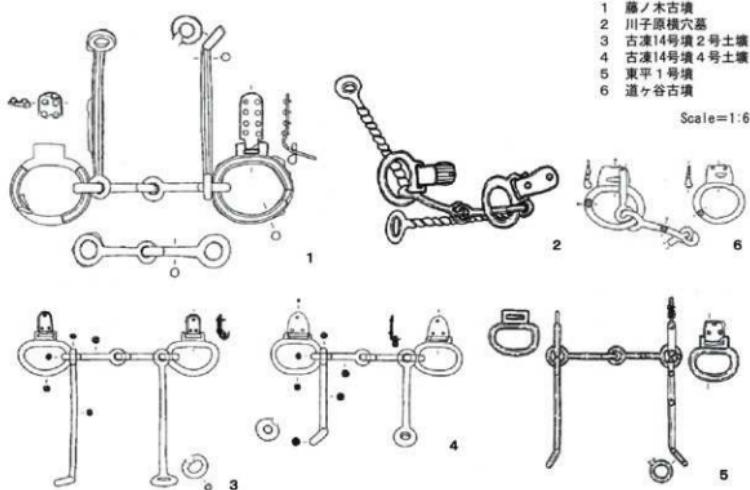
している。東平1号墳からはTK43型式期~飛鳥II期の遺物が出土しており、馬具もその範囲に位置づけることができる。

さらに、島根県川子原横穴墓例は、吊金具で直接円環轡を吊るものである。この横穴墓例では辻金具は出土しておらず、帶金具を駆使して面繩を構成したと考えられている(宮代1997)。

#### ④立間に穿孔する大型矩形立聞円環轡

ここでは大型矩形立聞円環轡のうち通常のそれには確認できない特徴を有する愛媛県松山市道ヶ谷古墳例を挙げたい。道ヶ谷古墳(愛媛県埋文センター2000)例は、大型矩形立聞上部に2小円孔が穿たれており、これは通常の大型矩形立聞円環轡には確認できない特徴である。この孔は場所からみて、面繩の帯を鉗留するための鉗が打たれていたと推測されている。鏡板の大きさは、全高7.2cm、幅6.3cm、立聞幅3.0cmである。なお、鏡板は2点出土しているが、穿孔が確認(報告)されていないほうが大きく、また立聞孔も異なることから、2組の大型矩形立聞円環轡が納められた可能性がある。

古墳の残存状況が良好ではないが、石室内からは飛鳥I



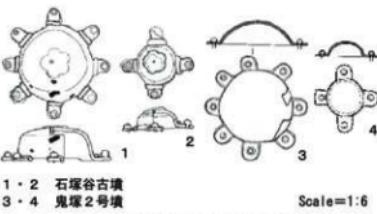
第5図 吊金具付大型矩形立聞円環轡と立間に小円孔を穿つ大型矩形立聞円環轡の事例

期に位置づけられる須恵器が出土しており、円環轡はその時期に位置づけられようか。

したがって、大型矩形立聞円環轡の中に、TK43型式期（特にTK209型式期）以降吊金具で吊るものが少數ながら存在しており、さらには立間に孔を穿ち、面繫の帶を鉤留めしようとするなど、一部の大型矩形立聞円環轡に金銅装轡・杏葉のように吊金具で帶金具に固定する方法や紙を用いて帶を留める技法の採用がみられることにも注目すべきであろう。

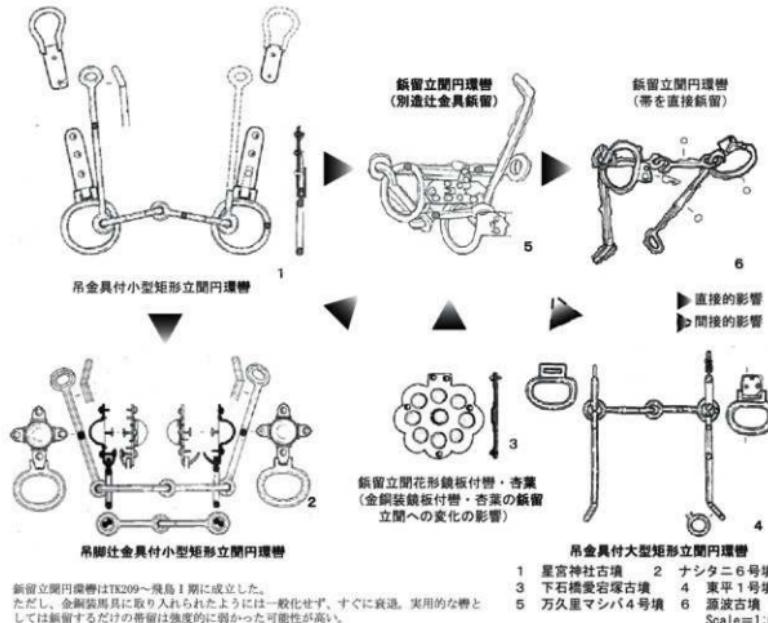
### (3) 鉤留立聞円環轡の成立過程

金銅装馬具の鉤留立聞への変化は、吊金具単独→辻金具・雲珠の脚に吊金具を鉤留するもの、辻金具・雲珠の脚を吊脚にするもの→鉤留立聞へと変化した蓋然性が高い。この金銅装馬具の面繫装着方法の変化の流れに従って、鉤留立聞円環轡の成立に関係しそうな吊金具を伴う円環轡をみると、上記2)で検討した4形式すべてが、鉤留立聞円環



第6図 吊金具付小型矩形立聞円環轡と鉤留立聞円環轡に採用された雲珠・辻金具の比較

轡が位置づけられるTK209型式期～飛鳥II期に存在している。つまり、鉤留立聞円環轡はTK209～飛鳥I期に成立した可能性が高いが、その成立に影響しそうなものは、ほぼ同時期かそれ以前に存在しているといえる。また、吊金具付小型矩形立聞円環轡以外の3類型はTK209型式以降に位置づけられたため、この時期に鉄製轡のうち大型矩形立聞系と吊金具付小型矩形立聞系に面繫への装着方法に



第7図 鉤留立聞円環轡の成立過程

大きな変化が起こっていた可能性が高い。これは金銅装馬具の変化に関連するものといえるだろう。

それでは鉢留立間円環轡に変化した、あるいは産み出したのはどの円環轡なのか。ここで、重要なのが、宮代栄一氏が取り上げた小型矩形立間円環轡に共伴する「鉗具付舌状金具」である。この金具が万久里マシバ4号墳で出土している（註8）。これは吊金具付小型矩形立間円環轡と鉢の打ち方が異なるものの同一系譜と考えたい。

また、鉢留立間円環轡の立開幅をみると万久里マシバ4号墳例がやや大きく2.7cmであるが、それ以外は2cm前後で、立開幅からみれば大型矩形立開よりも小型矩形立開が近い。

また、吊金具付小型矩形立間円環轡とその系譜にある吊脚辻金具付小型矩形立間円環轡には、共伴率の高い組合関係にある、「半球形鉢半円形脚（1鉢）系」（宮代1993）の雲珠・辻金具が伴うが、これらが高瀬24号墳、源波古墳、鬼塚2号墳で共伴している（第6図）。

この3点から鉢留立間円環轡の成立にあたっては、第7図に示したように吊金具付小型矩形立間円環轡の工人集団が金銅装馬具の変化を受けて、TK209式期～飛鳥Ⅰ期に鉢留立間円環轡を創出したと考えたい（註9）。

一方で吊金具付大型矩形立間円環轡が無関係であったとも考えにくい。金銅装轡・杏葉でも心葉形鏡板付轡・杏葉などでは、大型矩形立開であったものが、鉢留に変化した段階で小型矩形立開と同じ幅になる事例もある。大型矩形立間円環轡が鉢留に変化する過程で小型・鉢留化した可能性も若干想定できるため、その間接的な影響は考慮しておきたい。

上述した後者の変化の可能性も含めて円環轡における鉢留立間の導入は金銅装馬具の変化の機微に対応しており、金銅装馬具生産に近い工人集団が生産に携わっていた可能性が高いといえよう。

## （2）鉢留立間円環轡の衰退

鉢留立間の金銅装轡・杏葉が盛んする一方で、鉢留立間円環轡は小数が生産されたものの、飛鳥Ⅱ期までには生産が終了した可能性が高い。また、鉢留立間円環轡出現以後、大型矩形立間円環轡は全国的に多数が出土していることから生産が継続的に行われていたと考えられるのに対し、鉢留立間円環轡の祖形にあたると想定する小型矩形立

間円環轡はほとんど確認できなくなり衰退する。

このように鉢留立間円環轡と（吊金具付）小型矩形立間円環轡が同時期に衰退する要因は、小型矩形立間円環轡から鉢留立間円環轡へ生産を移行させたこと、もともと生産数の少ない吊金具付小型矩形立間円環轡の生産体制を引き継ぐことから鉢留立間円環轡の生産数が本来少なかったこと、さらに実用的な馬具とされることが多い円環轡において、立開孔を通さず面繫を鉢で固定するだけでは強度が弱かったことなどが考えられる。

つまり、金銅装馬具生産に近い位置にあった可能性が高い吊金具付小型矩形立間円環轡（大谷晃1996）の系譜にある鉢留立間円環轡は、試行的な生産に留まり、衰退したのであろう。

## 4 鉢留立間円環轡からみた古墳時代社会の特質

### （1）鉢留立間円環轡を保有する古墳の位置づけ

分布 鉢留立間円環轡について、吊金具付小型矩形立間円環轡（第1表）、またそれと関連する可能性が高い吊脚辻金具付小型矩形立開、吊金具付大型矩形立開、立間に孔を穿った立開をもつ大型矩形立間円環轡の分布図を示した（第7図）。それらは関東から九州まで散在しており、集中する地域はない。また、吊金具付小型矩形立間円環轡は第1表に示したように一古墳から複数例出土することはあっても全国的に散在し集中する地域はない。



第8図 鉢留立間円環轡と関係する円環轡の分布

したがって、これらの馬具は特定の場所での生産は考えにくい。上述したようにTK43型式期以降吊金具を有する轡は金銅装馬具の特徴であり、その影響が考えられることから、これらは畿内王權で生産され、地方へ配布された可能性が高いと考える。

**階層的位置** 銀留立聞円環轡を有する古墳は、上記した鬼塚2号墳・万久里マシバ4号墳・源波古墳・高瀬24号墳の4古墳である。

この銀留立聞円環轡は円環轡の中でも特異な轡であることから、他の円環轡に比べて相対的に階層的な位置づけが低いというわけではないと考える。

古墳の規模をみると、源波古墳は20mの円墳、高瀬24号墳は30mの円墳、万久里マシバ4号墳は27mの円墳であり、当該期としては群集墳中では規模の大きな古墳に位置づけられるだろう。鬼塚2号墳は金銅装馬具・象嵌装大刀、源波古墳は頭椎大刀、金銅装馬具などの豊富な遺物、高瀬24号墳は金銅装鞍金具・銀装大刀・銀装御金具・銀装弓筒頭金具、万久里マシバ4号墳は馬具の存在から頭椎大刀等の倭装大刀が削落されていた可能性が高い。このように4基それぞれに豊富な遺物が出土しており、群集墳中の1古墳という評価ではなく、群集墳の盟主的存在や、地域の小首長と評価できる。

少數であるにもかかわらず一地域に集中せず散在すること、地域の小首長墓から出土することなどからみれば、やはり銀留立聞円環轡は地方で生産された馬具とはいわず、金銅装の雲珠・辻金具を伴うこと、金銅装鞍を伴う事例がある点などからも中央で生産され、各地域の中でも有力者層に配布された可能性が高いと考える。

## (2) 銀留立聞円環轡の成立の意義

銀留立聞円環轡は、小型矩形立聞円環轡が金銅装馬具の銀留立聞への変化の影響を受け、TK209型式期～飛鳥Ⅰ期に成立した轡である可能性が高い。これは金銅装馬具の変化に機微に反応し、ほぼ同時期に変化した点が重要である。この反応の速さからみれば、この生産者集団が金銅装馬具の生産者集団に近い関係にあった可能性が高いと考える。

このTK209型式期～飛鳥Ⅱ期は、金銅装轡・杏葉におけるリベット留技法（小野山1983、松尾1999）や鏡板・杏葉の共造技法（桃崎2001）、銀留立聞の採用（小野山1983、内山1996）など他形式に亘る技法の齊一化が進行

している時期でもあり、金銅装馬具生産における工人集団の再編が行われた可能性が高い。

こうした変化の中に鉄製円環轡の工人集団も組み込まれた可能性も多い。このことを補強するものとして今回取り上げていないが、轡の引手の振りが挙げられる。古墳時代後期後半（TK209型式）以降の金銅装轡において引手の振りが再現する。この引手の振りは円環轡では、基本的に大型矩形立聞円環轡と鉄具造立聞円環轡に採用されるもので、それ以外の形式の轡に採用されること非常に稀である（註10）。この技法の共有やこれらの馬具が金銅装馬具と組み合わされることが多い点（大谷宏2006）を評価すれば大型矩形立聞と鉄具造立聞円環轡が金銅装馬具生産と近しい関係にあった可能性が高い（大谷宏2006）。

今後さらに別の視点から詳細に検討しなければならないが、古墳時代後期後半の馬具生産の再編に伴い、大型矩形立聞円環轡、鉄具造立聞円環轡、吊金具付小型立聞円環轡など金銅装馬具の生産と近い関係にあった鉄製円環轡生産工人集団も再編に組み込まれたと考えたい。大型矩形立聞と鉄具造立聞円環轡での引手の技法（振り）の共有が行われたり、再編の影響で銀留立聞円環轡が試作的に製造されたりした可能性を考えておく必要があるだろう。

このように類例数の少ない銀留立聞円環轡であるが、古墳時代後期後半の社会変化の一側面（馬具生産の再編）を表す重要な遺物であったのである。

## さいごに

今回も1,100例以上に及ぶ円環轡の中の4例と特殊な事例を取り上げて積極的な評価を行った。あくまでも特殊な事例をやや強引に別の馬具との系譜関係を繋げたり、解釈を導いたりした今回の評価は過大評価との批判は免れない。研究者のご批評願いたい。

なお、小論の執筆にあたり、文献探索・収集等でお世話になった。銘記して深謝いたします。

飯島哲也 北山峰生 鈴木一有 永井正浩

## 【補記1】

脱稿後、入手した花谷浩氏の論文（1986「素環鏡板付轡の編年と性格」「山陰考古学の諸問題」）に銀留立聞円環轡が確認できることが指摘され、吊金具付小型矩形立聞円環轡に類似することが指摘されていたことを知った。しか

し、鉢留立間円環轡は一例のみの指摘に留まり、系譜関係など詳細には論じられていないため、筆者の意見に大きな変更は生じない。

### 【補記2】

脱稿後、愛媛県で上述した道ヶ谷古墳では、拙文を取り上げたもう一方の円環轡の立間に穿孔が穿たれていたこと、また小型矩形立間円環轡の立間に穿孔が確認されたものがあることを知った（大野義人2008「環状鏡板付轡についての基礎的研究」「下條信行先生退任記念論文集」）。立間に穿孔を行う馬具については伊予を中心分分布する可能性が高く、直接的に鉢留立間の成立に影響を与えていた可能性は低くなつたと想定している。

### 註

1 類例が少ないと、また遺物が特に豊富な古墳から出土する事例がないことから目に触れる機会が少なく、これまで環状鏡板付轡を分類し、体系的にまとめられた、荒川史氏（荒川1987）、花谷浩氏（花谷1983）、岡安光彦氏（岡安1984）、坂本美夫氏（坂本1985）、宮代栄一氏（宮代1998）の公刊された分類からは漏れているのが現状である。

2 小論では、陶邑田辺編年、飛鳥編年を併用する形で用い、「TK209型式期～飛鳥II期」のように表記する。なお、飛鳥I期は広義のTK209後半～TK217古段階にあると考えている。ここではTK209とした場合は飛鳥I期を含まない。

3 このほか福井県足利市文遺古墳群出土品（足利市教委1997）の中（隣接する赤城神社所蔵品とされるもの）に、その可能性がある個体が見受けられるが、通常の矩形立間の立間孔が鋸で埋まっている可能性もあり、断定はできない。

4 また、（伝）群馬県出土（群馬県古墳時代研究会1996、南山大学所蔵）、長野県松本市柏木古墳出土の立間が細くて長いものが存在する（長野県1983）。特に後者には先端に鉤が確認できることから吊金具付小型矩形立間円環轡の可能性が高い。前者も筆者は詳細が確認できなかつたが、柏木古墳同様吊金具付小型矩形立間円環轡の可能性が高いと考えている。

5 引手轡が3点存在しており、最低2点の轡が削離されていた可能性が高い。また、蔽手状に曲げられた金具があり、これが引手轡だとすれば、3点の轡が削離されていたことになる。

6 小論では、銜先環に鏡板・引手を装着するものを、「銜介在型連結」と呼称する。また、鏡板に引手・銜先環を装着するものを「鏡板介在連結」、遊環に鏡板・引手・銜先環を連結するものを「銜介在型連結」とする（大谷宏2006参照）。

7 小型矩形立間円環轡については別稿にて検討する予定

している。

8 ただし、小型矩形立間円環轡に用いられる「鉢具付舌状金具」は縦一列2枚であることが多いが、万久里マシバ4号墳例は縦二列であり、それらとは異なる。このような横二列の「鉢具付舌状金具」は静岡県牧之原市仁田山ノ崎古墳（川江1992）、福島県白河市荒内37号横穴墓（桃崎2002）で出土しており、両者に共通するのは、棘葉形杏葉である。なお、この2古墳では小型矩形立間円環轡は出土していない。

また、万久里マシバ4号墳以外の鉢留立間円環轡出土の3古墳はこの金具とともに出ておらず、この事例のみでは根拠が薄いとの批判も免れないが、万久里マシバ4号墳の「鉢具付舌状金具」を最大限評価して、小型矩形立間円環轡との関連性を想定したい。

なお、小型矩形立間円環轡の可能性が高い轡が出土した奈良県烏塚古墳（奈良県教委1972）では、T字形の辻金具が出土している。当古墳では馬具が3組以上出土していることからこの辻金具がどの轡に伴うのか不明確であるが、万久里マシバ4号墳例からは小型矩形立間円環轡に伴う可能性が高い。このようにT字形辻金具と小型矩形立間円環轡が組合せ関係にある可能性がある点も小型矩形立間から鉢留立間円環轡が成立したとする筆者の考えを補強する。

さらに、仁田山ノ崎古墳、荒内37号横穴墓の馬具の共伴事例からは、万久里マシバ4号墳例の生産者は、それと同じ「鉢具付舌状金具」を伴うことから、金鋼製馬具の生産に近い位置にいた可能性が高いといえる。

9 鉢留立間円環轡が4例と少数で、出土古墳も分散し、新論の特徴も画一的ではないことから、それぞれが別個の系譜のなかで成立したとの見方も成立立つだらう。

しかし、上述した3つの理由から、鉢留立間円環轡の成立にあっては、吊金具付小型矩形立間円環轡に、金鋼製馬具の影響でナシタニ6号墳例のような吊脚辻金具付小型矩形立間円環轡が現れ、さらに花形鏡板付轡・杏葉などの金鋼製馬具の鉢留立間への変化の影響を受けて、鉢留立間化したと考えたい。

なお、藤ノ木古墳出土幅広の吊金具付小型矩形立間円環轡は、舌状吊金具付小型矩形立間円環轡と吊金具が異なるだけではなく、雲珠・辻金具も半球形脚（3筋）系であること、時期的にも1段階古いことから、鉢留立間円環轡の成立に直接的な影響を及ぼしていないと考えている。

10 筆者が集成した円環轡約1,100例中、61例に振り（強振り）、岡安1984、岡安氏のいう「江田船山型端環装飾」は系譜が異なる可能性が高い（大谷宏2008「ため除く」）が確認できる。大型矩形立間円環轡では19例、鉢具付立間円環轡で34例であり、この2者で約86%を占める（この他、不明6例、兵庫鎮素環円環轡1例、素環円環轡1例である）。筆者が遺漏した分を含めてもこの傾向は大きくは変化しないと考える。したがって、この2者が引手の振りを主体的に採用したといえ、金鋼装飾での振りの再現とも時期的に重なるため、同一製機による採用と考えている。

### 参考文献

#### 【論文・図録等報告書以外】

荒川 史 1987 「環状鏡板付轡の問題点」『京都府埋蔵文

- 化財論集』1集 京都府埋蔵文化財調査研究センター  
 飯田市美術博物館・飯田市上郷考古博物館 1997 『伊那谷の馬・科野の馬』
- 岩原 剛 2009 「今下神明社古墳出土の馬具」『豊橋市美術博物館研究紀要』16号 豊橋市美術博物館
- 内山敏行 1996 「古墳時代の轡と杏葉の変遷」「黄金に魅せられた後人たち」 烏根県立八雲立つ風土記の丘資料館
- 大谷晃二 1996 「総括 1 脇扉品とその時期」『御崎山古墳の研究』烏根県教育委員会・八雲立つ風土記の丘資料館
- 大谷宏治 2006 「馬具の分布からみた東海古墳時代社会」「東海の馬具と飾大刀」東海古墳文化研究会
- 大谷宏治 2008 「瓢形環状鏡板付轡の特質」『静岡県考古学研究』40号 静岡県考古学会
- 岡安光彦 1984 「いわゆる「素環の轡」について」「日本古代文化研究」創刊号 古墳文化研究会
- 岡安光彦 2003 「馬具生産と流通の諸画期」「武器生産と流通の諸画期」七世紀研究会
- 小野山節 1983 「花形杏葉と光背」「MUSEUM」383号 東京国立博物館
- 片平雅俊 1999 「馬具の集成をおえて」「茨城県史研究」82 茨城県
- 川江秀孝 1992 「馬具」「静岡県史」資料編3考古3 静岡県
- 群馬県古墳時代研究会 1996 「群馬県内出土の馬具・馬形埴輪」
- 坂本美夫 1985 「馬具」 ニュー・サイエンス社
- 鈴木一木 2008 「馬具」、「原分古墳出土馬具の時期と系譜」「原分古墳」静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 東海古墳文化研究会 2006 「東海の馬具と飾大刀」
- 花谷 浩 1983 「馬具」「湯舟板2号墳」久美浜町教育委員会
- 松尾光晶 1999 「上塙治築山古墳出土馬具の時期と系譜」「上塙治築山古墳の研究」島根県古代文化センター
- 宮代栄一 1993 「中央部に鉢を持つ雲珠・辻金具について」「墳玉考古」30号 墳玉考古学会
- 宮代栄一 1996a 「鞍金具と雲珠・辻金具の変遷」「黄金に魅せられた後人たち」八雲立つ風土記の丘資料館
- 宮代栄一 1996b 「熊本県出土の馬具の研究」「肥後考古」9号 肥後考古学会
- 宮代栄一 1997 「古墳時代の面構造の復元」「HOMINIDS」1号 CRA
- 宮代栄一 1998 「古墳文化における地域性」「駿大史学」102号 駿台史学会
- 桃崎祐輔 2001 「棘葉形杏葉・鏡板の変遷とその意義」「先史学・考古学研究」12号 筑波大学
- 桃崎祐輔 2002 「筑内37号横穴墓出土馬具から復元される馬装について」「研究紀要2001」福島県文化財センター白河館
- 横穴式石室研究会 2007 『近畿の横穴式石室』データベース
- 【報告書・県史等】**
- 足利市教育委員会 1997 「文選第11号墳発掘調査報告書」奥道跡 平田七反地遺跡
- 権原考古学研究所 1987 「伊奈古墳群」
- 権原考古学研究所 1990 「斑鳩藤ノ木古墳第一次調査報告書」
- 関宮町教育委員会 1992 「万久里マシバ古墳群」(兵庫県)
- 多気町教育委員会 1998 「多気町文化財調査報告」7(三重県)
- 橋本県教育委員会 1986 「星の宮神社古墳・米山古墳」
- 橋本県 1984 「橋本県史」資料編考古2
- 富岡町教育委員会 2000 「高瀬24号古墳」
- 長野県 1983 「長野県史」考古資料編 全1巻(3)
- 奈良県教育委員会 1972 「烏土塚古墳」
- 浜松市博物館 1985 「規疊道跡V・VI」
- 東松山市教育委員会 1999 「古津14号墳(第1・2次)」
- 広川町教育委員会 1986 「鬼塚古墳群」(福岡県)
- 箕輪町教育委員会 1988 「源波古墳発掘調査報告書」(長野県)
- 若宮町教育委員会 1975 「金丸古墳」(福岡県)
- なお、本文中に引用しなかった報告書については割愛いたしました。ご容赦ください。
- 図の出典**
- 第1図 1 (広川町教委1986) 2 (箕輪町教委1988)  
 3 (関宮町教委1992、横穴式石室研究会2007)  
 4 (富岡町教委2000)
- 第2図 1 (岩原2009) 2 (若宮町教委1975)  
 3 (橋本県1984) 4 (川江1992)  
 5 (浜松市博1985)
- 第3図 1 (多気町教委1998) 2 (橋本県教委1986)  
 3 (東海古墳文化研2006) 4 (権研1987)
- 第4図 1 (多気町教委1998) 2 (権研1987)  
 3 (関宮町教委1992、横穴式石室研究会2007)
- 第5図 1 (権研1990) 2 (宮代1993)  
 3・4 (東松山市教委1999)  
 5 (東海古墳文化研2006)  
 6 (愛媛県埋蔵センター2000)
- 第6図 1・2 (多気町教委2006)  
 3・4 (広川町教委1986)
- 第7図 1 (橋本県教委1986) 2 (権研1987)  
 3 (橋本県1984) 4 (東海古墳文化研2006)  
 5 (関宮町教委1992、横穴式石室研究会2007)  
 6 (箕輪町教委1988)
- 第8図 筆者作成

(2010. 3月稿了)

## Meaning of the Horse Bit with Ring-Cheekpieces with Riveted Tachigiki

Hiroshi OOYA

**Summary:** Some iron horse bits with ring-cheekpieces have riveted Tachigiki. The riveted Tachigiki were firstly used with pieces of gilt bronze bit, such as flower-shaped cheekpieces and harness pendants. Then, they were introduced into iron horse bits such as the horse bit with ring-cheekpieces of small rectangle Tachigiki. Creation of horse bits with ring-cheekpieces of riveted Tachigiki started in the beginning / first half of 7<sup>th</sup> century. That corresponds to reorganization of gilt bronze harness production. With regrouping of harness makers, craftsmen of bits with cheekpieces were reorganized, and then, some of the craftsman could work with gilt bronze harness makers and learn riveting technique and then, create horse bits with ring-cheekpieces of riveted Tachigiki.

**Keywords:** horse bit, cheekpieces, riveted Tachigiki (fastener of the bit to the headstall), harness pendant

# 静岡県西部出土の古代製塩土器について（補遺）

大林 元

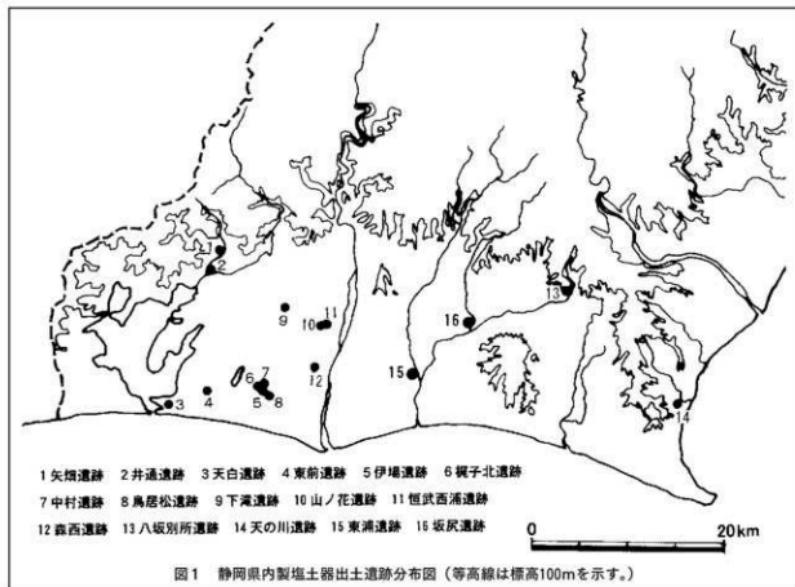
**要旨** 旧稿において、古代静岡県西部における製塩土器の様相を概観した。その中で、中遠地域が製塩土器分布の空白地帯となっていたが、本稿では新たに当該地域出土の製塩土器を若干ながら提示する。さらに、製塩土器を巡る主要な課題の一つである「製塩土器は官衙関連遺跡でよく出土する」という現象の本質に迫ってみたい。

**キーワード**：製塩土器、中遠地域、官衙、一般集落、宗教的想念

## 1 中遠地域出土の製塩土器

旧稿（大林2008）において、筆者は7～9世紀の静岡県西部における製塩土器の様相を概観し、2、3の問題点を提起した。それは古代遠江製塩土器の型式分類、产地と流通、用途に関する基礎的考察であったように思われるが、より根本的な問題として当該地方に大きな分布上の空

白域が存在していた。それは、小笠丘陵以西～天竜川以東の中遠地域である（注1）。遠江地方全体としては、天竜川以西の西遠地域に製塩土器の分布が偏っているものの、掛川市八坂別所遺跡（図1 No.13）および牧之原市天の川遺跡（図1 No.14）のように東遠地域にも分布が及んでおり、中间の中遠地域に製塩土器が全く認められないこ



とは、むしろ不自然の観がある。

そこで、中遠地域において製塙土器を探索した結果、2遺跡で計3点を確認することができた。1点は磐田市鎌田所在の東浦遺跡SD05出土の坏部片（図2 No.1）である。残存率は口縁端部で約1/8、残存部分中央部で約1/6、復原される口径は9.3cmを測る。口縁端部は丸く收められており、福岡晃彦氏の製塙土器分類（福岡1991）では坏部bに該当する。胎土は1~2mmの大粒の砂礫をやや多く含む。内外面ともに摩耗が頗著であるが、外面の一部が淡桃色化しており、二次焼成痕と認められる。溝状構造SD05における共伴遺物の時期は8世紀中葉を中心、須恵器・土師器片以外に特筆すべきものは見られない。

他の2点は袋井市国原本所在の坂尻遺跡III層出土の脚部片（図2 No.2・3）である。いずれも先端から下半部が欠損しており、基部径はNo.2が1.9cm、No.3が1.5cmを測り、前述の福岡氏分類では2点とも脚部Aに相当する。胎土については、No.2が1mm大以下の石英粒を若干含み、No.3はテンバーを含まず精良である。No.3に指頭压痕が残存するものの、2点とも基本的に表面は平滑に仕上げられている。また、双方ともに坏部内底面と脚部表面の二次焼成（桃色～明赤褐色化）が頗著である。なお、III層は8世紀の包含層である。

ところで、図2の出典はいずれも筆者の実測原図であるが、No.3以外は既報資料である。つまり、今回再認識されたということになる。No.1は東浦遺跡の調査報告書において「土師器片の頸部破片」と記載されており（佐口・大村2009）、No.2は坂尻遺跡の報告書で「土馬の尻尾」として扱われ、実測図も先端側が右斜め上に向くようにレイアウトされている（吉岡1985）。No.2とともに掲載されている「眞の土馬尻尾」は、基部の接合面が「尻尾」の主軸に斜交しており、二次焼成も認められないなどの点から製塙土器脚部とは区別される。それでも、No.2が土馬と認識されていたといえ「意図的に破壊されている」（吉岡1985）という記述は的確であり、これは製塙土器に付帯する情報として重要である。

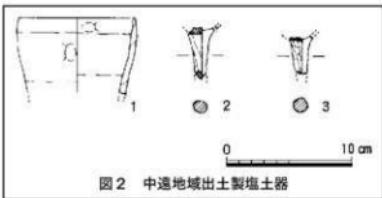


図2 中遠地域出土製塙土器

## 2 製塙土器は官衙関連遺跡に集中しているか

以上により、中遠地域にも製塙土器が出土していることが明らかになった。出土遺跡の性格としては、東浦遺跡が隣接する鎌田・鎌影遺跡ともに古代山名郡の経営を担っていたと考えられており（佐口・大村2009）、奈良時代の坂尻遺跡は佐野郡衙と駅家が併設されていたと目されている（松井2003）。つまり、中遠地域においても製塙土器は官衙関連遺跡でよく出土するよう見える。

鈴木敏則氏は西遠地域の製塙土器分布状況を踏まえた上で「郡衙関連遺跡に製塙土器が多いのは、何故か。」と問い合わせ、宮都の文化に惚れた郡司層が粗塙に較べて上質の固形塙を郡衙に導入した結果と推定している（鈴木2007）。固形塙が粗塙よりも上質で庶人層の手に届かない代物であったのか、そうであったとしても固形塙が食用に限られるのであればわざわざ製塙土器に入ったまま流通する必然性があるのか、仮に製塙土器に入ったままの固形塙を調達することが郡司層における流行であったとして、それが宮都より伝播した文化と言えるのか、様々な検証課題が浮かび上がってくる問題提起ではあるが、そもそも、郡衙をはじめとする官衙（公的施設）で製塙土器は本当に多く出土しているのであろうか。

「多い・少ない」の判断には往往にして主觀が入り込む。従って、単なる印象から脱却するためには官衙関連遺跡とそれ以外の一般集落遺跡それぞれの製塙土器出土数を計上し、比較する必要がある。昨今、静岡県西部製塙土器の所属時期である7~9世紀に比定される遺跡の調査では官衙関連遺跡が目立つようであるが、どこまでのレベルを官衙関連とするか、換言すれば、何でも官衙関連と称していいのかという点にも注意しなければならない。

そのためにはまず、官衙関連遺跡の定義・分類が不可欠である。中山敏史氏は国衙・郡衙の本体以外の「官衙関連遺跡」を1類：分離して設けられた官衙施設（郡衙別院、

正倉院など)、II類; 民間施設に併設された官衙施設、III類; 副次的に地方官衙の業務の一部を補佐した民間施設(郷家、里倉など)に大別し、このうちII・III類に関して官衙としての「郷衙」の存在を否定している(山中2006)。拙稿においても、「郷衙」は想定しないものとする。

松井一明氏は郡衙中枢建物を凌駕する大型掘立柱建物を含む集落遺跡に言及している(松井2006)。遺構として大規模な建物が存在したとしても、文字資料などの官衙的遺物が出土しなければ、それは郡司層の居宅、すなわち私的施設と判断されるということである。拙稿ではこのような場合、住人の階層性の高低にかかわらず、一般集落遺跡に包含する。

官衙関連遺跡に限定した分類は多くの研究者によって試みられているが、一般集落遺跡および私的施設との差異を明確にした上の定義づけでなければ、やはり実際の調査成果に適用することは危ういと考えられる。これに対し、丸杉後一郎氏は一般集落遺跡を含めた律令期遺跡全体を類型化している(丸杉2006)。それによると、I類: 50m以上の大型建物があり、配置の計画性が高く、掘立柱建物のみで構成、II類: 30m以上~50m未満の中型建物主体で、配置の計画性はやや低く、掘立柱建物のみで構成、III類: 30m未満の小型建物主体で、竪穴建物と掘立柱建物が並存、IV類: 竪穴建物のみで構成となる。このうち、遠江ではIII・IV類遺跡で一字書き・字義不明墨書き土器は普通に認められ、さらに腰帶は官衙中枢域での出土が少なく、個人所有に関わる遺物とされる。つまり、帯金具や石帶が出土しても前述の郡司層の居宅である可能性があり、官衙関連施設か否かは慎重に見極めなければならない。そして、丸杉氏は遠江のIII・IV類遺跡は官衙関連遺跡から除外すべしと結論づけている(丸杉2006)。

以上の諸研究を踏まえて、7~9世紀(遺跡の存続状況によって前後する)の西遠地域における官衙関連遺跡と一般集落遺跡それを一覧にしたものが表1・2である(註2)。該期の遺跡のうち、窯業遺跡および古墳は除外したが、水田跡は一般集落構成員が直接はたらきかける場として表2に掲載した。同じ遺跡でも、地点によって官衙関連施設が営開している箇所と竪穴住居群などの一般集落的景観が広がっている所があり、そのような場合は調査地点=調査年・回次によって表1と表2に振り分けている。また、表1・2ともに調査面積欄を設け、発掘調査量からも

製塙土器の多寡を評価できるようにした。

表1の官衙関連遺跡を概観すると、伊場遺跡群(No.1~7)は測評・敷智郡衙および栗原駅家に比定されることはよく知られている。恒武遺跡群(No.8~12)は龜玉郡衙関連遺跡である可能性が指摘されている(辰巳2003)。宮竹野際遺跡(No.13)・森西遺跡(No.14)・山の神遺跡(No.15)は長田郡衙関連遺跡であるが、越前遺跡(No.16)も長田郡衙関連遺跡に比定する見解がある(辰巳2003)。井通遺跡(No.17)は引佐郡衙の津・館であり、川久保舟渡遺跡(No.18)は同郡衙の外部祭祀施設とも考えられる。

西遠地域の官衙関連遺跡が18遺跡であるのに対し(表1)、該期の一般集落遺跡は43を数える(表2)。さらに調査面積の合計は表1の105,120m<sup>2</sup>に対し、表2では316,667m<sup>2</sup>と、約3倍となっている。調査面積が11万m<sup>2</sup>超と、突出している下瀧遺跡を除いても、一般集落遺跡の調査面積合計は官衙関連遺跡のそれの2倍近い。これでは、「官衙関連遺跡に製塙土器が多く見られるのは、7~9世紀の遺跡と言えど官衙関連遺跡ばかり発掘しているからである。」という理屈は成り立たない。

一方、製塙土器の出土点数合計を見ると、表1の180点に対し、表2は27点と、1/6未満に過ぎない。調査面積を加味して製塙土器出土の密度を求めるとき、官衙関連遺跡が一般集落遺跡の約20倍と算定される。この状況では、製塙土器は主に官衙関連遺跡で出土すると認めざるを得ない。

### 3 今後の展望

現在、中・東遠地域においては製塙土器自体が資料的に少なく、前節の西遠地域で行ったような分析にはまだ耐えられない。しかし、やがて当該地域においても製塙土器の発見・再認識が進み、西遠地域と似たような結果が得られると予測される。

しかし、前述の鈴木氏が考えるよう、製塙土器に入った固体塙が郡司層の占有物であるならば、少數とはいえ一般集落遺跡においても製塙土器が出土する現象を説明することは難しい。製塙土器を有する一般集落は郡司層の起臥する所であるのか。郡司層は官衙で不要になった製塙土器をわざわざ一般集落まで捨てに行くよう庶民層に命じたのか。或いは、製塙土器が出土すれば、その遺跡は諸条件が揃わなくとも官衙関連遺跡と考えなければならないのか。

むしろ、製塙土器=官人層関連遺物という観念から自由

表1 西遠地域の官衙関連遺跡

%	遺跡名	所在地	調査年・回次	調査面積(㎡)	存在時期	性質・主な内容	割合・施点数
1	伊豆道跡	田代市牛伏秦町二丁目・南江秦吉町		36,000	7世紀後葉～10世紀	予部保羅君の南洋の本拠地。8～10世紀の軒瓦器、豪華な廐室施設。	38
2	久居田道跡	田代市牛伏秦吉町		4,000	7世紀後葉～10世紀前半	豪華な廐室施設。前丸・丸・平丸	3
3	鳥居松道跡	田代市牛伏秦吉町・御田町	2回	1,000	8世紀後葉～10世紀	伊豆守の本拠地。	34
			3回	172	8世紀後葉～10世紀	御田村付近、豪華な廐室施設。	
			4回	122	6世紀後葉～7世紀前半	伊豆大漢、足入人ら名前著1箇「權力記」。	
			5回	1,129	8世紀後葉～9世紀前半	伊豆大漢、豪華土器・鉢・盆・木簡、軒瓦器	
4	梶子道跡	田代市牛伏南伊福町	9回	2,000	7世紀後葉～8世紀	8～9世紀の豪華な廐室施設。伊豆大漢	6
5	楓ノ北道跡	田代市牛伏秦吉町・西伊福町	楓子1回	13,200	7世紀中葉～10世紀	9～10世紀の豪華な廐室施設。木簡・大底盤	
			楓子2回	3,000	7世紀後葉～8世紀	楓子土器。	
6	中村道跡	田代市牛伏南伊福町・西伊福町	御伊福地区	5,417	7世紀後葉～8世紀	御伊福地区の豪華な廐室施設。	3
7	城山道跡	田代市牛伏石林町	9～4回	1,700	7世紀後葉～9世紀前半	御伊福地区の本拠地。御伊福・東原・少佐御。	
			5回	800	7世紀後葉～8世紀	古伊勢御。柱式廐室施設。	
			6回	1,405	6世紀後葉～7世紀前半	御伊福地区の本拠地。伊豆大漢。	
			7回	1,340	7世紀後葉～10世紀	御伊福地区の本拠地。	
			市下水	80	7～8世紀	御伊福地区の本拠地。	
			2004年	125	7世紀中葉～8世紀	御伊福地区の本拠地。	
8	矩武西道跡	田代市東市武佐野町宇西瀬		5,800	8世紀後葉～9世紀前半	前田御跡。御伊福地区の本拠地。流域に祭祀物貯蔵。	3
9	楓ノ南道跡	田代市牛伏秦吉町宇西瀬	2回	2,420	7世紀後葉	楓ノ南道。	
10	昭和電業道跡	田代市牛伏秦吉町宇西瀬	1～2回	1,000	7世紀後葉～8世紀前半	電業工場。豪華廐室施設。軒瓦器。	3
11	山ノ北道跡	田代市牛伏秦吉町宇山ノ坂		1,970	8世紀後葉	山ノ北道。足入廐室施設。軒瓦器。	3
12	森谷若林道跡	田代市牛伏吉野町宇木林	5～6回	2,910	8世紀後葉～9世紀前半	9世紀後葉の立派な廐室施設。周囲田畠跡。	3
13	阿内野原道跡	田代市東市武佐野町・和田町	1～2回	1,150	8世紀後葉～9世紀前半	御伊福地区の本拠地。御伊福。	
			3回	3,500	8世紀後葉～9世紀前半	8世紀後葉～9世紀前半	
14	轟鬼道跡	田代市牛伏大川町川原		1,260	8世紀後葉～9世紀前半	前川上野。轟鬼道。	3
15	山ノ仲道跡	田代市牛伏和田町	3回	800	8世紀後葉	渋谷山仲の本拠地。	
			5回	270	8世紀後葉	長谷山仲の本拠地。	
16	膳所道跡	田代市牛伏和田町宇野町		480	8世紀後葉～9世紀	近江守の本拠地。8世紀。	
17	升成道跡	田代市牛伏秦吉町宇子岸舟	昭和2～5回	2,000	7世紀後葉～8世紀前半	御伊福地区の本拠地。近江守の本拠地。	105
			昭和3～8回	11,550	7世紀後葉～8世紀前半	近江守の本拠地。膳所道。	
18	高砂保羅道跡	田代市牛伏秦吉町中川		3,298	7世紀後葉～8世紀前半	高砂守の本拠地。近江守の本拠地。高砂道。	
合計				105,120			180

表2 西遠地域の一般集落跡

%	遺跡名	所在地	調査年・回次	調査面積(㎡)	存在時期	性質・主な内容	割合・施点数
1	鳥居松道跡	田代市牛伏秦吉町・御田町	1回	700	9世紀後葉	集落	
2	梶子道跡	田代市牛伏秦吉町	8回	2,442	8世紀後葉	井戸(集落)。	
			9回	1,000	7世紀後葉～8世紀前半	豪華廐室施設。	
3	楓ノ北道跡	田代市牛伏秦吉町・西伊福町	三赤地区	4,542	6世紀後葉～7世紀前半	8世紀後葉。豪華廐室施設。豪華廐室。	1
4	中村道跡	田代市牛伏秦吉町宇中村	東裏塙地区	4,106	7世紀後葉～8世紀前半	豪華廐室。柱式廐室施設。軒瓦器。	3
5	阿内野原道跡	田代市牛伏中馬一丁目		400	7世紀後葉～8世紀前半	阿内野原地区の本拠地。	
6	又ノ北道跡	田代市牛伏吉野町		2,000	7世紀後葉～8世紀中葉	豪華。8世紀後葉柱式廐室施設。	
7	城山道跡	田代市南筑佐町	2005年	82	6世紀後葉～7世紀前半	自作解。(菅原御向見迎部)	
			2005年	45	6～7世紀	集落用窓。	
8	村吉道跡	田代市牛伏吉野町		3,000	8世紀後葉～9世紀前半	御伊福地区の本拠地。御伊福。	
9	更級道跡	田代市牛伏吉野町		1,657	8世紀後葉～9世紀	御伊福地区の本拠地。御伊福。	
10	竹村道跡	田代市牛伏吉野町・石原町		2,700	7世紀後葉～8世紀前半	御伊福地区の本拠地。御伊福。	
11	栗ノ東道跡	田代市牛伏吉野町・柿町	1回	413	8世紀後葉～9世紀前半	8世紀後葉～9世紀前半	
			2回	207	8世紀後葉～9世紀	御伊福地区の本拠地。	
12	御伊福寺跡	田代市牛伏吉野町宇子林	1～3回	510	7世紀中葉	寺(集落)。	
13	三井井林道跡	田代市牛伏吉野町宇子林	4回	1,135	8世紀後葉～9世紀前半	8世紀後葉柱式廐室施設。	
			7回	100	8世紀後葉～9世紀前半	8世紀後葉柱式廐室施設。	
			8回	1,294	8世紀	集落。	
14	宮内野原道跡	田代市牛伏吉野町・和田町	5回	1,100	8世紀後葉～9世紀前半	金木水田、集落。柱式廐室施設。	
15	尾輪道跡	田代市牛伏吉野町		22,040	7～8世紀	尾輪道。	
16	高輪道跡	田代市牛伏吉野町		1,000	7世紀後葉～8世紀前半	豪華廐室。	
17	大河野村道跡	田代市牛伏吉野町宇子林		840	7世紀後葉～9世紀前半	小河野村道。	
18	光ノ野村道跡	田代市牛伏大川町	3回	1,970	7世紀後葉～8世紀後葉	豪華廐室。豪華廐室施設。	
19	大河野村道跡	田代市牛伏大川町		170	9世紀後葉	豪華廐室。	
20	兔島道跡	田代市牛伏宇子町		1,750	6世紀後葉～7世紀前半	小河野村道。	
21	下原道跡	田代市牛伏半田町下原	1994年・1回	100,995	7世紀後葉～8世紀前半	大河原集落(自然林)。	1
			2回	6,360	8世紀中葉～後葉	8世紀後葉柱式廐室施設。	
22	西向道跡	田代市牛伏市西ノ南町		3,000	8世紀後葉～9世紀前半	金木水田、集落。柱式廐室施設。	
23	石臼道跡	田代市牛伏市西ノ南町		4,300	7世紀後葉～8世紀前半	豪華廐室。	
24	黒須道跡	田代市牛伏吉野町	1回	2,000	7世紀後葉～8世紀前半	豪華廐室。	41
			2回	4,700	7～8世紀	豪華廐室。柱式廐室。木簡。	
25	瀬山道跡	田代市牛伏吉野町		21,500	7世紀後葉	集落。下原集落の南方面の斜面。9世紀前半の	
					8世紀後葉～9世紀前半	柱式廐室。	
26	村越山道跡	田代市牛伏吉野町・谷町		11,600	8世紀後葉～9世紀前半	豪華廐室。	
27	村越山東道跡	田代市牛伏吉野町・谷町		11,700	8世紀後葉～9世紀前半	豪華廐室。	
28	猪ノ山道跡	田代市牛伏吉野町		23,000	8世紀後葉～9世紀前半	豪華廐室。	
29	神ノ上道跡	田代市牛伏大川町・足利字神ノ上		494	6世紀後葉～7世紀前半	豪華廐室。	
30	神ノ下道跡	田代市牛伏大川町・足利字神ノ下		1,116	6世紀後葉～7世紀前半	豪華。8世紀後葉柱式廐室施設。	
31	神ノ中道跡	田代市牛伏大川町・足利字神ノ中		12,496	6世紀後葉～7世紀前半	豪華。8世紀後葉柱式廐室施設。	
32	神ノ北道跡	田代市牛伏大川町		2,000	7～8世紀	豪華廐室。	
33	神ノ南道跡	田代市牛伏吉野町・阿木新町	1回	1,900	7世紀後葉～8世紀前半	古神奈海岸(行持走路)。	8
			2回	2,600	7～8世紀	豪華廐室。	
34	鳴森山道跡	田代市牛伏吉野町・那原		6,349	7～8世紀	豪華廐室。	
35	大字道跡	田代市牛伏吉野町宇多田山		945	9世紀後葉～10世紀後葉	古御野御。	
36	堤道跡	田代市牛伏吉野町中川		635	8～9世紀	溝(集落)。	
37	北山道跡	田代市牛伏吉野町宇多田字北山		3,900	6世紀後葉～7世紀前半	豪華。8世紀後葉柱式廐室施設。	
38	鬼ノ山道跡	田代市牛伏吉野町井伊谷字井谷		6,250	8世紀後葉	豪華。	
39	御伊福道跡	田代市牛伏市西ノ南町伊谷字御伊福		7,800	7世紀後葉～8世紀前半	豪華廐室。	
40	東郷道跡	田代市牛伏吉野町	28回	4,000	8世紀後葉～9世紀前半	豪華廐室。	
			29.50～32.32	12,776	7世紀後葉～8世紀中葉	豪華廐室。	
41	大字西道跡	田代市牛伏吉野町		8,900	7世紀後葉～8世紀後葉	豪華。	
42	南ノ口道跡	田代市牛伏吉野町		370	7世紀後葉～8世紀後葉	豪華。	
43	山林道跡	田代市牛伏吉野町11		225	7～8世紀	豪華廐室。	
合計				316,667			77

になる必要があろう。筆者は、静岡県西部における製塙土器の分布には、古代人の交通や境界に対する宗教的想念が反映されていると推測する。例えば、東遠地域において製塙土器が出土した八坂別所遺跡は佐夜の中山峠を控えた場所にあり、そのための公的施設であった可能性が高いと考えられているが（村松2007）、そのような郡境（或いは事实上の駿遠国境）に位置するからこそ、邪靈の侵入を念入な祭祀によって食い止める必要があったと考えられ、強いて官衙に関連づける必然性はないように思われる。他の製塙土器出土遺跡の立地を見ても、河川の合流点や人工的流路を臨む場所、すなわち古代交通の要所が多いことに気付かされる。また、このような交通の要所に郡衙やその関連施設が設置される場合が多く、「製塙土器は官衙間連遺跡でよく出土する」という現象は「製塙土器は交通の要所でよく出土する」と読み替えれば無理がないように思われる。しかも、交通の要所に物資が集中するという理由で製塙土器が多く存在するというよりもむしろ、交通の要所であるからこそ様々な不浄なもの・邪惡なものが入り込みやすいので入念な祭祀が必要となり、製塙土器に入った固体もそのような場で多く使用されたのではないか。

今後の展望として、製塙土器の発見・再認識を継続するとともに（註3）、当然考古学的には限界が予想されるが、交通や境界にまつわる古代人の宗教的想念についても考察を掘り下げる所存である。

## 謝辞

拙稿を草するに当たり、磐田市埋蔵文化財センターの佐口節司氏、袋井市教育委員会の松井一明氏にはお忙しい中、資料の実見等で大変お世話になりました。末筆ながら、記して感謝申し上げます。

## 註

1 中遠地域と東遠地域との境界は、議論の対象や言及する人の立場によって様々であり、一定しないが、拙稿では太田川・原野谷川流域を重視して中遠地域を「小笠丘陵以西」と定義した。

2 製塙土器の分布が比較的充実しているという理由で西遠地域を対象とした。さらに、製塙土器が出土した市町に限定したため、ここでは西遠地域とは事実上浜松市域のみを指している。また、各遺跡の引用・参考文献は紙数の都合で列挙できなかった。何卒、御寛恕願いたい。

3 浜松市浜北区中屋遺跡で製塙土器の坏部片が50余点確認されている。筆者が拝見したところ、時期は7世紀末葉～8世紀初頭に比定され、脚部片は出土していない。詳細な正式報告が待望される。

## 引用・参考文献

- 大林 元 2008 「静岡県西部出土の古代製塙土器について」『静岡県考古学研究』№40 静岡県考古学会  
佐口節司・大村至広（編） 2009 「遠州広域水道用水供給事業寺谷沢水場築造工事等に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—長者屋敷遺跡・東浦遺跡—」磐田市教育委員会  
鈴木敏則 2007 「伊場遺跡の貝塚と出土した考古遺物」『浜松市博物館報』第20号 浜松市博物館  
辰巳 均 2003 「桓武遺跡群」「木船廃寺跡・越前遺跡」「静岡県の古代寺院・官衙遺跡」静岡県文化財調査報告書第57集 静岡県教育委員会  
福岡見彦 1991 「知多式製塙土器4類」「松崎遺跡」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第20集（財）愛知県埋蔵文化財センター  
松井一明 2003 「佐野郡衙関連遺跡群」「静岡県の古代寺院・官衙遺跡」静岡県文化財調査報告書第57集 静岡県教育委員会  
松井一明 2006 「官衙の地域色と集落—静岡県における郡衙と官衙関連遺跡—」「古代の役所と寺院—郡衙とその周辺—」静岡県考古学会  
丸杉後一郎 2006 「遺物から見た官衙遺跡—建物遺構との相關関係—」「古代の役所と寺院—郡衙とその周辺—」静岡県考古学会  
村松弘樹 2007 「八坂別所遺跡II・III・牛岡遺跡・栗下遺跡II」掛川市教育委員会  
中山敏史 2006 「郡衙および官衙関連遺跡をめぐる諸問題」「古代の役所と寺院—郡衙とその周辺—」静岡県考古学会  
吉岡伸夫（編） 1985 「坂尻遺跡—奈良時代編—」建設省中部地方建設局・静岡県教育委員会・袋井市教育委員会

## Ancient Salt-Making Pottery in the West Part of Shizuoka Prefecture

Hajime OBAYASHI

**Summary:** The aspect of ancient salt-making potteries found in the west part of Shizuoka prefecture was shown in my last paper. In this paper, I present some salt-making potteries, small amount though, found in the Middle Totomi region where I couldn't show any examples in my last paper. Furthermore, I mention one of important subjects on salt-making potteries: salt-making potteries are excavated mainly from sites of government offices. The essential of this tendency can be related to ancient people's religious notion on traffic.

**Keywords:** salt-making pottery, Middle Totomi region, government office, substructural settlement, religious notion

# 鑄物師の本貫

足立順司

**要旨** 戦国時代、鰐口・雲版など仏具が奉納先の遠江を離れ、三河・信濃・甲斐に移動し現存する例を中心に、なぜこのような現象が起きたのかを検討する。その中で、藤原秋長と刻まれた鰐口と雲版を検討し、これが遠江赤座の鉄物師の作例であることを明らかにした。同時にこの秋長銘の雲版が、当初奉納された相良庄の寺院から長上郡高島の寺院に再び奉納されていることの意味を、鉄物師による中古品の販売による移動であることを検証した。

また遠江・駿河の鰐口からその型式的特徴を抽出し、そのいくつかから遠江・駿河のある特定の鉄物師團が存在したことを取りあげて、その盛衰と近世鉄物師への変貌を論じている。つぎに検証した作業では信濃や甲斐に移動した鰐口を取り上げ、これらのうちいくつかは、武田軍の高天神城攻略や三方原など遠江侵攻の戦時による微用や略奪の結果ではないかと考えた。同時に遠江・三河からの販売による移動も認められた。このように鰐口・雲版を単に銘文だけを取り上げるのではなく、移動する意味の検討や考古学的型式分析によって、新たな中世史を描こうとした。

**キーワード：**鰐口・雲版、大工藤原秋長、赤座、遠江の鉄物師、駿河の鉄物師、鰐口の撞座紋様、中古品の販売、甲信地方への移動、武田氏の侵攻

## はじめに

梵鐘・鰐口・雲版は打ち鳴らして音を出す仏具で梵音具に分類される。そのうち小論で取り上げる鰐口は扁平で円形の形態を呈し、音を出す機能から音を共鳴させるために内側を中空とし、撞座を叩き音を出し、その音がこもらぬよう下部に裂け目が開く構造となっている。ゆえにこの形態から鰐口と呼ばれている。そして鰐口の部分名称は、全体を人の顔になぞらえ、上部の釣り手を耳と、耳と耳の間を肩と、耳の下方外辺の突起部を目と、最下部の裂け目を口と、口の縁辺部を唇と呼んでいる。

雲版は主に僧堂に吊した雲形の板で、撞座を叩いて音を出す仏具である。

鰐口・雲版には奉納先、奉納の年月、且那、願主の銘文が刻まれている事が多い。そのため本体そのものよりも銘文が重視され、各自治体史などでは、金石文という文字資料の一冊として取り扱われている。ゆえに一昔前まで梵音具の銘文は中世文字資料の補助としてみられ、鰐口・雲版の銘文が短く情報量は少ないこともあって、これを歴史資料として分析することは専門視されがちであった。ましてや鰐口そのものを対象として形態の細かな差異や共通性を

比較・分類する、またこの分類に基づき変遷をたどる、という考古学的視点に立って分析・研究することは、やはり多いことではなかった。というのは鰐口の銘文には年月が刻まれているため、確実に絶対年代を知ることができる、と思われがちであった。よって考古学でいう型式論や編年論という手続きを経る必要はなく、即時に年代を示す資料と思われていたからではないだろうか。

かつて坪井良平が梵鐘の銘を取り上げた際、指摘したように、時としてこれら銘文が梵鐘の制作年代をそのまま示すものではないことは鰐口の場合も同様である（坪井良平 1970）。小論の中でも追刻の例を取り上げ、その意味を検討する。

梵鐘や鰐口・雲版は鉄物師によって造られる。銘文では鉄物師の長は大工某と刻まれているが、そもそも大工とは、今日のように建築職人を指すばかりではなく、律令制下の工人の長を指し、その下には小工（しょうく）がいた。小論では他の大工と区別するために鉄物師大工と記している。中世中期にはいると、全国各地に鉄物師團が知られ、遠江にも赤佐・森一宮の鉄物師が確認できる。今回、遠江・駿河の鰐口の中にある共通した特徴をもつ鰐口

について比較・検討するが、その中でもこの両間に関係する大工某と刻まれた鈸口・雲版については、ある特定の鉄物師集団の作品であることがわかり、一つの基準となりえると考え重視した。

小論では特に鈸口を中心にはせず、一部、雲版を取り上げる。鈸口については、目や唇の突起のあり方や撞座の紋様、圓線や外区のあり方を検討し、その差異が鉄物師集団の違いを反映するものと考えた。そのため以下、鈸口の形態にみられる細かな差異や共通性を検討する。同時にこの作業の上に立って大工某と刻まれた鈸口の特徴を比較・検討し、鈸口がどこの鉄物師集団の作品であるのかを特定し、その変遷を探ろうと試みた。さらになぜ遠江・駿河の鈸口や雲版が甲信地方に移動しているかを考えてみたのが、以下の小論である。

## 2 鈸口・雲版

まずはじめに鉄物師大工藤原秋長の銘をもつ雲版と鈸口を取り上げる。

愛知県西尾市にある浄土宗寺院養寿寺には旧遠江にあつた雲版がある（佐藤郁太2004）。雲版は全長47.7cm、幅41.5cm、厚さ0.8cm、縁厚1.3cmを測る。吊手孔は2カ所、撞座は複弁胡桃座連弁紋、直径9cmを測る。撞座両面に叩いた跡があるが、表面の撞座の上は不明瞭になるほど叩かれている。裏についてはあまり叩かれていない。表裏両面に以下の銘文を刻む（＊は異体字）。

表 遠州相良新庄法恩庵常住・・・（中央）

応永貳乙亥三月十八日・・・（右）

住持誌・・・（左）

裏 遠江州（＊）長上郡美（＊）園郷高畠村寶聚院常住

也・・・（右）

大工藤原秋長

于時永正四年丁卯霜月十五日

旦那昌中

妙性信女

住持比丘・・・（左）

銘文は裏表に共通する文字である住持や常住など、それぞれ別の筆跡であり、「州」は裏面では異体字によって刻まれていることからも、別人によって時を異にして刻まれたこととなる。よって表裏の銘は再録によって一時に刻まれたものではなく、表銘は応永二（1395）年に、裏銘は

永正四（1507）年に刻まれたもので、雲版の移動にともなって裏に銘が追刻され、表裏を逆にして使用されたと理解されよう。

表銘にある奉納先の「相良新庄」とは今の牧ノ原市（旧相良町）新庄であるが、「法恩庵」とは江戸後期の地誌によると、今の牧ノ原市地頭方にあった曹洞宗鈸月院末法恩庵のことである。この法恩庵とは二石三斗の除地を持ち、畠山重忠安置の地蔵尊を本尊とするという。おそらく鈸月院末となって、曹洞宗に改宗したのは近世はじめと考えられ、新庄から本村である地頭方に移り再興されたと考えられる。この雲版の移動には、寺院の衰退を背景とするできごとがあったと考えられる。

裏面の「長上郡美國高畠村」とは、現在の浜松市浜北区高畠のこととミソノの名通り、伊勢神宮の御厨であった郷村である。さらに「寶聚院」とは江戸後期の地誌によると、今の高畠にある曹洞宗龍秀院末法住院（江戸後期には法住庵と呼称されていた）のことである。この法住庵とは二石の除地を持ち、元文三（1739）年以前創建という。おそらく曹洞宗龍秀院となった時期は18世紀前葉と考えられ、雲版の寺院はいったん衰退し、寺院名を音読みのみ受け継ぎ、再興されたと考えられる。

では鉄物師大工藤原秋長はどのように関与したのであろうか。相良法恩庵の雲版が、永正四年までに秋長の手元にあり、それを且那とする昌中と妙性信女、住持比丘が寶聚院の仏具としてしつらえた、と理解されよう。このことは雲版を仲介し納入した人物が大工藤原秋長であることとなる。鉄物師が新品を製造販売するばかりではないという例である。

## 富士河口湖町蓮華寺鈸口と赤座の鈸口

山梨県富士河口湖町に所在する蓮華寺には、鉄物師藤原秋長の銘を刻む鈸口がある。面の直径33.4cm、最大径36.7cm、厚さ12.1cm、肩の厚さ7.1cmを測る。耳は両耳式である。左耳の幅は5.3cm、厚さ1.1cmを、右耳の幅は5.6cm、厚さ1.06cmを測る。銘帯と内区の間隔があがられ、この部分を外区としたが、外区のあるものは少ない。さらに外区を盛り上げているが、遠江地方の鈸口では銘帯との境界は外区ではなく、圓線を巡らすことが多い。2圓線を巡らす。撞座は19弁の連弁紋は少ない例である。以上が本鈸口を型式的に特徴づけている。撞座の両面はあまり叩かれていません。表面の一部に弱い被熱痕が認められる。表

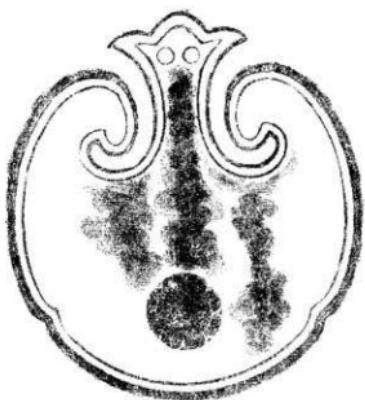


図1 西尾市養寿寺雲版



図4 鰐口藤原秋長の銘



図2 雲版藤原秋長の銘



図5 浜松市正泉寺鰐口拓本



図3 蓮華寺鰐口



図6 浜松市正泉寺鰐口

面に以下の銘文を刻む (\*は異体字)。

奉寄附涅間大菩薩御宝前鰐口之事・・・(右銘帯)

右旨趣者信心大施主息災安穩心中所願一々 (\* 成就皆令満足如件・・・(左銘帯)

遠江州 (\*) 豊田郡高 (\*) 鹿嶋住旦那源長家等・・・  
(右外区)

京禄元年戊子霜月吉日大工藤原秋長・・・(左外区)

この銘から鰐口の奉納先が富士浅間宮であることがわかるが、その所在地は不明である。また奉納にあたっての旦那は豊田郡高鹿嶋とあり、現在の浜松市浜北区高園の住人等であったことが判明する。富士浅間宮もその周辺と推定される。銘文の京禄元年とは享禄元(1528)年のことである。鰐口の鎌物師は養寿寺雲版と同じ藤原秋長であり、同一人物であろう。鰐口に鎌物師の本姓・本名が刻まれることは少ないので、珍しい例である。

ところでなぜ遠江の鰐口が遠く甲斐まで運ばれたのであろうか。以前より梵鐘・鰐口の移動については、戦乱による乱取り、略奪による行為の結果とする見解が流布している(増田幸代2003)(小和田哲男2006)。ただしある特定地域の鰐口の移動が集中していること、逆に同じように侵略を受けた地域でも移動の認められない地域があつて、以前、述べたようにすべての要因を戦乱における乱取り、略奪の結果とすることはできない。詳細は後に述べるつもりなので割愛するが、蓮華寺鰐口の場合、三方ヶ原の戦いもしくはその行軍中に行われた乱取り、略奪された鰐口であろう。おそらくそれが、武田の戰勝品として本国に奉納されたと考えられる。付け加えると、乱取り、略奪のこの行為は、敵方の心の支柱である神仏の力を削ぐという意味ですすめられたといえよう。

ある時、「山梨県史文化財編」(山梨県1999)の蓮華寺鰐口の拓本とつぎに述べる鰐口と類似していることに気づき、山梨県にある蓮華寺鰐口を実見した。検討の結果、鎌物師藤原秋長の銘を刻む蓮華寺鰐口と同型の鰐口がもう一例ある、との結論を得た。そのもう一例とは浜松市北区に所在する正泉寺鰐口である。面の直径32.8cm、厚さ1.1cm、肩の厚さ7.1cmを測る。

耳は両耳式である。耳の幅は6.5cmを測る。銘帯と内区の間隔があけられ、この部分を外区としたが、外区のあるものは少ない。さらに外区を盛り上げているが、遠江地方の鰐口では銘帯との境界は外区ではなく、團線を巡らすこと

が多い。撞座は19弁の連弁紋である。19弁の連弁紋はきわめて少なく、この鰐口の撞座文様の特徴である。撞座の両面はあまり叩かれていない。

本鰐口の型式的に特徴づけている点を比較すると、蓮華寺鰐口と同一工房か同一鎌物師の作とみてよい。表面に以下の銘文を刻む (\*は異体字)。

大日本國遠江州 (\*) 引那佐郡伊郷八幡宮御神前懸鰐口一ヶ・・・(右銘帯)

于時大永八年戊子八月吉日願主藤原直隆朝臣敬白大工赤座・・・(左銘帯)

この鰐口については、かってふれているので詳細は略すが、鰐口の銘文から大永八(1528)年に井伊直隆によって井伊八幡に奉納されたものである(足立順司2002)。この銘文と先の蓮華寺鰐口と比較すると、筆跡が同じ、遠江州、時に于時とする点、月の下に具体的な日を記さず吉日とする点は共通し、制作した鎌物師が同じと考えられる。したがって正泉寺鰐口の大工赤座とは藤原秋長と同じ工房であったことが判明する。おそらく赤座とは、音同で赤佐と呼ばれる鎌物師集団を指し、藤原秋長はこの集団の大工であった人物と考えられる。制作年号の大永八年は年の途中で改元されているので、享禄元年とは同じ年であり、鰐口は制作時期がきわめて近い、八月と十二月に奉納されたと理解できる。

#### 藤枝市安楽寺鰐口と掛川市大原子鰐口

藤枝市北方に所在する天台宗安楽寺には2口の鰐口がある。その一つに鎌物師大工又二郎の銘がある。この鰐口は面の直径17.9cm、厚さ7.8cm、肩の厚さ4.9cmを測る。耳は両耳式である。耳の幅は3.9~3.6cmを測る。目は唇との間に段差は明瞭ではなく、外側には水平に突出する。唇は大きく幅広いことも特徴となっている。銘帯との境界は外区ではなく、盛り上げた團線を巡らす。撞座は星形の外形に7個と1個の珠紋を中に入れるタイプで、大きく崩れた蓮華文が原形であろうか。この鰐口の撞座文様の特徴であるが、外形の星形は不明瞭である。撞座の両面はあまり叩かれていない。表面に以下の銘文を刻む (\*は異体字)。

奉寄進大法天王鰐口願主大助助二郎・・・(右銘帯)

天文七記 (\*) 一月吉日大工又二郎・・・(左銘帯)

島田市(旧金谷町)の河村隆夫は「鰐口考」の中で、この銘文の「大法天王」について、その祭神をスサノオウノミコトとすることが多いとし、奉納先を旧金谷町大代に所

在した大宝神社に比定した（河村隆夫1996）。この神社はいくつかの社を合祀し、今日、大代神社に改称されている。おそらく天王の名称から牛頭天王を祭神としていたと考えられる河村氏は順主についてもふれ、この助二郎とは河村氏の二代にあたる助次良であり、よって銘文の大代とは苗字ではなく地名であり、大代居住の意味としている。するとこの鰐口は、その銘から現在の島田市（旧金谷町）大代の大法天王社に、大代居住の助二郎によって奉納されたものと理解できる。そして移動の理由は不明ではあるが、今は藤枝市北方の安楽寺に所蔵されている。

鎌物師大工又二郎の銘を刻む安楽寺鰐口と同型の鰐口がもう一例ある。掛川市伊達方大原子に所在する白山神社鰐口がそれである。面の直径15.1cm、厚さ6.4cmを測り、耳は片耳式である。耳の幅は3.3～3.4cmを測る。銘帯上部に鉄製の型持がある。表面に以下の銘文を刻む。

山口大原子白山鰐口 順主慶口（判読できず）・・・  
(右銘帶)

天文六年丁酉四月十二日・・・(左銘帶)。

なお銘で訛読みできなかった「慶口」について「掛川誌稿」では「慶宗」としているが、「宗」とは異なるようである。銘文の白山社は鰐口を所蔵している伊達家の氏神であったものを昭和6年に大原子の産土神として譲り受けたという。『掛川誌稿』は、この伊達氏について今川氏家臣で、「伊達方」の領主と伝え、地元では伊達方の伊達氏はその子孫といわれている。大原子は伊達方の字であり、近世千羽村にも大原子はある。伊達方の村名は、大原子の一部を伊達氏の所領分として村分けしたことに由来するのである。なお山口とはいきつかの村を含む山口御町、山口庄という大きい領域単位での区分である。

なおこの伊達氏は、京都大学に所蔵される「駿河伊達文書」で著名な駿河伊達氏の一族であろう、と推定される。しかしながら、「駿河伊達文書」には遠江山名庄諸井の安堵は伝えているものの、山口伊達方の所領を伝える文書はない（京都大学文学部1989）。のことから遠江山口の伊達氏とは、早く分かれた駿河伊達氏の分流であろう。伊達氏の氏神に鰐口を奉納していたことから、順主慶口とは、伊達氏の一人とみることも許されよう。

鰐口の型式的特徴について触れてみたい。鰐口外邊にある目については、唇との間の段差を不明瞭のままでし、外側に向いて水平に突出する。さらに唇は大きく幅広いこと

も特徴となっている。銘帯との境界は外区ではなく、盛り上げた圓線を巡らす。この鰐口の撞座文様の特徴であるが、撞座は星形の外形に7個と1個の珠紋を中に入れるタイプで、安楽寺鰐口と一致する。撞座を飾る外形の星形は不明瞭である。撞座の両面はあまり叩かれていない。本鰐口の型式的に特徴づけている点を比較すると、安楽寺鰐口と共に通する点が多く、同一工房か同一鎌物師の作とみてよい。制作年代については銘文から大原子鰐口が先に制作され、9ヶ月後に安楽寺の銘を刻んだこととなるが、面径を比べると安楽寺が大きく、踏み返しで鋳型を造ったものではない。

#### 遠江国分寺鰐口と鵜田寺鰐口

袋井市羅ヶ谷（旧浅羽町）にある真言宗岩松寺には、以下の銘文が刻まれた鰐口がある（\*は異体字）。

奉懸國文寺御實前鰐口一掛之事之・・・(表右銘帶)

大且那源氏延棟梁頤主宝秀欽誌・・・(表左銘帶)

遠江州豊田郡府中兼師堂・・・(裏右銘帶)

時(\*) 大永二天壬午四月廿七日東金谷秀時大工・・・  
(裏左銘帶)

この銘文は表裏同筆によって刻まれていることから、表裏同時に刻まれた一連の銘文と考えられる。この内容によつて、鰐口は遠江府中の國分寺薬師堂に奉納されたもので、源氏延を且那と、宝秀を順主とし、鎌物師大工東金谷の秀時によって鋳造されたこと、さらにその銘文は順主が起草したことがわかる。また銘文の影りは手慣れているため、宝秀の下書きにあわせて、鎌物師が彫刻したと考えられる。且那の源氏延とは遠江今川氏の堀越氏延で、堀越六郎の仮名で呼ばれたとされる。

遠江今川氏についてはいくつかの論考があり（注1）、氏延についても知られているため、その成果に基づき簡単にふれてみたい。「宗長手記」の中に、この堀越六郎が遠江見付に住み、大永6（1526）年と大永7（1527）年に連歌師宗長が東海道往来の際、自邸に招き連歌興業を行つたこと、またこの人物は、大永6（1526）年か享禄4（1531）年に、公家飛鳥井雅綱より「蹴鞠条々」にの秘伝を受けている（静岡県1994a）ことが判明している（有光有学1997）。今川文化を体现していた人物といえよう。氏延の母親は北条氏綱の娘、崎姫（山木大方）、弟は武藏吉良氏に養子に入った氏朝といわれている（小和田哲男1986）。駿河今川氏の元、いかに破格の扱いを受けていた



図7 袋井市岩松寺鶴口

かがわかる。しかしながら永禄6（1563）年、駿河今川氏に反旗を翻し、堀越六郎は滅ぼされたとされる。

なおこの鶴口銘の源氏延とは源が氏名、氏延は実名であり、「宗長手記」の堀越は名字、六郎は輩行の仮名である。したがって実名がない限り、堀越六郎の仮名は当主の家名として踏襲されるため、崎嶺（山木大方）夫は堀越六郎としか記されていないために、氏延の父貞基が氏延であるのかが議論の分かれるところである（小和田哲男1995）、永禄6年に滅ぼされたとされる堀越六郎が氏延であるのかも、やはり議論の分かれるとこである（大塚歎2008）。

この鶴口の寸法を述べる。面の直径28.8cm、厚さ10.8cm、肩の厚さ4.7cmを測り、耳は片耳式である。耳の幅は4.6~4.5cmを測る。つぎにこの鶴口の型式的特徴について触れてみたい。この鶴口の形態をみると、先の安楽寺鶴口や大原子鶴口と同様に、鶴口外辺にある目については唇との間の段差を不明瞭のままでし、外側に向いて水平に突出する。唇は大きく幅広いことも特徴となっている。銘帯との境界は外区ではなく、幅広の盛り上げた圓線を巡らす。鶴口の撞座文様は、撞座は8本の角状先端で星形の外形をつくり、中心部周囲は8個の珠紋を巡らせ、1個のやや大きい芯部の珠紋を中心とするタイプである。安楽寺鶴口や大原子鶴口と珠文の数や大きさは異なるものの、形態や撞座の基本的なモチーフは一致する。他方、遠江の15世紀から16世紀前葉の鶴口では、以前に鉈鼓型鶴口と呼称したタイプは撞座を無紋とする例が多く（足立順司

2009b）、本例は銘文の通り、これとは別系統の東金谷工房の作品と考えられる。

なお中世後期から明治期まで隆盛を誇った、遠江森の鶴物師大工のうち西金谷に集住するグループがある（北川裕章1993）。銘文にある東金谷については、それとは大きく異なる東遠江から西駿河の鶴物師集団のことと考えている。その理由としては、東金谷タイプの鶴口が東遠江から西駿河に分布すること、永禄9（1566）年、平尾八幡（現菊川市）の梵鐘を鋳造した旧金谷町横岡に横岡（横岡住のという意味であろう）藤左右衛門が存在し、梵鐘を鋳造するだけの鶴物師集団が存在したことから、遠江森西金谷に対比して、この鶴物師集団を東金谷と称したと考えたい。見付に住む堀越氏延が、なぜ近くの遠江森の鶴物師ではなく、東金谷の鶴物師に鶴口を鋳造させたのかは不明である。つぎに同じ特徴をもつ鶴田寺鶴口についてふれることとする。

島田市野田の真言宗の古刹、鶴田寺には、銘帯と内区に以下の長い銘文が刻まれた鶴口がある（＊は異体字）。

駿河國大津本庄志田郡野田村・・・（表右銘帯）

田薬師堂・・・（表右内区）

大永五季丁酉五月八日 敬白・・・（表左銘帯）

元亨釈書曰 駿州（＊）鶴田寺薬師像者寶字二季三月一  
沙門渡大井河水底有声曰取我取我穿所（＊）而得 像高  
三尺座像左右耳朽閑命工補之其後□（＊置字カ）時時像放  
光・・・（裏右銘帯時計回りに刻む）

駿州（＊）鶴田寺薬師開闢以来年代等 入王四十代淡  
（＊）路（＊）廢帝天平寶字二年己亥矣 自尔以来至大 永  
五丁酉七百六十九季也・・・（裏左内区逆時計回りに刻む）

このように銘文に奉納先の縁起を刻む例は、鶴口銘ではきわめて異例である。なお鶴田寺の山号は天正山であり、寺院は永禄の戦火によって焼失し、天正年中に再興されたところから、その山号としたという。撞座の両面はあまり叩かれていないことからも、大事に保管されていたことが知ることができる。戦火からも守られ、ていねいに取り扱われた鶴口といえよう。この鶴口は面の直径34.9cm、厚さ16.8cm、肩の厚さ8.0cmを測る。耳は片耳式である。耳の幅は4.3~4.4cmを測る。

つぎに鶴口の型式的特徴について触れてみたい。この鶴口の形態をみると、先の安楽寺鶴口や大原子鶴口と同様に、鶴口外辺にある目は唇との間に段差を不明瞭のままでし、外側に向いて水平に突出する。唇は大きく幅広いことも特徴となっている。銘帯との境界は外区ではなく、幅広の盛り上げた圓線を巡らす。

外側に向いて水平に突出する。唇は大きく幅広いことも特徴となっている。銘帯との境界は外区ではなく、幅広の盛り上げた圓線を巡らす。鶴口の撞座文様は、撞座は8本の角状先端で星形の外形をつくり、中心部は8個と1個の珠紋を中心に入れるタイプである。安楽寺鶴口や大原子鶴口と珠文の数は異なるものの、形態や撞座の基本的意匠的なモチーフは一致する。撞座を飾る外形の星形の周辺をよくみると、円形に薄く盛り上がっている。このことは、撞座の文様には別の原型を押しつけ、鋳型を作ったと理解できる。

そうじて、きわめていねい造りで、唇中央先端に3個1組の小さな珠紋を5組上唇と下唇に添付する。この点は從来、指摘のなかった点であり、あまり例のない装飾である。

以上、本鶴口の型式的に特徴づけている点を比較すると、安楽寺鶴口、大原子鶴口、遠江国分寺鶴口と共通し、鶴田寺鶴口についても東金谷鋳物師の作といえよう。

## まとめ

小論のまとめとして以下の2点についてふれる。

### 1 鋳物師本質と消長

天正15（1584）年、徳川家康から「駿遠両国鋳物師惣大工職」を認められた遠江森の鋳物師大工山田七郎左衛門家には、「亥年十一月十一日」に出された「吹屋書立」と書かれた小栗吉忠手形がある。内容は「金屋（森）四間此人足式拾人、藤枝四間 此人足式拾人、江尻二間此人足拾人、沼津二間 此人足拾人」の人足分微差を免除するというものである。亥年とは慶長16（1611）年と考えられる。このことから駿河・遠江両国に山田七郎左衛門の支配を受けた鋳物師が、藤枝、江尻、沼津といったことが判明する。

それ以前の天正19（1591）年、掛川城に転封となつた山内家臣福岡忠勝により森鋳物師大工あてに、三人大工居屋敷の免除とかなや役鏡三貫文は上納することの判物が出されているので（森町1993）、すでに鋳物師屋敷分は免除となり、既得権となっていた。同時に森金屋には山田七郎左衛門も含め3人の鋳物師大工がいたことが判明する（榎本正治1986）。

ところで徳川家康が駿河に安定的政権を樹立した時期は天正10（1582）年前後なので、それ以前に、江尻や沼津に七郎左衛門の支配が及ぶことは考えられない。なお江尻には七郎左衛門の第六郎左衛門が、駿府御用のため駿府横

田町にいたが、その後、江尻に移り住んだと伝えられている。

静岡市池田の本覚寺鶴口には慶長10（1605）年「江尻鋳物師」の銘がある。この鶴口からその頃、江尻鋳物師がいたのが判明するが、この江尻鋳物師とは六郎左衛門のことをさすのか、それ以前からの鋳物師であるのかはよくわからない。というのは本覚寺鶴口は、撞座の紋様が外側を星形とし、中心部を珠文という東金屋系の型式であるものの、目が大きく外側に突出する別の系統であることから、遠江や東遠江・西駿河の鶴口と異なる系統の鶴口、または別系統の特徴を融合させたものと考えられるからである。本覚寺鶴口の「江尻鋳物師」とは山田六郎左衛門もしくはその系統とは限らないからである。江戸時代には、山田六郎左衛門のもとに芹沢・大塚・岡本の苗字の鋳物師がいる（佐藤都太2008）。なお江尻鋳物師が住んでいたとされる場所は、鋳物町と呼ばれた地であったこと、江尻鋳物師の駿路が甲斐にまで及ぶことは佐藤都太が言及している。

藤枝と沼津の鋳物師については、文書も金石文も残っていないためよくわからない。ただ「駿河志料」の藤枝の記述には「吹屋町」があって、その場所が若王子の一部であることが判明する。藤枝鋳物師はこのあたりに居を構えていたと推定される。大御所時代の徳川家康の威光を背景にして遠江の鋳物師が駿に駿河国内まで工房を拡大したとみることができよう。

しかしながら、江戸時代の早い時期にこれら工房が衰退したらしく、明確な作品や文書なども残っていない。おそらく駿河一国を治める駿河藩がなくなったことにより、「駿遠両国鋳物師惣大工職」が形骸化したために、藤枝と沼津が衰退したものと考えておきたい。

ところで藤枝・島田付近には「亥年十一月十一日」直前の銘をもつ鶴口がつぎの2口がある（佐藤都太1995）。

カーン（不動明王の種子）駿州山西藤枝鬼岩寺大工口（萬カ）松慈右衛門・・・（表右銘帶）

慶長十六辛亥年吉日本願如意院大聖院・・・（表左銘帶）

この鶴口は、藤枝市鬼岩寺に大工口（萬カ）松慈右衛門によって奉納されたものである。2口目の鶴口にはつぎの銘文がある。

奉懸般音寶殿之鶴口壱個・・・（表右銘帶）

慶長十六青龍辛亥小春如意珠日・・・（表左銘帶）

右意旨者偏爲長嚴常盛上座作菩提也願主藤原忠直大工山



図8 藤枝市安楽寺鈸口



図9 掛川市大原子鈸口



図10 島田市萬福寺鈸口



図11 島田市智満寺鈸口



図12 島田市東光寺鈸口



図13 藤枝市鬼岩寺鈸口



図14 藤枝市清水寺鈸口



図15 静岡市本覚寺鈸口

### 田吉實・・・(裏右銘帶)

千葉山智満教寺住持比丘権都法印尊榮誌焉・・・(裏左銘帶)

銘文の小春とは10月のことである。この鈔口は、銘文より長嚴常盛上座の供養のため顧主藤原忠直、大工山田吉實によって智満寺に奉納されたことがわかる(望月薰弘 1995)。その4年後の慶長20年文月(7月のこと)の銘のある藤枝市清水寺鈔口には「大工紀法宗太夫」の銘がある。紀の本姓は燈炉供御人に由来し、鎌物師の本姓ではきわめて古風で、数少なく異例なことである。

さらに島田市東光寺本堂には慶長19年銘の鈔口があるが、銘の「此作」ではなく、「此徒(つかい)」であり、残念ながら鎌物師の仮名ではない。ではこの中で藤枝鎌物師の鈔口とはどれなのであろうか。

さきに東金屋の鈔口の特徴を、安楽寺鈔口、大原子鈔口、遠江国分寺鈔口の中から抽出した。その際、東金屋タイプの特徴を、口外辺にある目は唇との間に段差を不明瞭のまま、外側に向いて水平に突出すること、唇は大きく幅広いこと、銘帯との境界は外区ではなく、幅広の盛り上げた圓線を巡らすこと、撞座文様は角状の先端で星形の外形をつくり、中心部には珠紋を中心に入れるタイプであることを指摘した。

この点では撞座モチーフは鬼岩寺の鈔口が近いが、星形と珠文のバランスが異なり、目が大きく外側に突出する点は、江戸鎌物師の作である本覚寺鈔口に近い。智満寺鈔口・清水寺鈔口・東光寺鈔口は撞座を連弁紋とするが、それぞれ小異がある。目は外側に突出するが、顕著ではない。また智満寺鈔口と東光寺鈔口が内区・外区・銘帯という区画である点は東金屋系鈔口にはない特徴である。

以上のことから、天文期までの東金屋系鈔口の特徴は、この地域では慶長期の藤枝鎌物師にそのままつながっていない、とみることができよう。

智満寺鈔口の鎌物師の苗字を重視すれば、遠江森の鎌物師惣大工と同じ山田であり、これこそが亥年の「吹屋書立」と書かれた「藤枝四間 此人足式拾人」の藤枝鎌物師ではないだろうか。すると撞座文様や形態について、それぞれ独自色をもっていたと考えられるが、藤枝鎌物師は江戸時代初期には衰退したらしく、痕跡をとどめていない。

その後、駿府には田中姓の近江鎌物師の移住があつて販路を確立する動向は、もはや小論の守備範囲ではないた

め、割愛する。

### 2 鈔口・雲版が移動とその背景

さきに山梨県にある藤原秋長銘の鈔口の記述で、本鈔口については、武田信玄軍による三方ヶ原の戦い、もしくはその行軍中に乱取り・略奪された可能性が高いとした。梵鐘・鈔口・雲版などの移動については、戦時の徵用・乱取り・略奪によるとする意見が多いが、それとは別に養寿寺雲版銘にあるように、相良新庄法恩庵から高畠村實聚院への移動は、藤原秋長が古くなった雲版を転売していたと考えられる。つまり、以前指摘したように、梵音具の移動は、戦時の徵用、乱取り・略奪ばかりではなく、古金・古物として鎌物師の手元に集められ、それが転売され移動もした。藤原秋長の例はその一例となる。これ以外にも聖や山伏とともに移動し、別の寺社に奉納されたこともあろう。

ではなぜ武田信玄軍と考えたのか。そしてそうではないケースとは何であろうか。つぎに述べてみたい。梵音具の移動は同じものであっても二次、三次の移動があり、戦時の徵用、乱取り・略奪ばかりにその要因を帰すことはできない。藤原秋長銘の二次銘にあるように、戦乱のないところから平和時に移動した例もある。また三河と遠江、南信濃には、鈔口などの移動については、別表のようなケースがあって、三河と遠江の間では双方に移動が確認できる。鈔口の移動では三河から遠江横山への移動、三河から遠江野辺への移動は戦時に起こっていないので、古物の仏具が移動したと考えられる。飯田市の鈔口の例は(市村成人 1932)、中世中期から後期の信濃には鎌物師はいなかつたから、三河・遠江の鎌物師の手で、梵鐘・鈔口などが転売されたケースと推定される。同様に中世鈔口の多い浜松市天竜区水窪町の例は、すべてが別の奉納先から二次、三次の移動によって奉納されている。そしてもとの奉納先は、遠江豊田郡内や三河の設楽郡内とそれほど遠い地域ではない。よってこのことから戦時の徵用品を奉納したと考えるよりも、古物を利用して仏具をしつらえ奉納したケースが多いと考えられよう。

梵音具の遠江から三河への移動についても、中遠地域・湖北地域が移動元であって、移動先は三河八名郡・奥郡(渥美)、設楽郡が多い。また銘文には追刻はなく、三河に奉納された時期は不明であるので詳細は不明である。三河の武将が中遠地域で戦時の徵用、乱取り・略奪をおこなったことは認めがたいので、別の理由によって、移動したも

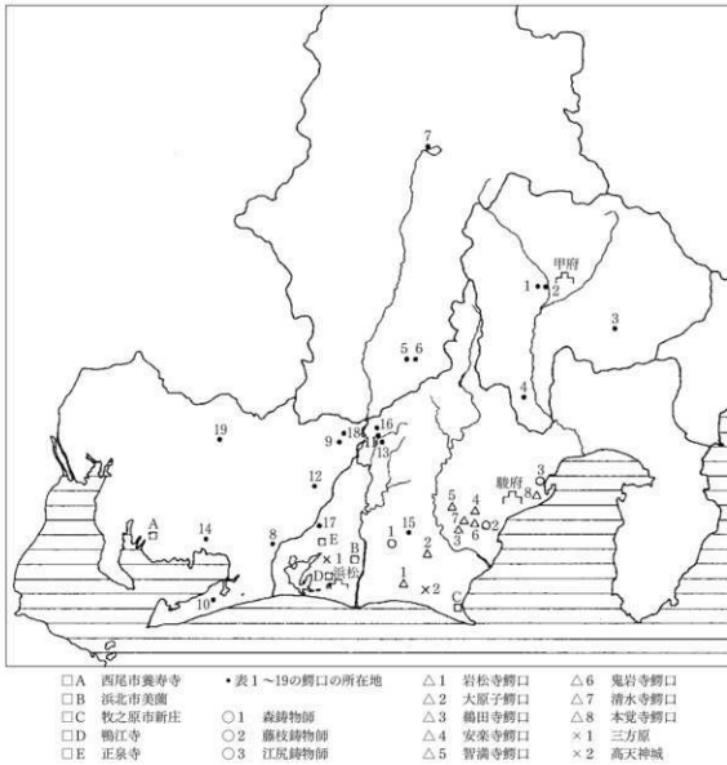


図16 雲板・ kappa 口分布図

表1 国を越えた kappa 口

番号	名称	現存地	移動した国	移動元	年号	西暦
1	本重寺 kappa 口	南アルプス市上野	遠江から甲斐	遠州浜名郡本坂十王堂	宝徳四年	1451
2	妙大寺 kappa 口	南アルプス市田島	遠江から甲斐	遠江佐東の紙問高瀬天王	永禄九年	1566
3	蓮華寺 kappa 口	富士河口湖町	遠江から甲斐	遠江武田郡高瀬輪周辺の富士寺浅間	享禄元年	1528
4	弘成寺 kappa 口	富士市成島	遠江から甲斐	遠江佐東日鄰余田大明神	經応三年	1340
5	福荷社 kappa 口	駿府市上村中立	遠江から信濃	遠江武田郡池田庄本郷正福寺	宝徳四年	1451
6	十五社 kappa 口	駿田市上村大野	遠江から信濃	大峰上駄約西光寺	長禄四年	1460
7	般若院 kappa 口	岡谷市小坂	遠江から信濃	遠州鶴羽寺・河勾庄高木郷九所社	永禄九年	1566
8	長浜天社 kappa 口	豊橋市嵩山	遠江から三河	別府御膳清福寺	明徳二年	1392
9	野野寺 kappa 口	豊根村大谷	遠江から三河	遠州一宮莊栗食野野社	応永四年	1397
10	當行寺 kappa 口	田原市田原	遠江から三河	遠州田原郡千手堂	永禄十二年	1569
11	山王社 kappa 口	天竜区水窪町	三河から遠江	設楽郡牛頭天王	応永十四年	1407
12	諏訪神社 kappa 口	新城市風来寺川合	遠江から三河	設楽郡風野十王堂	永享十一年	1439
13	上村 kappa 口	天竜区水窪町上村	三河から遠江	三河下山平伊良湖大明神	永享十二年	1440
14	長谷寺 kappa 口	韮崎市上本町	遠江から三河	摩耶郡寺十王堂	康正元年	1455
15	萩洞八幡宮	掛川市萩洞	三河から遠江	本郷八幡郡正岡天王	長景四年	1460
16	八剣社 kappa 口	天竜区水窪町地頭方	三河から遠江	本郷下田諏訪大明神	文明三年	1471
17	大平熊野社	北区引佐町大平	三河から遠江	三河設楽郡振草足觀音堂	永正五年	1508
18	阿弥陀堂	豊根村三沢	遠江から三河	遠江山名郡貞名郷大頭面社	永正十四年	1516
19	覺性院 kappa 口	豊田市足助町大藏	遠江から三河	遠江長上郡中田善隣寺	弘治三年	1557



図17 西尾市養寿寺



図18 富士河口湖町蓮華寺



図19 藤枝市安樂寺



図20 摂川市大原子(白山)神社



図21 島田市鶴田寺



図22 島田市智満寺



図23 島田市東光寺



図24 南部町仏成寺



図25 南部町仏成寺鈴口（山梨県1999による）

のと理解できる。

別表2には甲斐と信濃の諏訪地域などにある三河・遠江に奉納されていた鈴口・雲版を掲げた。信濃の例では、辰野町七歳寺鈴口は永正七（1510）年に三河八名郡赤岩山法言寺に懸けられていた鈴口とつぎに述べる遠江浜松鴨江寺本堂に寄進された鈴口がある。鴨江寺銘の鈴口には、つぎの銘文が刻まれている（静岡県1994b）。

バイ（薬師如來の真言）遠州豊田郡河勾庄高木郷九所大明神金鼓也且那平幸久・・・（表右銘帯）

右折以吉日良辰錦之者也明応五祀丙辰六月廿八日・・・（表左銘帯）

サ（観音の真言）遠州鴨江寺本堂仁奉寄進松下藏人建昌・・・（裏右銘帯）

永禄九年丙寅五月十七日願主大丹坊宥誉・・・（裏左銘帯）

天正仁年甲戌霜月十八日・・・（裏右外区）

信州小野大祝源満昌敬白・・・（裏右内区）

この鈴口銘からすると、明応五（1496）年に遠江河勾庄高木郷九所大明神に奉納され、つぎに永禄九（1566）年に松下藏人によって鴨江寺に寄進されたことが判明する。さらに天正二（1574）年には信濃小野神社の大祝によって、武田勝頼の母に当たる諏訪御寮人の供養塔のある岡谷市小坂観音院に寄進されたことがわかる。永禄九年という年は今川氏真が鴨江寺の寺領を安堵し再興を命じてのことから、この前後に、鈴口をしつらえたものと考えられる。そしてなぜ8年後の天正二年に信濃小坂観音院に寄

進されたのであろうか。その要因は、元亀三（1572）年に行われた遠江への侵攻と三方ヶ原の戦いに結びつけたい。鴨江寺の鈴口については、三方ヶ原の戦いに大勝した武田軍が浜松城付近の鴨江寺まで乱入し、鈴口を戦勝品として乱取り・略奪したのであろうと考えている。そしてそれを今はなき諏訪御寮人ゆかりの観音堂に奉納し、あわせてこの大勝の最中、亡くなった信玄公を追善するという意味もあったことであろうと推定しておきたい。

甲斐蓮華寺にある藤原秋長銘の鈴口は、旦那の居住地高蔵からこの付近の富士浅間宮に奉納されたものと推定した。高蔵付近は、元亀三年の遠江侵攻時において武田軍の一時占領地域にあたると推定される。これにより藤原秋長銘の鈴口も、武田軍か戦勝品として乱取り・略奪したのであろうと考えている。ほかに南アルプス市本重寺の鈴口は、つぎの銘文から浜名郡本坂（現在の浜松市北区三ヶ日）十王堂に懸けられていた鈴口であったことがわかる。ただし「甲斐風志 八五巻」の収録のみで、現存はしていない。

遠州浜名郡本坂十王堂 宝徳四年壬申林鐘吉日

遠江と三河をつなぐ本坂は武田軍の行軍の通過点である。やはり乱取り・略奪の結果であろう。これが遠江にあった鈴口が甲斐にある要因であろう。

ほかに甲斐南部町仏成寺にある鈴口には（山梨県1999）、現在の掛川市である城飼郡高天神城周辺に奉納されていた鈴口がある。佐東日奈田神社に懸けられていた鈴口と同じく佐東西之谷祇園天王社に懸けられていた鈴口がそれである。祇園天王社にかかっていた鈴口には、つぎのような永禄九年九月九日銘がある。

表 奉納祇園午頭御宝前

奉納鈴口一流之事

裏 大日本國東海道遠江州城東郡笠原庄三和郷吉右衛門

尉為現当世也 時永禄九年丙寅九月九日

奉納された永禄九（1566）年以後、甲斐に移されたとすれば短期間の出来事であり、不測の事態があったことが推定される。やはり武田信玄による元亀二（1571）年に行われた高天神城包囲、そして武田勝頼による高天神城攻撃による乱取り・略奪の結果、本国甲斐に持ち去られたと推定したい。北遠江から奥大井の武田軍の旗下に入った天野氏・奥山氏・小長谷氏の所領では、梵音具の移動はほとんどないことから、背景には武田軍という特定の勢力によ

る地域の限定される行為であるとしておきたい。

つまり武田軍にとって敵対する領國の神仏の力は殺ぐべき対象であり、味方する領國の神仏は敬って加護を求めるべき対象であった。駿河山西地域の同様のケースについては前田利久の分析があるが、武田軍の侵攻と徵用や乱取り・略奪と位置づけている（前田利久2005）。

のことから甲信地方への鰐口・雲版の移動のうち、徵用や乱取り・略奪説は、南北朝の乱や信濃小笠原氏による斯波氏への援軍にかかわったことは少なく、おもに武田軍の侵攻によることが多いと考えておきたい。今川氏親・北条早雲による佐野郡・周智郡への侵攻も激しいものがあったと伝えているが、現状では鰐口・雲版の移動と結びつけられたと証拠も認められていない、小論からは割愛しておく。

## 謝辞

文末ではあるが、執筆にあたって下記の方々に援助や教示をいただいた。記して感謝の念にかえる（敬称は略す）。

佐藤郁太 大隅信好 新井正樹 山梨県立博物館 西尾市教育委員会 西尾市養寿寺 富士河口湖町蓮華寺 南部町仏成寺 浜松市正泉寺 藤枝市安楽寺 藤枝市鬼岩寺 藤枝市清水寺 掛川市伊達工業 袋井市岩松寺 島田市鶴田寺 島田市智満寺 島田市東光寺 静岡市本覚寺

## 注

1 遠江今川氏については、小和田哲男（小和田哲男1986）、有光有学（有光有学1997）、大塚勲（大塚勲2008）などがある。

2 東三河北金屋集団とその鰐口については、野澤則幸の成果（野澤2002）が、伊豆山木集団とその鰐口については、高野徳多果の成果（高野2002）、遠江については（足立順司2006）がある。

3 近世森町の鉄物師については、榎本正治（榎本正治1986）、北川裕章（北川裕章1993）の研究がある。

## 追記

脱稿後、84頁の鶴江寺銘の鰐口については、小論同様に、武田軍の略奪により岡谷市観音院に寄進されたとする見解が、2009年刊行の『竜洋町史 通史編』にすでに指摘のある事を知った。ただし同書では寄進者は源氏大祝としているが、小論のように信濃二宮の小野神社大祝源満昌と考えられる。

坪井俊三氏は「永禄期遠江に関する三通の文書」『平成17年度高等学校における社会科教育に関する研究報告』2006年によって、同じ鶴江寺銘の鰐口に刻まれた2次銘の松下

藏人建昌については、天正17年に歿した松下藏人連昌と推定している。以上の指摘を加えておく。

## 引用・参考文献

- 足立順司2002 「もう一つの中世史」  
足立順司2006 「鉄物師と陶工」「陶器の社会史」  
足立順司2009a 「出土鰐口について」「法明寺古墳」  
足立順司2009b 「天竜の鰐口」「静岡県埋蔵文化財調査研究  
所研究紀要 第15号」  
有光有学1997 「第三編第三章第二節今川一族」「静岡 県  
史通史編2」  
市村寅人1932 「鰐口から見た遠山文化」「信濃第4号・第  
10号」  
大塚勲2008 「見付端城主今川六郎氏延」「今川氏と遠江・駿  
河の中世」  
小和田哲男1986 「戦国期の遠江今川氏【堀越氏】」「駿河の今  
川氏 第九集」  
小和田哲男1995 「第四編第六章・四山木に住んだ氏綱の娘」「  
『蒲山町史 第十巻』」  
小和田哲男2006 「軍勢の東西移動と鍾・鰐口」「地方史研究  
32号」  
河村隆夫1996 「鰐口考」「御林守展資料」  
北川裕章1993 「近世における鉄物師社会の構造」「地方史静  
岡21」  
榎本正治1986 「近世の鍋釜商人と鍊鉄」「地方史研究20」  
佐藤郁太2008 「静岡市内の鉄物師」  
佐藤郁太2004 「静岡県の雲版」「歴史考古学 第54号」  
佐藤郁太1995 「静岡県内鰐口銘文集成」  
静岡県1994a 「史料番号3-9133-9673-1463」「静岡県史  
資料編7」  
静岡県 1994b 「補遺182」「静岡県史 資料編8」  
京都大学文学部1989 「今川義元安堵状」「駿河伊達文書」  
望月薰弘 1995 「駿河・智満寺の考古学的調査」「静岡市立  
登呂博物館報 6」  
山梨県1999 「山梨県史 文化財編」  
高野徳多果2005 「伊豆の鰐口」「静岡県埋蔵文化財調査研究  
所研究紀要 第11号」  
坪井良平1970 「日本の梵鐘」  
野澤則幸2002 「愛知県新城市富岡瑞雲寺不動堂の鰐口につ  
いて」「地域考古学の展開」  
増田率代2003 「鰐口の移動にみる戦国時代」「藤枝市史研究  
第4号」  
前田利久2005 「武田信玄の駿河侵攻と略奪」「藤枝市史研究  
第6号」  
森町1993 「史料番号230」「史料番号232」「森町史 資料編  
三」

## 古籍刊本

- 『宗長手記』は昭和3年刊『新校群書14』による。  
『掛川誌稿』は昭和47年刊名著出版本による。  
『駿河志料』は昭和47年刊名著出版本による。

## Caster's Permanent Address

Junji ADACHI

**Summary:** There are some Buddhist alter fittings, such as Waniguchi and Unban, having moved from an originally dedicated place in Totoumi in the Age of Civil Wars to other regions such as Mikawa, Shinano and Kai. I mainly examine the trace to clarify why the transfer was happened. Among the examples, I studied Waniguchi and Unban with a signature of FUJIWARA AKINAGA, and found that they are ones of productions of a caster domiciled in Enshu-Akaza. At the same time, I examine the meaning of a transfer of the Unban with a signature of AKINAGA from one temple to another on the hypothesis that a caster sold his product at second hand. I also deal with existence of certain group of casters in Totoumi/Suruga by extracting characteristics of Waniguchi of Totoumi/Suruga. On the other hand, by examining the Waniguchi transferred to Shinano and Kai, I estimate that they were carried as requisition and booty by Takeda Army in wartime. Some of them can be traded in Totoumi/Mikawa region. Facing Waniguchi and Unban, I didn't pay all the attention to signatures but tried to draw another picture by examining the meanings of their transfer with archaeological analyses.

**Key words:** Waniguchi (gong), Unban(cloud-shaped gong), producer FUJIWARA AKINAGA, Ensyu-Akaza casters, sales at secondhand, transfer for Shinano and Kai, invasion of Takeda army

# 金属製遺物に付隨する乾燥木材の樹種同定

—刀剣類の柄と鞘の用材選択—

西 尾 太加二

**要旨** 古墳などから出土する金属製遺物に付隨する乾燥木材の樹種同定を行った。乾燥木材は接着し、硬質化した状態であるため研磨法によりプレパラート標本を作製した。刀剣類に伴う柄や鞘の樹種はいずれも木材の特性を生かした適材適所というもので、用材選択が行われていたことを明瞭に示している。大刀や短刀の柄は堅硬で強靭、加工性もよい広葉樹材が用いられ、鞘は木理通直、割裂性、加工性に優れる針葉樹材のヒノキが優先的に使われている。鉢の柄は儀礼用にはやや軽軟なスギを用い、実用には堅硬、強靭な広葉樹材が選択されている。朝鮮半島製と推定されている大刀と馬具に伴う木材は両地域に自生するマツ属とカエデ属であり、製作地の推定には至らないが、木材の樹種から遺物の機能性をある程度推定することが可能である。なぜなら、古来人々は、目的とする用途に適した木材を選択し利用してきたからである。

**キーワード：**樹種同定、用材選択、木材利用史、乾燥木材、刀剣類の柄と鞘

## 1はじめに

日本には約千数百種の樹木があり、そのうち木材として利用される樹種は三百種ほどである。遺跡の発掘調査によっても数多くの木材が出土するが、日本の遺跡から出土する木材は異なる3つの遺存タイプに分かれる。溼潤な遺跡から出土する水浸木材、焼失住居や窓跡・煙跡から出土する炭化木材と本論で報告する丘陵上に位置する遺跡から出土する乾燥木材である。このような出土木材の樹種を調査することで人々の木材利用史が明らかとなり、遺跡周辺の森林環境の変遷も明らかとなる。

古墳などから出土する鉄製品や青銅製品には乾燥した木材や布などの有機質遺物が接着した状態で遺存することがある。有機質遺物は地下水位以下に埋没した遺跡から出土することが一般的で、乾燥や湿潤を繰り返す丘陵上に位置する遺跡から出土することは少ない。古墳などの埋没環境では、有機質を腐らせる微生物（木材腐朽菌など）が生育するための十分な酸素と水が供給されるため、有機質は土壤中で分解され消滅してしまう。しかし、金属部分に密着した木材は、微生物によって分解される前に金属イオンや鉛などの鉱物質のものが細胞組織内に沈着し、硬質化することで形状が保たれことがある。

このように鉱物質化した乾燥木材を合成樹脂に包埋する

方法でプレパラート標本を作製し樹種同定を行った。

調査を実施した遺物は、五ヶ山B2号墳、寺山14号墳、賤機山古墳、鳥居松遺跡、堂ヶ谷遺跡、秋葉林遺跡から出土した刀剣類とともに柄や鞘、原分古墳出土の棺材、賤機山古墳から出土した歩幅付飾金具八角鉢内部の木芯など計25点である。判明した樹種はいずれも木材の特性を生かした適材適所というべきもので、用材選択が行われていたことを明瞭に示している。

## 2樹木と木材の3断面・3方向

用語の解説をかねて、ここで簡単に樹木と木材の3断面・3方向について簡単にふれておく。

樹木の成長には、上に伸びようとする伸長成長と太くなろうとする肥大成長がある。草には横方向に太くなろうとする肥大成長がない。樹木は、樹皮の内側にある形成層が細胞分裂して内側に木部を、外側に師部（養分が下降する部分）を新たに形成する。内側に形成された木部は年々蓄積されることで太くなっていく。木部に形成された細胞はほとんどが死細胞となるが、一部生活細胞が存在する。生きた細胞は外周部にある淡い色の部位で辺材（sapwood）といわれ、死細胞化した部位は色が濃くなっており心材（heartwood）と呼ぶ。

形成層の活動には一定の周期がある、それに従って木材の組織にも周期的な変化が現れる。この周期的变化を成長輪（growth ring）と呼ぶが、日本のように四季の移り変わりが明瞭な温帯地帯では1年を周期とするのでこれを年輪（annual ring）と呼ぶ。

マダカスカルなどサバンナ地帯に生息するバオバブ（*Adansonia*）という樹木には生长輪はあるが年輪はない。なぜなら1年を通じて気温がほぼ一定しており、雨季と乾季とが成長期と休止期とに影響するため1年という周期の年輪は形成されないのである。

日本の樹木は、春から著しい成長がはじまり、夏にはその成長速度が遅くなり、秋から冬にかけては休止期となる。春から夏にかけて形成された材を早材（early wood）または春材（spring wood）、夏から秋にかけて形成された材を晩材（late wood）または夏材（summer wood）と呼ぶ。

樹幹や枝の横断面（cross face）を木口といい、年輪界（annual ring boundary）は同心円状に現れる。髓を通っ

て縱に割った面（radial face）を柾目といい、年輪界は柾の平行線となる。柾目に垂直な縱断面、すなわち木口の同心円状の年輪界に対して接線方向に割った面（tangential face）を板目といい、年輪界は面の傾きによって放物線を描く。

樹木の成長に伸長成長と肥大成長があることから、木材にも方向性が生じる。樹木が上に向かって伸びようとする方向を軸方向（axial）とよぶ。髓から樹皮に向かう方向を放射方向（radial）、放物方向に直行する方向を接線方向（tangential）といいう。

木材には針葉樹材と広葉樹材とがある。大きな違いは水分導通だけの機能を受け持つ道管の有無である。広葉樹材にはあるが針葉樹材にはないという点である。

広葉樹材は針葉樹材に比べて高等なグループとされ、広葉樹材の細胞構成要素は針葉樹材のそれに比べて種類が多く、それぞれの要素が受け持つ機能の分業化、専門化がなされている。

木材としてみた場合、針葉樹材は木理が直線で、割裂性、加工性ともに優れ、大材が得やすいことが特徴である。また、年輪界は比較的明瞭であり、軽軟な材もある。広葉樹材は堅硬あるいは強靭で、耐久性、保存性、耐湿性に優れているが、重く加工性に劣るものもある。

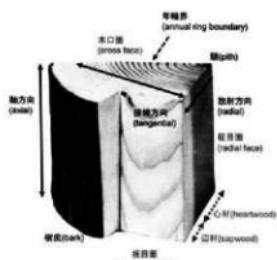


図1 木材の3断面と3方向

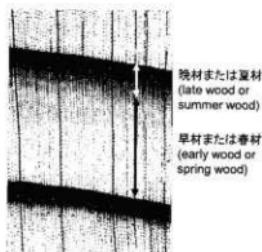


図2 スギの生長輪

### 3 断面プレパラートの作製方法

木材の樹種を同定するためには、木口、柾目、板目の各断面に現れる細胞の形状や配列を顕微鏡で観察しなければならない。そのため、遺物から木片を採取してプレパラート標本を作製する必要がある。金属に接着している硬い乾燥木材から木片を採取するためには、ダイヤモンドカッターを取り付けた精密加工機（リューター）で切り出すように行う。採取する木片の大きさは2～5mm前後の立方体であるが、3断面を観察するため、そのブロックをさらに3分割する。

プレパラート標本の作製は研磨法で行った。研磨法とは、採取した木片を透明なエポキシ樹脂に埋め込んだ後、透過光で検鏡できる厚さまでサンドペーパーやアルミパウダーを使って研磨する方法である。（写真1～4）



写真1 エポキシ樹脂に包埋した試料  
ポリエチレンチューブの中で固化させる

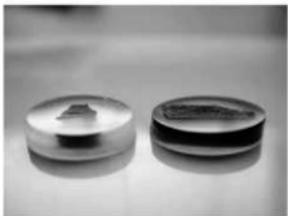


写真2 研磨中の試料  
観察に適した細胞組織が現れた面で止める

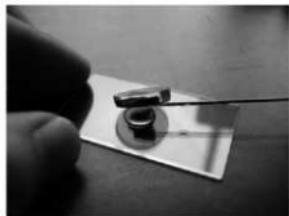


写真3 試料をスライドガラスに接着する  
接着剤（エポキシ樹脂）に気泡が入らない  
ようにニードルを使い静かに倒していくく



写真4 完成したプレパラート  
スライドガラスに接着した試料を透過光で  
観察できる厚さまで研磨する

#### 4 試料と同定結果

試料と同定結果の一覧を表1に示す。

表1 試料と同定結果一覧表

試料No.	道路	遺物	部位	年代	樹種	学名
1	五ヶ山B2号墳	鉢2（蛇形鉢）	長柄	5世紀中ごろ	スギ	<i>Cryptomeria Japonica</i> Linn. f. D.Don
2	五ヶ山B2号墳	鉢3	長柄	5世紀中ごろ	スダジイ	<i>Castanopsis cuspidata</i> var. sieboldii Nakai
3	五ヶ山B2号墳	鉢4	長柄	5世紀中ごろ	スダジイ	<i>Castanopsis cuspidata</i> var. sieboldii Nakai
4	五ヶ山B2号墳	楕1	楕	5世紀中ごろ	スギ	<i>Cryptomeria Japonica</i> Linn. f. D.Don
5	寺山1号墳	鉢56	長柄	5世紀後半	カバノキ属	<i>Betula</i> Linn.
6	鳥居松遺跡	金網袋大刀	柄	6世紀後ごろ	カエデ属	<i>Acer</i> L.
7	秋葉村第1号墳	金網袋主頭大刀	柄	6世紀前～7世紀初頭	アカガシ属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
8	秋葉村第1号墳	金網袋主頭大刀	柄	6世紀前～7世紀初頭	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
9	雞鳴山古墳	大刀M-435	柄	6世紀代	アカガシ属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
10	雞鳴山古墳	大刀M-435	柄	6世紀代	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
11	堂ヶ谷遺跡	大刀42	柄	12世紀中葉～後葉	アカガシ属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
12	堂ヶ谷遺跡	短刀43	柄	12世紀中葉～後葉	サクナ属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
13	堂ヶ谷遺跡	短刀46	柄	12世紀中葉～後葉	ヒノキ	<i>Prunus</i> Linn.
14	堂ヶ谷遺跡	短刀76	柄	12世紀中葉～後葉	ホオノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
15	堂ヶ谷遺跡	短刀96	柄	12世紀中葉～後葉	ヒノキ	<i>Acer</i> Mon. Maxim.
16	堂ヶ谷遺跡	短刀176	柄	12世紀中葉～後葉	カバノキ属	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
17	堂ヶ谷遺跡	短刀176	柄	12世紀中葉～後葉	ヒノキ	<i>Betula</i> Linn.
18	堂ヶ谷遺跡	短刀177	柄	12世紀中葉～後葉	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
19	雞鳴山古墳	歩幅付鈎金具0503	八角鉢木芯	6世紀代	マツ属（アカマツまたはクロマツ）	<i>Pinus</i> Edentiflora or <i>P. Thunbergii</i>
20	雞鳴山古墳	歩幅付鈎金具0504	八角鉢木芯	6世紀代	マツ属（アカマツまたはクロマツ）	<i>Pinus</i> Edentiflora or <i>P. Thunbergii</i>
21	雞鳴山古墳	歩幅付鈎金具0505	八角鉢木芯	6世紀代	マツ属	<i>Pinus</i>
22	雞鳴山古墳	歩幅付鈎金具0506	八角鉢木芯	6世紀代	マツ属	<i>Pinus</i>
23	雞鳴山古墳	歩幅付鈎金具0507	八角鉢木芯	6世紀代	マツ属	<i>Pinus</i>
24	原分古墳	釘262	木棺材	7世紀中葉～後葉	スギ	<i>Cryptomeria Japonica</i> Linn. f. D.Don
25	原分古墳	釘962-3	木棺材	7世紀中葉～後葉	スギ	<i>Cryptomeria Japonica</i> Linn. f. D.Don

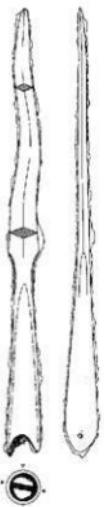


図3 №1 五ヶ山  
蛇行鉢長柄 スギ

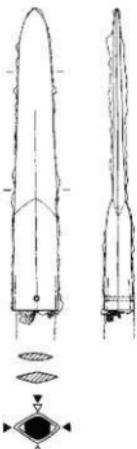


図4 №5 寺山 鉢カバノキ属  
長柄

S = 1 : 4

は龍文、柄間に唐草文が彫刻され木材表面には漆が1層塗られている。さらに、柄頭には金板、柄間に銀板を被せて装飾されている。柄部の樹種はカエデ属である。



写真5 №6 鳥居松 金銀装大刀



写真6 №6 同・柄(水浸木材) カエデ属



写真7 №7, 8 秋葉林 金銅装圭頭大刀



写真8 №7 同・柄 アカガシ亜属



写真9 №8 同・鞘 ヒノキ

#### 試料№1～4

旧浅羽町五ヶ山B2号墳は古墳時代中期中葉の方墳で、甲冑、武器類、鉄製農工具、革製盾などの豊富な副葬品が出土した。棺内から検出された刀劍類は、すべて抜き身で副葬されていたようだが棺外の槍には鞘が確認され、樹種はスギであった。同じ棺外から6点の鉢が出土した。鉢の袋部内面には長柄の木質が良好に遺存していた。3点を調査し、蛇行鉢がスギ、他の2点はスダジイであった。

#### 試料№5

旧豊岡村寺山14号墳は5世紀後半から6世紀前半に築造された円墳で、棺内から鉄剣、鉄鎌、棺外から同一の鉢とみられる鉢先と石突が出土した。鉢の袋部内面には長柄の木質が良好に遺存しており、樹種はカバノキ属である。長柄の木取りは、年輪の形状から心持丸太材ではなく削材を棒状に削りだしたものである。

#### 試料№6

鳥居松遺跡の金銀装大刀は伊場大溝の下層、古墳時代後期の包含層中から出土した。柄は水浸木材である。柄頭に

#### 試料№9, 10

古墳時代後期の沼津市秋葉林第1号墳から鉄鎌、刀子などとともに金銅装圭頭大刀1振りが出土した。木質の遺存状態は良好で、柄頭部の樹種はアカガシ亜属で、鞘はヒノキであった。

#### 試料No.9, 10

平成3年から平成7年にかけ古墳の保存整備事業に伴う再発掘調査によって大刀4振りが検出された。賤機山古墳は6世紀後半の築造で、金銅製の馬具をはじめとする奈良県斑鳩町藤ノ木古墳と類似する豊富な副葬品をもつ。木質部の遺存状態が良好であった大刀の柄はアカガシ亜属、鞘はヒノキであった。

#### 試料No.11～18

牧之原市堂ヶ谷遺跡は平安～鎌倉時代の山林寺院である。寺院の裏手で経塚2基が検出された。経塚からは銅製経筒1点、和鏡16面、短刀63振りと折り曲げられた大刀1振りなどが出土した。刀剣類に付随する木質部は遺存状態が良好なものが多く、7個木、8部位の樹種同定を行った。

3点調査した柄の樹種は、サクラ属、カバノキ属、カエデ属、ホオノキですべて広葉樹である。鞘は4点ともにヒノキである。鉄板に覆われていた飼はアカガシ亜属である。



写真13 No.11 堂ヶ谷 大刀42 飼 アカガシ亜属

#### 試料No.19～23

下の写真は試料No.7, 8と同じ賤機山古墳から出土した金銅製歩幅付飾金具である。この歩幅付飾金具は、鉄製の芯材が金銅製の八角鉢と木芯、筒状金具、釣り手金具を貫いて歩幅頭部まで達している構造となっている。調査した木芯5点はすべてマツ属であった。



写真10 No.12 堂ヶ谷 短刀43 柄 サクラ属



写真11 No.14 堂ヶ谷 短刀76 柄 ホオノキ

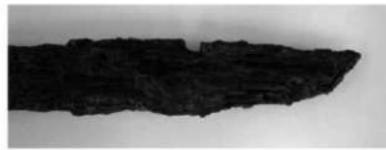


写真12 No.17 堂ヶ谷 短刀176 鞘 ヒノキ



写真14 賤機山 金銅製歩幅付飾金具（保存処理前）

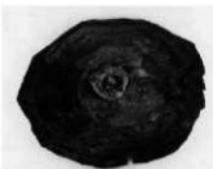


写真15 No.19 同・八角鉢木芯 マツ属

## 5 樹種同定根拠

樹種同定は、木材の3断面を生物顕微鏡によって40～400倍で観察し、現生標本および文献資料と比較しながら行った。判明した樹種は、針葉樹材のマツ属、スギ、ヒノキ、広葉樹材のカバノキ属、スダジイ、アカガシ亜属、ホオノキ、カエデ属、サクラ属の計9種である。なお、作製した標本は当研究所清水整理事務所保存処理室で保管している。

同定に利用した材の解剖学的特徴を下記に示し、各木材の細胞組織の顕微鏡写真を掲載する。

### マツ属（アカマツまたはクロマツ）

*Pinus P. densiflora or P. thunbergii* マツ科

写真20～22 賤機山古墳 八角鉢木芯 試料No.19

早材から晩材への移行は急で、早材、晩材ともに幅が広い。垂直樹脂道、水平樹脂道をもつ。放射假道管の内壁は肥厚し、その先端が鋸歯状となるのがアカマツで、先端がとがらずに丸みをもつのがクロマツである。分野壁孔は大型の窓状で通常1分野に1個存在する。

マツは本州、四国、九州の冷温帯から暖温帯にかけてもっとも普通に生える常緑の針葉高木。材は木理通直、重硬、樹脂分が多く水中での保存性が高いが、柱材などの大型の建築材として多用され始めるのは中世以降である。

### スギ *Cryptomeria Japonica Linn.f. D.Don* スギ科

写真23～25 五ヶ山B2号墳 鉢柄 試料No.1

早材から晩材への移行はやや急で晩材部の幅がやや広く、年輪は明瞭である。樹脂細胞は晩材部付近にやや接線方向に連なって散在する。樹脂細胞の内容物は暗褐色を呈することが多く、樹脂細胞の水平壁は平滑で薄いものが多い。分野壁孔は梢円形の大型で、開孔部がほぼ水平に開いた厚いレンズ状をしたスギ型で通常1分野に2個存在する。

スギは本州から九州、屋久島までの冷温帯から暖温帯に広く分布する常緑針葉高木。材は木理通直、割裂性がよく、軽軟で強靭、加工性に優れる。建築材、土木材、丸木舟、木棺、容器など様々な器種に用いられる。

### ヒノキ *Chamaecyparis obtusa Endl.* ヒノキ科

写真26～28 堂ヶ谷遺跡 短刀柄 試料No.17

早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅および年

輪幅が狭く均質な材である。樹脂細胞は晩材部に散在し、ときに接線状となる。樹脂細胞の内容物は赤褐色を呈することが多く、水平壁は通常肥厚し、結節状となることが多い。分野壁孔は円形で開孔部は幅の狭いレンズ状で斜めに位置しトウヒ～ヒノキ型で1分野に通常2個存在する。放射組織は単列で、細胞高は1～15である。

ヒノキは関東地方以西の冷温帯から暖温帯上部に分布する常緑針葉高木。材は木理通直、割裂性がよく、緻密、強靭で光沢美しく、芳香がある。建築材、仏像、箸など様々な用途に用いられる。

### カバノキ属 *Betula Linn.* カバノキ科

写真24～25 寺山14号墳 鉢長柄 試料No.5

40～90 $\mu\text{m}$ の丸い道管が単独あるいは放射方向に2～3個複合して、ややまばらに散在する散孔材。道管の穿孔は10～20本の横棒からなる階段状である。放射組織は同性で1～3細胞幅、細胞高は20前後である。

カバノキ属にはダケカンバ、ミズメ、ウダイカンバ、シラカンバなどの種があり、材構造は似ており種の識別は困難である。いずれの材も建築材や器具などに用いられる粘りのある堅い良質な木材である。

### スダジイ

*Castanopsis sieboldii (Makino) Hatusima* ブナ科

写真27～29 五ヶ山B2号墳 鉢柄 試料No.2

230～350 $\mu\text{m}$ の大道管が年輪のはじめに1～3列ならぶ環孔性の放射孔材。孔圈外の道管は小型、多角形で集団を成し火炎状となる。道管は單穿孔。放射組織は平伏細胞のみからなる同性、單列、細胞高は1～15。

スダジイは東北地方南部に広く分布する照葉樹林を代表する常緑高木。材はやや堅硬で緻密であるが、肌は粗く加工性はあまりよくない。出土材では農工具の柄、梯子、柱材などの建築材に用いられている。

### アカガシ亜属

*Quercus subgen. Cyclobalanopsis* ブナ科

写真30～32 堂ヶ谷遺跡 大刀柄 試料No.11

50～200 $\mu\text{m}$ の丸い道管が年輪に関係なく途中から始まり途中で終わるような放射孔材。道管は單穿孔で、道管と放射組織との壁孔は大型で柵状。放射組織には単列同性の

ものと広放射組織の2種類がある。

カシ類は、シノキ属と同様に照葉樹林を特徴づける種群である。材はきわめて堅硬で木理通直、緻密で割裂性があり、弾性強く強靭である。鋸、鉋、堅杵、斧柄などの農工具に多用される。

#### サクラ属 *Prunus* Linn. バラ科

写真33~35 堂ヶ谷遺跡 短刀柄 試料No.12

20~50 $\mu\text{m}$ の丸い道管が年輪界に添って1列帯をなし、その後は単独あるいは2~3個が放射方向に複合して、ややまばらに散在する散孔材。道管の直径は年輪界に向けてやや減少する。道管の穿孔は單一で、道管相互の壁孔は小型で密な交互状、道管内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は同性で1~2, 3列、4~22細胞高。道管との壁孔は小型で密な交互状である。

サクラ属には多数の種があり、特定するのは困難である。普遍的なヤマザクラの材はやや堅く緻密で保存性、耐朽性がよく、加工も容易で光沢美がある。

#### カエデ属 *Acer* L. カエデ科

写真36~38 鳥居松遺跡 大刀柄 試料No.6

20~80 $\mu\text{m}$ の丸い道管が単独あるいは放射方向に2~3個複合して、ややまばらに分布する散孔材。道管の穿孔は單一で、道管内部にはらせん肥厚がある。道管内部にしばしば褐色のゴム様物質が詰まることがある。放射組織は同性で1~4細胞幅、20細胞高前後。

カエデ属の代表的な樹種であるイタヤカエデは北海道から九州、朝鮮半島、樺太、中国まで広く分布する落葉高木。材は緻密で韌性があり、家具、器具、彫刻など様々な用途に用いられる。

#### ホオノキ *Magnolia obovata* Thunb. モクレン科

写真39~41 堂ヶ谷遺跡 短刀柄 試料No.14

60~120 $\mu\text{m}$ の丸い道管が単独あるいは放射方向に数個複合して、ややまばらに均一に散在する散孔材。道管の穿孔は單一で、道管相互の壁孔は階段状から対列。放射組織はほぼ2列の同性、20細胞高前後。

ホオノキは北海道から九州の冷温帶から暖温帶上部に広く分布する。成長が早く木理通直。材は軽軟で年輪が目立たず、肌目は緻密。耐朽・保存性は低いが、加工がきわめ

て容易。建具、箱物、版木、下駄など様々な用途に用いられる。

### 6 刀剣類の使用樹種

#### ① 大刀、短刀の柄

大刀の柄は賤機山古墳がアカガシ亜属、秋葉林第1号墳がクマシデ属、鳥居松遺跡はカエデ属であった。堂ヶ谷遺跡の短刀の柄はカバノキ属、サクラ属、ホオノキである。ホオノキはやや軽軟であるが肌目は緻密である。それ以外の材は堅硬、緻密で韌性があり、柄としては適材で実用と思われる材質である。

#### ② 大刀、短刀、槍の鞘

賤機山古墳、秋葉林第1号墳の大刀の鞘、堂ヶ谷遺跡の短刀の鞘はいずれもヒノキである。五ヶ山B2号墳の槍の鞘はスギである。

刀剣類の鞘には木理通直、割裂性がよく、加工性に優れるやや軽軟な針葉樹材を用材選択していることが明確である。

#### ③ 鋒の長柄

長柄4点のうち五ヶ山B2号墳出土蛇行鉗がスギ、同古墳出土鉗2点がスダジイ、寺山古墳出土鉗がカバノキ属である。材からいえることは、スダジイ、カバノキ属とともに堅硬、強靭であるため実用として用いることができる。しかし、木理通直であるがやや軽軟なスギを実用の柄に用いることはないであろう。スギの長柄の蛇行鉗は祭杖用であると樹種から推定できるである。

### 7 歩搖付飾金具八角鉢木芯の使用樹種

歩搖付飾金具八角鉢木芯5点はすべてアカマツまたはクロマツと思われるマツ属であった。賤機山古墳出土の馬具は朝鮮半島で作られた可能性が高いといわれているが、マツ属は日本列島にも朝鮮半島にも生育しているため木材から産地や製作地を推定することはできない。

## 8 木棺の仕口と使用樹種

木棺に伴う鉄釘の実測図を図5に示す。釘に遺存した木質を実体顕微鏡下で観察することで木材の3方向が明らかとなった。写真16～19に顕微鏡写真を示す。柾目と板目との識別は放射組織細胞の断面形状により確認できる。顕微鏡観察結果から木棺材は板目板であること、釘は板目板の木表から打ち込まれていることなどが確認できる。図6は釘に遺存した木質から判明した木棺の仕口と木取り復原図である。板の厚さは3.8cm、木棺の樹種はスギである。

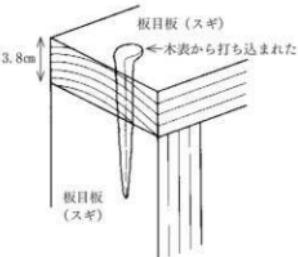


図6 木棺の木取りと仕口の復原図

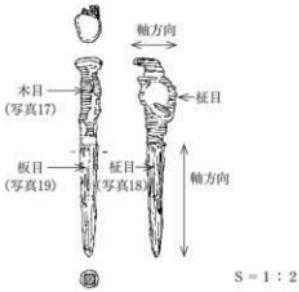


図5 №24 原分 釘262



写真16 木取りの境界

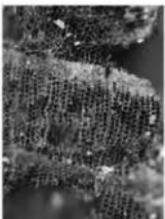


写真17 木口面



写真18 柾目面



写真19 板目面

## 9まとめ

木材の樹種から遺物の機能性をある程度推測することができる。なぜなら、古来人々は、目的とする用途に適した木材を選択し利用してきたからである。

木材は樹種によりその材質は実に多様である。硬堅であるのか、強靭であるのか、軽軟であるのか、加工は容易であるのか、耐湿性や保存性はどうなのかという材質そのものの評価とともに古代の人々にとっては、その樹木が近隣に自生しているか否かも重要な点である。

本論で取り上げた刀剣類の柄と鞘の用材選択は明瞭で、柄には硬堅で強靭、加工性もよい広葉樹材が用いられていた。鞘は木理直直、割裂性、加工性に優れる針葉樹のヒノキとスギが優先的に使われている。鉾の長柄は儀礼用にはやや軽軟なスギを用い、実用には硬堅で強靭な広葉樹材が選択されている。

賤機山古墳出土歩幅付飾金具と鳥居松遺跡出大刀はともに朝鮮半島製ではないかと指摘されている。八角鉢木芯はマツ属、大刀の柄はカエデ属である。カエデ属のうちイタヤカエデであればマツ属とともに両地域に自生しているため、木材から产地を推定することは困難である。使用された木材が日本特産のコウヤマキあるいはクスノキであれば、木材の流通という問題を考慮しなければならないが、製作地の議論はややこしくなるだろう。

最後に、本論を締めるにあたりご指導ご協力いただいた東北大学鈴木三男氏、袋井市（旧浅羽町）教育委員会、静岡市教育委員会に心より感謝申し上げる。

マツ属（試料No.19）

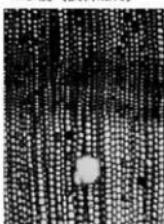


写真20 木口 ×50

スギ（試料No.1）

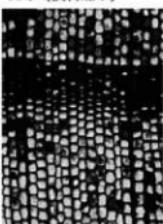


写真23 木口 ×50

ヒノキ（試料No.17）



写真26 木口 ×50

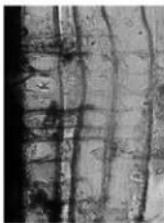


写真21 横目 ×200

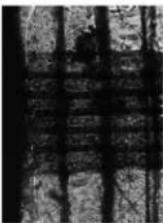


写真24 横目 ×200



写真27 横目 ×200



写真22 板目 ×100



写真25 板目 ×100



写真28 板目 ×100

## 参考文献

- 上山春平 1969 「照葉樹林文化」 中公新書  
 烏地 謙・伊東隆夫 1982 「国説木材組織」 地球社  
 烏地 謙・伊東隆夫編 1988 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣  
 鈴木三男・能城修一 1986 「新保遺跡出土加工木の樹種」  
 『新保遺跡 I 露生・古墳時代大溝編』 群馬県教育委員会  
 鈴木三男・能城修一 1997 「縄文時代の森林植生の復元と  
 木材資源の利用」 「第四紀研究 第36巻 第5号」 日本  
 第四紀学会  
 鈴木三男 2002 「日本人と木の文化」 八坂書房  
 辻井達一 1995 「日本の樹木」 中公新書  
 辻誠一郎 1989 「植物と気候」「弥生文化の研究 第1巻  
 弥生人とその環境」 雄山閣
- 辻誠一郎 1997 「関東平野における弥生時代以降の植生史  
 と人間活動」 「国立歴史民俗博物館研究報告 第72集」  
 国立歴史民俗博物館  
 辻誠一郎編 2000 「考古学と自然科学③ 考古学と植物  
 学」 同成社  
 中尾佐助 1966 「栽培植物と農耕の起源」 岩波新書  
 西岡常一・小原二郎 1978 「法隆寺を支えた木」 日本放  
 送出版協会  
 西岡常一 1988 「木に学べー法隆寺・薬師寺の美ー」 小  
 学館  
 林弥栄 1960 「日本産針葉樹の分類と分布」 農林出版株  
 式会社  
 安田喜憲 1995 「森と文明の物語ー環境考古学は語る」  
 ちくま新書

カバノキ属（試料No.5）



写真29 木口 ×50

スダジイ（試料No.2）



写真32 木口 ×10

アカガシ亜属（試料No.11）



写真35 木口 ×10



写真30 横目 ×50



写真33 横目 ×50



写真36 横目 ×50



写真31 板目 ×50



写真34 板目 ×50



写真37 板目 ×50

山田昌久 1993 「日本列島における木質遺物出土遺跡文献  
集成—用材から見た人間・植物関係史—」『植生史研究特  
別第1号』 横生史研究会  
亘理俊次 1949 「木材」『登呂 前編』 日本考古学協会編  
東京堂出版  
亘理俊次・山内文 1954 「木材」『登呂 本編』 日本考古  
学協会編 東京堂出版  
浅羽町教育委員会 1999 『五ヶ山B2号墳』

静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996 「角江遺跡II遺物編  
2」  
静岡県埋蔵文化財調査研究所 2004 「寺山古墳群」  
静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008 「原分古墳」  
静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010 「秋葉林遺跡II」  
静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010 「堂ヶ谷庵寺 堂ヶ谷  
経塚」

サクラ属（試料No.12）

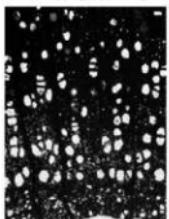


写真38 木口 ×50

カエデ属（試料No.6）

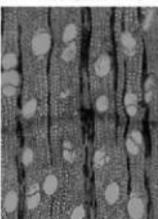


写真41 木口 ×50

ホオノキ（試料No.14）



写真44 木口 ×50



写真39 梓目 ×50

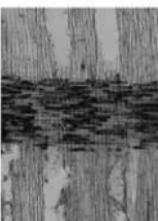


写真42 梓目 ×50



写真45 梓目 ×50



写真40 板目 ×50



写真43 板目 ×50



写真46 板目 ×50

## Identification of the Dry Wood Attached to Metal Objects

—Choice of Materials for Hilts and Sheath of Sword and Dagger—

Takaji NISHIO

**Summary:** I identify species of the dry wooden parts attached to metal objects excavated from tombs. Since those wooden parts were tough and had adhesion of rust, I used grinding method to make prepared specimens. I learn that the right wood was used for right position of sword and dagger. For example, a hilt was made with broad-leaved tree wood, which is hard, strong and easy to process. A sheath was made with needle-leaved tree wood such as *Chamaecyparis obtusa*, which is straight and easy to crack and process. As for staff of spearhead, one for ritual use is made with soft and light wood and one for practical use is made with hard and strong wood. Concerning the wooden parts attached to swords and harness, which are estimated to be made in Korea peninsula, they belong to naturally growing genus *Pinus* and *Acer*. By those wooden parts, the place where the objects were made cannot be estimated, but species of the wood can tell functions of the objects to some degree. Because, since old times, people have chosen and used the very wood that is fit to their purpose of use.

**Keywords:** identification of wood species, choice of materials, history of wood use, dry wood, hilt and sheath of sword and dagger

静岡県埋蔵文化財調査研究所

## 研究紀要 第16号

2010年8月27日

編集・発行 財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所  
〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20  
TEL 054-262-4261㈹  
FAX 054-262-4266

印 刷 所 みどり美術印刷株式会社  
〒410-0058 静岡県沼津市沼北町2-16-19  
TEL 055-921-1839㈹

BULLETIN  
of  
SHIZUOKA PREFECTURE RESEARCH INSTITUTE  
FOR BURIED CULTURAL PROPERTIES

---

CONTENTS

- Preface ..... *Shinobu AMANO*

ARTICLES, RESEARCH NOTE

Compilation and Examination of Radiocarbon Ages in the Paleolithic Era of the Foothills of Mt. Ashitaka-Hakone <i>Motoki MIYOSHI</i> .....	1
Archaeological Evaluation about Kashiwa-Touge Obsidian Outcrop in Shizuoka Prefecture <i>Satoshi ABE , Yuuki NAKAMURA, Motoki MIYOSHI, Ryohei SHIBATA</i> .....	9
Lithic Industry of the Late Incipient / Initial Jomon Period in the Eastern Shizuoka -The Change in Settlement Pattern Viewed from Lithic Industry- <i>Yuuki NAKAMURA</i> .....	19
Model Change of the Megazuka-Type Jar <i>Takashi IWAMOTO</i> .....	39
Meaning of the Horse Bit whit Ring-Cheekpieces with Riveted Tachigiki <i>Hiroshi OOYA</i> .....	55
Ancient Salt-Making Pottery in the West Part of Shizuoka Prefecture <i>Hajime OBAYASHI</i> .....	67
Caster's Permanent Address <i>Junji ADACHI</i> .....	73
Identification of the Dry Wood Attached to Metal Objects -Choice of Material for Hilt and Sheath of Sword and Dagger- <i>Takaji NISHIO</i> .....	87